

尋ねると、高綱は「戦場に出る以上は、生きては還らぬ覺悟で御座いますから、一度御目にかかつた上でと考へ、三日の間馬に騎り通して参りました。其の爲に私の馬は疲れて役に立ちません。之には閉口致します。」と答へた。頼朝は「義仲は必ず宇治、勢多の橋を墜して我が軍を拒ぐだらうが、其の方は眞先に立つて川を渡ることが出来るか。」と問ふた。高綱は「私は近江育ちで御座いますから、宇治川の川幅も淺瀬深みも心得て居ります。固より先陣は私の當然の役目と存じます。」と返答した。すると頼朝は「然らば此の馬に乗つて先陣せよ。」と曰つて生暖を高綱に與へ、尙「範頼や景季にも與へなかつた馬だから其の積りてゐてもらひたい。」と注意した。高綱は大いに喜んで「敵が敗れない中に、高綱が死んだと御聞きになつた場合には先陣を失敗したものと御諦め下さい。併し高綱が戦場に働いて居ると御聞きの時には、私が先陣をしたものと御考へ下さい。」と約束して別れを告げ、大急ぎで西に向つたが、駿河國で一同に追ひついた。

梶原景季は生暖の嘶き聲を聞いて、頼朝公が今頃出陣せられる筈はない。察する所範頼か義經か二人の中の一人に賜はるか、さもなければ法皇に献上せられるのであらうと考へ

たが、念の爲にと生暖を引いて來た馬別當に「誰の馬か。」と問質した。高綱の馬だと聞いて景季は大いに怒り、「景季にも下さらぬ馬を高綱に賜はるとは殘念至極。此の上は高綱と刺違へて鎌倉殿に損をさせよう。」と曰つて、待構へてゐた。高綱は其れとは知らずに歩みよると、景季が顔色かへて「生暖は上より下さつたのか。」と尋ねた。高綱は頼朝の注意はここだと悟り、笑ひながら「範頼公や梶原殿に下さらない馬を高綱などに賜はるものか。併し此度の事は自分の爲ではないと考へたから、厩から盗出して來たのだ。後日御答めでもある時には、共に御説をしてくれ給へ。」と答へた。そこで景季の怒も解けて、「そうならば自分も盗出せばよかつたに、正直では良い馬は手には入らない。」と機嫌を直して共に進んだ。

さて尾張の熱田で二手に分れ、範頼は三萬五千の兵を率ゐて勢多に向ひ、義經は二萬五千の兵に將として宇治に向つた。梶原父子、佐々木高綱、熊谷直實、畠山重忠等は義經の部下に加はつてゐたのである。

義仲は百騎ばかりの兵を以て法皇を守り、残りの兵を二手に分ちて宇治と勢多とを防が

せた。義経は宇治に着すると、川岸に造らせた高檣に登り、平等院の太鼓を取寄せて之を打つた。兵士等が聲を静めると、「人に先だつて進む者、勇ましく戦ふ者は、一々其の名を書留めて鎌倉に知らせることにする。又川を渡る者が出たらば、其れを敵に射殺させない様に注意せよ。」と命令を下した。すると畠山重忠、熊谷直實等が橋板のはずしてある宇治橋の橋桁に進出て敵を射始めた。畠山重忠が川を渡る用意をしてゐる處に、馬を川中に騎入れた者があつた。見れば梶原景季である。之に續いて佐々木高綱は騎出した。どうなることかと見てゐると、佐々木は後より聲をかけて「梶原殿、馬の腹帯が緩んで居る様だ。流れの早い此の川で鞍踏返しては大變だ。」と言つた。景季はさうかも知れないと思ふて馬を留め、馬の腹帯を締直した。其の間に高綱は駆抜いた。梶原は欺かれたか残念と一生懸命に馬を泳がせたが、相手の馬は生啖騎手は高綱、早い流を物ともせず、一直線に進んで向ふの岸に上り、「佐々木四郎高綱宇治川の先陣仕つたり。」と名乗を上げた。磨墨は稍劣つてゐた爲か流渡にして稍川下の對岸に駆上つた。高綱が景季を欺いたのは善くないが、若し先陣をしなければ主君頼朝を欺くことになる。其處に同情すべき點がある爲か、世間の

人も左程高綱を憎まない。さて畠山重忠は五百餘騎を引へて川を渡り、續いて義経方が對岸に攻寄せた爲に、義仲方は散々に打敗られて京都に退いた。

義仲は之を聞き、此の上は法皇を奉じて北陸道に通れるより道なしと決心して、法皇に行幸を迫つた。法皇は已むを得ず御殿を出ようとなさつた時、義仲方の者がはせつけて、義経方が伏見まで攻込んだことを知らせた。そこで義仲は兵百騎ばかりを率ゐて出て行つた。併し義経に攻立てられて敗北し、御所へ引返したが、御門が閉ちてあつた爲に這入ることが出来ない。それでは勢多に向はふと僅か十餘人を従へて近江の粟津まで進んだ。ところが勢多に向つた義仲方の大將今井兼平(中原兼遠)も範頼に攻破られて引返して來た。義仲は兼平の手を握つて「京都で自殺をと思ふたが、御前に會ひたさに此處まで來た。併し最早兵士も無くなり、身に重い創も受けて、常には何とも思はない鎧を重く覺える様になつた。捕へられては武士の恥だから自殺をしよう。」と話した。兼平は「今頼朝は東國に據り、平家は西國に居ります。あなたは之から越前に行つて北陸を御取りなさい。私は此處に留まつて敵を拒ぎませう。」といつて、散つてゐた兵を集めて四五百騎を得た。其處に範頼の大

軍が攻寄せて来た爲に、兩人は激しく戦つたが、又もや敗れて主従二人のみとなつた。そこで兼平も今は致方なしと覺悟を定め、「兼平一人を千騎萬騎と思召して向に見える松原の中で、心靜に御自害なさいませ、其の間私に此處で敵を防いだ上御供を致します。」と急がせた。義仲は松原目指して馳行く道中、運悪く馬が足を泥田に踏込んで動かなくなつた。兼平はどうしてゐるか。」と見返つた時、範頼方から放つた矢に眉間を射られて、義仲は馬の上に倒しに伏し、やがて首を刎ねられた。時に年は三十一歳であつた。

之を見て兼平は籠に残る八筋の矢で八人を射殺した後、太刀を引抜き大音をあげて、日本一の剛の者今井兼平が主人の御供に自害する有様を見習へよ。」と曰ひ終るや太刀の切鋒を口に啣へたまま馬より逆さに落ち、喉を貫いて討死した。

義仲の首は京都に送られた。義經は其の首を獄門にかけたが、何者の所爲か獄門の木の下に札を立て、

信濃なる木曾の御料に汁かけて
たゞ一口に九郎義經

と書いたものがあつたといふことである。今義仲の墓は天津に在るし、兼平の墓は粟津の松原から三町ばかり離れた田の中に在る。

平氏攝津の福原に據る 曩に太宰府に奔つた平宗盛は再び安徳天皇を奉じ、平家の一門を率ゐて四國に渡り、讃岐の屋島に行宮を造つて、一時此處に據つた。此の頃は西國の武士も多く集まつて来て、平家の勢が盛んになつたのみならず、京都に於ては義仲が頼朝に征伐せられるといふ事件が起つた爲に、宗盛は行宮を攝津の福原に移して、再び京都に入らんとする形勢を示した。之も壽永三年正月で義仲が戦死の月である。行宮のあつた場所は確かには分らないが、今の神戸市の西部で、嘗て清盛が別莊を造つた處である。生田森を東門とし、一の谷を西門とした。北は山を限りとし、南は海に至るまで、幅は狭いが、東西の長さは約三里。此處に平氏十餘萬の軍勢が陣取つた。須磨の浦風に打靡く赤旗馬上ながら松影を往来する冑武者、嘸勇ましくもあり、又麗しい光景であつたであらう。

一の谷の合戦 後白河法皇は平家が福原に行宮を移したことを御聞きになり、範頼、義經兄弟に平氏を討つべき命令を御下しになつた。範頼は五萬六千餘の兵を率ゐ、大手の大將

として生田森に向ひ、義経は畠山重忠、熊谷直實等以下二萬餘の兵を率ゐる搦手の大将として一の谷に向ふことゝなつた。

範頼は京都から西國に向ふ本街道を進んで、生田森に向つたが、義経は丹波路を進んで一の谷に向つた。有名な鶴越の山道にかゝる前、義経は兵を分つて、一隊を一の谷の西に向はせ、自分は鶴越に進んだ。此の鶴越の本道を越すと、福原に出るのであるが、此の方面はいづれ平家が用心をして居ると察したのみならず、目的が一の谷であつたから、義経は故ら中途から殆んど道もない山中をたどつて、一の谷の後の山の上に出た。鷲尾經春が案内したのは此の時である。見下せば今や平家は東西の二門に兵を向けて一心に防いで居るが、山手に對しては、一向用意をしてゐない。義経は山を下つて攻めようとしたが、如何にも峻しい山である。鷲尾經春に「人や馬が下りられるか。」と尋ねると、經春は「迎も人馬の通れる處ではありません。偶に鹿が通るだけで御座います。」と答へた。義経は「鹿も四足、馬も



四足である。鹿が通るならば、馬も通れる筈だ。」といつて、試みに數匹の馬を落して見たすると或馬は傷つき、或馬は無難に麓まで下りた。そこで義経は馬だけを下しても斯の通りである。騎手が注意すれば大丈夫だ。自分を見習へ。」と指圖して眞先に立つて駈下りた。一同も其の後に續いて駈下りた。此の時畠山重忠は三日月といふ名馬に乗つてゐたが、馬に怪我でもさせては不都合だと、馬を脊負ひ杖をつきながら駈下りて大力の程を示した。幸に一人の怪我人もなかつたので、義経は早速兵を整へ、側面から一の谷城を攻立て、遂に城に火を放つた。不意を食つて平家は大狼狽、其の中に生田森の東門も破られ、一の谷城の西の城戸も破られて總崩れとなつた。そこで宗盛は安徳天皇を御船に御移し申して海に泛び、復讐岐の屋島に向ふことゝした。平家の軍勢も先を争ふて船に乗り、沖に向つて漕出したが、茲に哀れなのは平敦盛である。敦盛は清盛の弟經盛の子で、此の時まだ十六歳。位は従五位下であつたが、何の役にも就いてゐなかつたから、無官大夫といはれてゐた。大夫とは五位の別名である。唯一人船に乗後れた爲に騎馬の儘海に入り、沖の船に泳ぎつかうとあせつてゐた。所が義経の部下熊谷直實が之を見て、海岸に馳せつけ、

扇を揚げて、塵きながら大音聲に呼ば、つて、それへ落延び給ふは平家方の大將と見奉



る。何故見苦しくも敵に後を見せ給ふか。引返して勝負あれ。斯く申す某は日本一の剛の者熊谷二郎直實なり。と呼懸けた。敦盛は之を聞いて、少しも臆せず、馬の轡を向直して海岸に引返し、勇ましくも熊谷に斬りか、つた。心得たりと熊谷は之を受流した。面倒なりと敦盛は太刀を投捨て、組付いた。やがて兩人は共に鎧をふみはづして馬から落ちた。かくて暫く組合ふてゐたが、熊谷は遂に敦盛を組敷いて刀に手をかけた。よく見れば思ひがけない美少年であつたから、熊谷も之を殺しかねて、其の姓名を尋ねた。敦盛は唯

早く首を取れといふのみであつたが、名乗りもせず殺されて、名もなき武士と思はれては恥辱であらう。との熊谷の言葉によつて、我が身の上を語つた。熊谷は助けたいと思ふたが、假令自分が助けても、源氏方の手にかゝるに相違ないと考へて、終に其の首を斬つた。敦盛の墓は今も須磨の海岸近くに在る。

さて一谷の戦ひが終ると、一時源氏の兵を纏めて、範頼は鎌倉に還り、義経は京都に留つてゐた。

範頼九州に向ふ 頼朝は範頼の爲に法皇に御願して、其の位も役も上げていたゞいたが、義経の爲には御願しなかつた。之は義経が鎌倉の指圖を受けずして何事も自分の思ふ儘に取計つた爲に、頼朝の機嫌を損じてゐたからである。併し法皇は軍功ある者を其の儘にして置かれなさいとの思召で義経の位を範頼同様にし、法皇の御殿に昇ることもお聴になつた。義経は謹んで御受け申した上、此の事を頼朝に知らせた。頼朝は「自分に相談もなく御受けしたのは不都合だ」といつて立腹し、遂に平家征伐の大將を範頼に命じて義経には申付けなかつた。さて此の頃宗盛は安徳天皇を奉じて讃岐の屋島に居つたが、弟知盛は別れ

て長門の彦島に本陣を構へ、下關海峡を守つてゐた。九州の武士の多くは平家方で知盛の軍に加はつて居る者も多かつた。此の時例の維盛は屋島を逃げ出し、紀伊の高野山に登つて一時坊様になつたが、後に還俗して一生を終つた。さて頼朝は先づ平家の恃にしてゐる九州を征服して其の逃先を塞ぐ積りであつたと見て、壽永三年八月範頼に大軍を授けて九州に向はせた範頼は進んで周防國に入つたが、知盛が下關海峡を守つてゐる爲に、すぐ九州に向ふことが出来なかつた。幸にも豊後の人が源氏に心を寄せ、船を出して迎へに来た爲に範頼は豊後國に渡ることが出来た。併し兵糧も十分ではなく、部下の兵士も關東に還ることを望むものが多いので、範頼は餘程困つてゐた。

逆櫓の論 京都に留まつてゐた義經は、範頼の様子を聞いて、ぐづぐづして居れば平家の勢が強くなるばかりだと考へたから、自ら進んで屋島を攻めんことを法皇に御願した。法皇は若しも平家に心を寄せる者が京都で亂を起す場合がありはしないかとの御心配から思ひ止まらせようとなさつたが、義經が「早く屋島を攻めなければ範頼も或は敗れて京都に還る様なことになるかも知れません。若しさうなれば平家は容易に滅すことが出来

ません。」と申上げて頻に御聽を願つた爲に、遂に法皇は平家の攻撃を義經に御命じになつた。義經は早く平家を滅したいとの一念から御願したのであるが、頼朝は又義經が我儘を始めたと考へて不愉快に思ふたことであらう。さて義經は伊勢義盛、那須與一宗高、佐藤繼信等以下數多の軍勢を率ゐて京都を出發し、今の大阪市附近から四國の阿波に渡らうとした。時は壽永四年の二月であつた。船の用意は出来たが、義經の部下は東國武士ばかりで、海にも海戦にも馴れてゐない爲に、船を出すのを危ぶむ者が多かつた。此の時軍事の監督役としてついでゐた梶原景時は進み出て、船を御出しになるならば、逆櫓を船に備付けるがよろしからう。」といつた。元來櫓は船の艦にだけあるのであるが、舳先にも之をつける、逆櫓といふのである。梶原は船を進める時には艦の櫓を漕ぎ、若し退く必要のある時には、すぐ逆櫓で漕ぎもどさうと考へたのである。義經は「退く用意をして置くやうでは、戦争には勝てない。逆櫓は無用だ。」と答へた。梶原は腹を立て、

「進むべき時に進み、退くべき時に退き、身を全うして敵を滅すのが、眞の名將である。」

進むことのみを知つて退くことを知らないのは、猪武者だ、と言放つた。義経も亦立腹して、

「猪か鹿か知らないが、義経は進んで敵を倒す愉快だけを知つて居る。若し梶原が大將軍になつた時には、百挺千挺の逆櫓をつけるがよいが、義経の船に逆櫓は汚ららしい。」と罵つて刀の柄に手をかけた。梶原も負けてはゐない。

「梶原の主人は頼朝公だけだ。」

と曰つて弓に矢を番へた。棄て置けば大喧嘩になる所であつたが大勢の者が兩方をなだめて漸く喧嘩は鎮まつた。併し折悪く南風が強吹始めた。船は海岸に吹上げられて破損するものが多かつた。其の修繕に取掛つたが、風は益々強くなつて木を折り、小石を飛ばす程の勢になつた。翌晩になると風は烈しいが、北風に變つた。すると義経は「風が強いが追風であるから、船出の用意をせよ。」と命令した。所が今度は船頭連中が「此の波風に船出は無理で御座います。少し静まるのを御待ち下さい。」と言出した。義経は「大將の命令に従はない者は朝敵だ。朝敵を射殺せよ。」と指圖じた。伊勢義盛は弓に矢を番へて船頭を

嚇した。船頭等は船を出しても、出さないでも死ぬのは一つだと観念して、五艘の船を留意した。義経は真先の船に乘込み、篝火一つ焚きつけさせ、他の船は之を目當にして後に續かせることとした。之は敵に船の數を知らせまいとの用心からである。五艘の船に乘込んだものは僅か百五十人。烈風の中を漕進んだが、常ならば三日を費す海路を僅かに四時間で阿波の東海岸に無難に到着した。海上から岸を望むと赤旗が見える。さては平家方が守つて居るのである。先づ之を追散らさなければならぬと考へて、義経は「船に入れた馬は數時間船中に立ちすくんでゐたのであるから、足が自由に動かないだらう。足慣らしの爲に馬を海に入れ、船について游がせよ。」と命令した。一同が指圖通りにして岸に近づくと、義経は真先に上陸し、士卒を勵まして戦ひ、一戦にして敵を追散らした。土地の者に地名を尋ねて、其の場處が勝浦(今の徳島市附近)であることを知り、「勝浦とは縁起の良い名だ、平氏に勝つに相違ない」と喜勇んで進む道中、味方についた百人ばかりの阿波武士を案内者として山越しに讃岐に撃入つた。

屋島の合戦 義経は駒を早めて屋島に近寄つたが、何分にも味方は小勢。それと敵に悟

られまいと屋島近くの民家に火を放つた。宗盛は兵を留めて之を禦がせ、自分等は安徳天皇を奉じて船に乗移つた。義経は城に迫つて火をかけた。平家方は一心不亂に防いたが、折柄の西風に吹立てられて、城は猛火に包まれ、烟は天をも焦すかと思はれるばかり、防ぎかねて何れも船に乗移る。義経は之を追ふて海岸近くに迫つた。併し陸と海との戦であるから抄々しい勝負はなかつた。かかる所に一艘の小舟が近寄つて来た。見れば其の舟には一本の竿が立つてゐて上の端に日の丸の扇が挿込んである。其の側には天女かとも思はれる。上品な官女がゐる陸に向つて手招してゐる。義経は島山重忠に「若しも義経があの官女を捕へようとするならば、敵は自分を射殺す計略であらう。さうでなければ扇を射て見よといふのかも知れない。兎に角其方あの扇を射落せよ」と命じた。重忠は「射損じては源氏の恥辱で御座いますから」と辭退した。そこで色々詮議の上、那須與一宗高を呼出して之を命じた。宗高は元來下野の人、年はまだ十七歳の若者であつたが、弓の上手。空飛ぶ鳥を三羽狙へば二羽は射落す程の腕前であつた。流石の宗高も若し射損じてはとの心配から、一度は辭退申ししたが、義経の下知に背くならば御供は許さぬ。鎌倉に歸れ」と

叱りつけられたので、然らば兎に角射て見ませう。」と立上り、馬に跨つて海岸に出たが少時的の扇が遠いので馬を、海中に騎入れた。船の平家も陸の源氏も鳴りを静めて見守つて居る。與一の責任は實に重大である。折悪しく風が烈しくて小舟は波に揺られて居る。扇の位置が定まらない。與一は目を閉ちて氏神那須大明神に祈願した後目を開くと、嬉しや風も少しは静まり、扇も射易くなつて居る。勇んで弓に矢を番へ狙ひ定めてヒヤウと放てば矢は呻りを立て、過たず要際一寸許りおいて扇の骨を射切つた。矢は海に入り、扇は舞上つて春風に揉まれながら波の上に着た。源氏は鞍を叩いて大喜び。平家は舷を叩いて褒めたてた。是ぞ名高い「扇的」那須與一の美談として、幾百年の後までも語り傳へられるのは誠に道理である。さて前の小舟と入違に平家方の船が岸に向つて漕寄せた。其中には義経と勝負を決しようとして上陸したのもあつたが攻立てられて引返した。義経は之を追斬つて海に入ると、平家方は熊手を以て義経を引懸けようとした。義経は之を防ぐはずみに弓を海中に落した。家來が「弓は御棄てなさい」と云ふのも聞かず、義経は右手で熊手を防ぎながら、左手の鞭で弓を掻寄せ、取上げて陸に引上げた。家來どもは口を

揃へて、「假令金銀作の弓なりとも、大切な御體には替へられない。なぜ危険を冒してまであの弓を御拾ひなさつたか。」と問詰めると、義經はニッコリ笑つて、「弓を惜む譯ではない。若し義經の弓が鎮西八郎殿の様な強い弓ならば故らに捨てても敵に示しもしようが、此の弱い弓を拾はれては、笑草の種にしられると思ふたからだ。」と答へたので、一同は「成程」と感心した。「義經の弓流し」とは此の事で、義經が些細な事にも注意してゐた證據になる話である。宗盛は義經を取逃したのを残念に思ひ、平家第一の勇將能登守教經に「上陸して義經を射殺せ。」と命じた。教經は倔強な侍三十餘人と上陸して戦ひを挑んだ。源氏は義經を本陣に留めて置いて、畠山重忠等五十餘人の勇士が櫓を並べて駆出した。流石は教經。矢先に向ふ者を盛んに射殺し遂に義經が四天王の一人たる佐藤繼信を射落した。教經が部下の少年菊王丸が駆け寄つて其の首を取らうとするのを見て、弟忠信は菊王丸を射倒した。今度は忠信の部下が菊王丸の首を切らうと駆け出すと、教經は切らせまいとて、菊王丸の手を握つて船に投入した。併しあまり強く投げすぎた爲に、菊王丸は即死した。其の隙に忠信は兄を肩にかけて陣屋に連戻つたが、間もなく絶命した。教經は尙も手強く戦つ

たが、源氏の勇士に攻立てられ船に移つて漕去つた。宗盛も此上は致し方なしと諦めて屋島の東方二里ばかりの志度浦に漕寄せた。併し又もや義經に攻立てられ、九州を目指して落延びた。其の後へ梶原景時以下の源氏方は百四十餘艘の船に乗つて屋島に着いた。嘸景時は不面目、義經は得意であつたことであらう。

義經、景時の先陣争 宗盛は九州を指して船を進めたが、既に範頼が豊後に入込んでゐて、今にも攻寄せるとの噂を聞いた爲に、船を下關海峡附近に浮べて決戦の覺悟を定めた。

義經は屋島の合戦後、凡そ一箇月屋島にゐたが、三月二十二日に船を出して平家の後を追ふた。平家の船は下關の東なる壇浦の海上に集つて待構へた。三月二十四日といふ日に源平の兩軍は勝負を決することとなつた。其の日になると、例の梶原景時は義經に

「今日の先陣は私に仰せ付け下さい。」と願つた。義經は

「義經があるからには先陣は義經がする。」と答へた。すると梶原は

「いや、あなたは大將軍だから軽々しく進まれてはいけませんまい。」と曰つた。義經は

「大將軍は兄上である。義經も御前方も共に兄上に奉公の身の上で、別に變りはない」と答へた。梶原は立腹して

「此の人は武士の頭になれる人ではない。」

と言ひ放つた。義經も亦怒つて、

「其方は日本一の無禮者だ。」

と罵つて、刀に手を懸けた。梶原も刀の柄に手を懸けたが、家來共が二人の間に分け入つて、漸く喧嘩を鎮めた。梶原はよく喧嘩を吹きかける男である。

壇浦の合戦 壽永四年三月二十四日正午頃から愈々壇浦の海戦が始つた。源氏の船は八

百餘艘、平家の船は五百餘艘。宗盛は天皇を普通の兵船に遷し奉り、天皇の御座船には士卒を乗らせた。之は源氏を御座船に招寄せて置いて夾撃にしようとの計略であつたので

ある。所が平家方の中に、此の計略を義經に知らせたものがあつた爲に、義經は其の謀

には陥らなかつた。併し源氏は海戦には不馴の爲に、初は旗色が良くなかつた。然るに潮

の工合で平家の船は急流に押流される様になり、又曩に宗盛の計略を義經に知らせた武士

が部下三百餘艘の船を率ゐて源氏の味方に附いた。午後三時過まで戦つたが平家は終に敗

北した。知盛は急いで天皇の船に乗り、「見苦しい物があるならば海に棄てませう。」と指

圖しながら自分も船の掃除を始めた。二位尼(清盛の)などが「軍の様子は」と尋ねると、知

盛は「間もなく珍しい東國武士が御船に参りますよ。」と答へた。二位尼はもう是迄と覺悟

を定め、天皇の御手を取つて、舷に立つた。時に天皇は僅に入歳、怪しんで「何處へ行くのか。」と御尋ねになつた。二位尼は涙を流しながら「此の御船に於ては危険で御座います。併し此の波の底には極樂淨土と申す結構な都が御座いますから、其處へ御供を致します。」と申上げ、天皇を抱き奉つて海に投じた。之より世は第八十二代後鳥羽天皇の御代となつた。安徳天皇の御母も(清盛の)續いて海に入られたが、源氏が救上げた。宗盛は子清宗と共に海に投じたが、元來の臆病者。命惜しさに遊ぎまはつてゐる所を源氏が引上げて捕虜にした。之を聞いて知盛は船中で自殺した(四十歳)。能登守教經は矢種の盡きるまで戦つて

わたが「雑兵を殺しても手柄にはらなない。義経を」と考へて目を配つてみると、運よく義経の船と摩違つた。早速其の船に飛乗り、名乗をあげて詰寄つた。義経は組合つては叶はないと思ふたか、弓長二つばかり隔てた隣の船に飛移り、ニツコリ笑ひながら舷に突立つた。教経は力こそ勝れたれ、義経の早業には感心して「よくも飛んだり」と褒めたてた。「義経の八艘飛」と云ふ話は此の早業から思付いた作話である。さて教経は今を限りと船中を荒廻り、力自慢の源氏の侍三人が一時に飛懸ると「教経の御供をしろ、いいひながら一人を蹴つて海に沈め、残る二人を左右の脇に搔挟み、念佛を唱へて海の底へ沈んでしまつた。時に年は二十六歳。平家には珍らしい勇士であつた。

平氏の滅亡 壇浦の戦ひに平家の一族は或は大抵自殺し、或は海に沈んだに拘らず、臆病者の宗盛父子は源氏の捕虜となり、義経に送られて同じ年の六月に鎌倉に入つた。さて宗盛は頼朝の目通りに引出されると、卑怯にも一命を助けて貰ひたいと願つた。頼朝は自殺させようと思ふて、俎の上に大きな魚を置き、之に庖刀を添へて、宗盛の前に差出させた。併し宗盛は其の意味を覺とらなかつた。そこで頼朝は宗盛父子を義経に連れさせて

京都に上らせ、其の道中で殺させる手筈にした。義経は二人を連れて西に向ひ、近江國に入つて後、親子を別々の場所で殺し、其の首を京都で獄門に梟した。宗盛は三十六歳、清宗は十七歳で殺されたのである。斯様な次第で一時は飛ぶ鳥をも落とす程の勢であつた平家は、清盛が太政大臣になつた時から十九年目、頼朝が兵を擧げた時から六年目に滅びた。

安徳天皇の御母は壇浦で一旦海に入られたが、源氏が救ひ上げて、京都に御送り申した。此の時御年は二十九歳であつたが、出家して尼様になり、京都近くの山寺に一生を送つて、第八十四代順徳天皇の御代に五十七歳で崩ぜられた。

安徳天皇の御遺骸は、壇浦の戦ひの後、土地の者が海中に求めて之を壇浦近くの地に葬り奉つた。今下關市にある阿彌陀寺の御陵が即ちそれであり、其の側に在る官幣中社赤間宮は天皇を祀る社である。

第二十六章 武家政治の始と源氏の三代

頼朝、義經の不和 壇浦の合戦以前から豊後にゐた範頼は、平氏滅亡の後も豊後に留つて九州を平定し、壽永四年九月京都に還り、間もなく鎌倉に凱旋した。所が情なくも此の時は既に頼朝が義經を憎んで鎌倉には寄付ないやうにしてゐた時であつた。一體平家を滅すに就いては、範頼にも功はあるが、逆も義經の軍功には及ばない。頼朝が鎌倉を動かすして平家を滅し得たのは、主として義經の手柄といはなければならぬ。然るに頼朝は一谷の戦の後、先づ義經を憎み、壇浦の合戦後は更に甚しく之を憎む様になつた。之は義經が一々頼朝の指圖を受けなかつた爲ばかりではない。梶原景時が逆櫓の論や先陣争ひを遺恨に思ふて、壇浦の合戦後手紙を鎌倉に送つて義經を頼朝の爲に恐るべき我儘者のやうに告げ、程なく鎌倉に還つて直接頼朝に義經を悪く言つたからである。それで義經が宗

盛父子を送つて鎌倉に入らうとした時に、頼朝は北條時政を小田原の東の酒匂まで遣つて宗盛父子を受取らせ、義經が鎌倉に入ることを許さなかつた。義經は憎むべき景時の仕業と悟つたが、兎に角兄の怒を解かなければならぬと思ふて、鎌倉の西に在る腰越まで進み、涙ながらに一通の書面を認めて、之を大江廣元に送り、其の執成によつて、頼朝の心を和げようとした。此の書面が世に名高い腰越狀で、今も之を讀む人をして涙を催さしめるものである。頼朝は之に對して少しも取合はなかつた、義經は致方なく、命ぜらるる儘に、復宗盛父子を連れて京都に向ひ、前に述べた通り、兩人を首にして都に上り六條堀河館に暮してゐた。やがて頼朝は土佐坊昌俊を京都に遣はして義經を殺させようとした。義經はそれと悟つて昌俊を呼出し、詮議をすると、昌俊は「私は元奈良の僧でありますから、奈良の寺々に參詣する考へであります。」と曰つた。義經は笑つて「其方は頼朝の命によつて、義經を殺しに來たに相違ない、捕へたいとは思ふが、苟も兄の使であるから、義經からは手出しはしない。其方が攻めかけるならば、何時たりとも相手にならう。」と言聞かせた。すると昌俊は頼朝の使ではないといふ誓の證文を書いた上、之を焚いて其の灰

を飲んだ。義経は偽りと知りながら『手出しをしないなら相手にはなれない。』と曰つて引取らせた。其の夜昌俊は六十餘騎の兵を率ゐて義経を堀河館に襲ふた。此の時館にゐた家來は僅か七人であつたが、義経はすぐ様門を開いて撃つて出て、散々に敵を破つた。昌俊は逃出して鞍馬山に匿れた。所が鞍馬山の坊様が昌俊を捕へて義経に送つた。義経は昌俊に向つて『誓を破つた天罰。思知つたか。』と責めたが、昌俊は『御主人の命に従ふものには天罰が中る筈はない。』と答へて一向平氣である。義経が怒つて頬を打つと、昌俊は顔色も變へず『此の顔は私の顔ではない。御主人頼朝公の顔だ。』と曰つて落付いてゐる。義経は其の剛膽を愛して助けてやらうと思ひ、『其方は鎌倉に還りたいと思ふか。』と尋ねた。昌俊は『いや。鎌倉出發の時から、生きて再び還るとは思ふてゐない。不幸にして捕へられた以上は、早く死にたい。早く斬れ。』と答へた。そこで義経は之を殺し、家來等と共に『主人の爲には、誰もかくあるべきだ。』と褒合つた。さて此の事が鎌倉に知れると、頼朝は自ら京都に攻上らうとした。義経は自分が京都に居れば、復戦争の爲に市中に迷惑をかけるからと思ひ、九州に行く積りで、今の大阪附近から船を出した。所が大風の爲に進ま

れない。已むを得ず上陸して大和に入り、吉野山に匿れた。然るに吉野の僧兵が攻寄せた爲に、此處を去つて大和の國內を流浪し、遂に復京都に還つて隠れてゐた。併し頼朝の捜索が嚴重であつた爲に、従者と共に山伏姿に身を變へ、北陸道を経て奥州に下り、再び藤原秀衡の世話を受けることとなつた。謠曲や芝居で名高い安宅や勸進帳は、義経二度目の奥州下りから思付いて仕組んだ拵へ事である。

諸國に守護、地頭を置く 頼朝は義経の行方を知らうと苦心したが、容易に知れない爲に、餘程心配をしてゐた。所が大江廣元は『今天下は平定致しましたが、まだ方々に悪者が匿れてゐませう。其等の者が亂を起す度に、關東から兵を出しては、兵も疲れ、人民も苦みます。此の際國々に守護と地頭を置いて、悪者どもを鎮めさせることにすれば、居ながら天下を治めることが出来ませう。』と申述べた。之を聞いて頼朝は大いに悦び、早速朝廷に奏して後白河法皇の御許しを受け、國々の守護、地頭として自分の家來を配つた。時は後鳥羽天皇の文治元年(壽永四年)十一月であつた。守護の主なる職務は軍事と警察とで、亂を起す者がある時には、自ら兵を率ゐて之を征伐し、又盜賊、人殺などを捕へて之を罰

したものであり、地頭は土地に割當て、一定の兵糧米を徴集することを主なる務めとしてゐたものであつて、共に義經の行方を知る上にも、後に頼朝が將軍となつて天下の政治をする上にも、大層便利を與へたものである。

義經衣川館に自殺す 藤原秀衡は陸奥、出羽の二國に跨る領地を支配してゐたが、どうせ何時かは頼朝が攻めに來るだらうと心配してゐた。所に戰術に優れた義經が來たから大層喜んで之を衣川館に置き、親切に世話をした。頼朝は之を知つて、わざ／＼使を以て『義經を鎌倉に送れ。』と命じた。併し秀衡は義經を大切に守つてゐた。然るに文治三年の冬秀衡は病氣に罹り、子泰衡に『義經公を主人と心得、其の御指圖に従つて國を治めよ。』と遺言して歿した。頼朝は義經が陸奥に居る間は不安心でたまらない。そこで又使を泰衡に遣はして『義經を殺せ。』と命じた。後白河法皇も頼朝の願によつて同様の院宣(上皇)を泰衡に賜はつた。併し泰衡は之に應じなかつた。すると頼朝は泰衡征伐を朝廷に申出た。攻めさせて置けばよいのに、泰衡は考へが足りなかつた。急に頼朝が恐ろしくなつたと見え、父秀衡の遺言を反古にして、文治五年兵を遣はして義經を衣川館に攻めさせた。義經

の武勇と機敏とを以てすれば、討手を破つて此の場を逃れる位の事は出來たであらう。併し生き永らへても頼朝の怒を解くことは出來ない。其の上萬一兄と戰ふやうなことになる。弟の道に背くと諦めたものと見え、義經は家來に討手を防がせて置いて佛間に入り請はれるまゝに妻と娘を刺殺した後、自分も心靜かに自殺した。年はまだ三十一歳であつた。此の時まで義經の側を離れなかつた鷲尾經春は勇ましく戰つて討死した。

泰衡は義經の首を黒塗の櫃に入れ、良い酒に浸して之を頼朝に送つた。頼朝は和田義盛梶原景時を首實檢の役人として腰越まで遣つて之を受取らせた。義盛は元來義經方の人であるから、首を見て同情の涙を流した。之は固より當然であるが、流石の景時も『自分故に此の有様』と思ふた爲か、長く視つめることもし得なかつたといふことである。今相摸の藤澤に在る白旗明神は義經の首を祭つた所である。然るに世間には、『此の時義經は衣川を逃れて今の北海道に入込み、蝦夷人を征服した後更に滿洲に渡つて清國皇帝の先祖になつたものだ。』といふ様な噂があり、『今も北海道に義經の社が澤山にあつて、アイヌに信仰せられてゐるのは其の證據だらう。』などといふ噂がある。併し之は信ずるに及ばない噂話

て、畢竟古人が義經を惜むの餘り、あらぬ噂を立てたものである。其の上徳川時代の末頃露西亞に對する用心の爲に、内地から人を遣つて北海道の探検や守備をさせた時、昔から北海道は日本の土地であつたとの考へを深くさせた爲に、故ら義經の蝦夷落を眞實らしく言觸らしたものである。其れや之の關係から今に前の様な噂が残つて居るのである。

頼朝の奥州征伐 頼朝は義經の首を得たゞけでは満足せず、奥羽地方をも平定して、全國を治めやうと考へた。そこで『泰衡は義經を隠して置いた罪ある上に、之を殺すことが遅かつた罪がある。』と曰つて、文治五年七月二十八萬四千の大兵を三手に分け、一隊は濱街道、他の一隊は北陸道から進ませ、自分は本隊を率ゐて奥州街道を進んだ。泰衡は之に對して其れ／＼用意をして防いだ、次第に攻寄せられて手出しが出来なくなつた爲に、平泉の屋敷を焼捨て、逃げ出し、今の北海道に渡る積りで、羽後の二井田(北秋)まで落延び、此處に住んでゐた家臣河田次郎といふ者の家の世話になつてゐた。頼朝は其の後を追ふて今の盛岡市附近の厨川まで進んだ。泰衡は書面を頼朝に送つて降參を願つたが、頼朝は之を許さなかつた。河田は頼朝の勢を恐れて、不心得にも主人泰衡を殺し(三十五歳)

其の首を携へて頼朝の所へ來た。頼朝は首を受取つた後『其方の力を假らずとも、泰衡の命は自分の手の中にあつたのである。主人を殺して手柄顔する不忠者。』と叱りつけて殺してしまつた。時に同年九月であつた。そこで頼朝は家來を留めて奥羽地方を治めさせ、自分は鎌倉に凱旋した。是に於て久しく亂れてゐた日本の國々は皆頼朝の支配を受ける様になつた。

頼朝征夷大將軍となる 奥羽征伐より三年の後、即ち建久三年三月に後白河法皇は六十歳で崩御になり、後鳥羽天皇が政をなさることとなつたが、其の年の七月に天皇は頼朝を征夷大將軍となさつた。時は紀元千八百五十二年で、平家が亡びてから七年の後である。さて征夷大將軍とはもと『蝦夷を征伐する大將軍』の意味で、坂上田村麻呂が始めて任ぜられた役であるが、頼朝から後の征夷大將軍は武家の長として、天下の政治を行ふ役と變つてしまつたのである。其れが爲に征夷大將軍の行ふ政治を武家政治といひ、武家政治を行ふ役所を幕府といふのである。幕府とは昔將軍が征伐に出掛けた時、必要に應じて何處にても幕を張つて本陣を作り、將軍は其の中に居つて指圖をした爲に起つた名である

頼朝は武家政治の元祖で、鎌倉に幕府を置いたが、頼朝以後も同様で、鎌倉幕府は百四十餘年間続いたのである。世間で鎌倉時代といふのは此の間を指すのである。

一體日本の政治は天皇が親らなさるのが當然であるが、嘗て藤原氏が御幼少の天皇を立て、思ひの儘に政治をしたことがある。後三條天皇の御親政、白河上皇の院政によつて藤原氏の政治は止んだが、程なく勢を得た平清盛が復自分勝手な政治をして世の中の憎みを受け、終に平家は滅されてしまった。之を滅したのは頼朝であり、又頼朝の部下は守護。地頭となつて、日本全国に廣がつてゐたから、後鳥羽天皇は天下の政治を頼朝に御委せになるのが便利であると召されたものであり、其の頃の人も亦之を不思議に思はなかつたのである。斯様な次第で一度起つた武家政治は、後には殆んど世の中の一つの習慣のやうになつて、日本の國柄には合はないものであるに拘らず、明治天皇以前まで凡そ六百年も続いたのである。後には武家政治の爲に日本は随分苦しめられたのであるが、頼朝が天下を平定する以前には、地方の政治は紊れてゐて、朝廷の命令も地方には行届かず、日本國中誠に不取締であつた。然るに頼朝が將軍(征夷大将軍の略語)となつてからは、其の命令は全

國に行届く様になり、國民は安心して其の職に就くことが出来る様になつた。其れが爲に政治を頼朝に御委せになつた後鳥羽天皇の御取斗ひは、其の頃の世の中の有様から見れば至當の事であり、又頼朝が武家政治を行つたのも、我が國體から見れば不自然なことであるが、已むを得ない事として、誰も頼朝を責めるものはないのである。其の上感心にも頼朝は、天下の政治は御預り申したが、常に皇室を尊敬した人で、或る坊様が頼朝に差出した手紙に、頼朝を尊んで君と書いてあるのを見て、頼朝は「君と申せば天皇陛下のことである。如何に頼朝を尊敬する爲とはいへ、陛下に對して畏多い。以後君の字を用ふことは相成らぬ」と禁じた程であるから、國民の本分を忘れた人として褒められて居る。頼朝武士道を奨勵す 頼朝は將軍として天下の政治を行ふまでの出世をしたが、藤原氏や平家が贅澤、我儘の爲に或は衰へ、或は滅びたことを考へて、武士の守るべき道を失はない様に用心した。即ち「武士は儉約を守り、武藝を磨き、卑怯未練の行ひを慎み、名譽の爲には命も惜まない心掛が必要である」と曰つて始終武士連中を勵ました。或時頼朝が或寺に參詣した時に、家來の一人が其の土地の者に命じて御馳走を頼朝に差上げる様にし

ようとした所が頼朝は之を聞いて、「頼朝の寺参りの爲に、儉約を破らせてはならない」と曰つて、之を止めさせたこともあつた。又頼朝の家來に藤原俊兼といふものがあつた。學問もあり才智にも富んでゐた爲に、頼朝に愛せられてゐたが、至つて見え飾ることの好きな人であつた。或年の冬頼朝に召出された時、俊兼は十餘枚の着物を着飾つて出た。之を見て頼朝は俊兼の刀を出させ、其刀を以て俊兼の着物の袷を切つて後に、「其方は利口者だが、儉約といふことを知らないのか。其方よりも領地の少い武士でも善く儉約を守つて御金持になり、多くの家來を召抱へて忠勤を勵んで居るものは少くない。其方は金の使方を知らない不届者だ。此の後は贅澤な事を止めるがよからう。」と叱りつけた。俊兼は「御仰せに従ひます。」と答へて恐れ入つた。側にゐた大江廣元等まで「うつかかり贅澤な真似も出来ないぞ。」と用心したといふ話も傳はつて居る。斯様な譯から鎌倉武士は衣食住共に之を質素にして、一心に行ひを慎み、武藝を練るやうになつた。随つて鎌倉武士は遊戯まで勇壯なものを選び、馬に騎りなから的を射るとか、犬を射るとか、或は相撲をとり、或は狩をすることを樂んだものである。頼朝が將軍になつた翌年の如きは、頼朝自ら多くの諸

將士を率ゐて下野の那須野に狩に出かけ、又富士の裾野にも行つて、大仕掛な狩をした。音樂や花見や舟遊などに遊び暮した人達とは大變な相違である。

頼朝、範頼を殺す 頼朝は偉い政治家で、常に皇室を尊敬し、巧に人を使つて、善く天下を治めた人であるが、惜しいことには、何か自分の氣に合はない事があると、深く其の人を疑ふ癖があつた。嘗て頼朝が石橋山から房總半島に逃げて兵を募つた時、凡よ二萬の兵を率ゐて其の味方になつた上總介廣常といふ者があつた。此の人は富士川の對陣の後、頼朝が平家の後を追ふて攻上らうとしたのを止めた一人で、中々考の深い武士であつたが、初の頼朝の味方につくのが、他の武士よりも少し遅かつたのと、馬に乗つた儘頼朝の前に出た無禮な行があつた爲に、頼朝は之を疑ひ、梶原景時に命じて廣常と其の子（良常）とを殺させ、廣常の弟二人を牢に入れた。其の後廣常が上總の或社に鎧を納めたといふことを知らせた者があつた爲に、頼朝が之を取寄せて鎧櫃を開いて見た所が、其の中に「此の鎧は頼朝公の武運長久を祈る爲に納める。若し此の願が叶ふたならば、土地を社に寄進しよう。」といふ意味の書付があつた。頼朝は之を見て始めて疑を晴らし、之程主

人思ひの廣常父子を殺したのは自分の大失敗であつたと後悔して、廣常の弟二人を赦したことがある。然るに其れにも懲りず、既に述べた通り梶原の讒言を信じて、兄思ひの義經を殺し、更に弟範頼をも殺した。其の起りは富士の裾野の巻狩に在るのである。

前に述べた通り、建久四年五月頼朝は弟範頼に留守居をさせて置き、仁田四郎忠常、工藤祐經等を始めとして多くの武士を召連れ、鎌倉を出發して富士の裾野に行つて狩をした。此の時十二歳であつた子頼家も御供をした。往復の日數をも加へると凡そ一箇月もかかつたのであるから狩の間は裾野に設けためいゝの假小屋に寢起しながら、毎日狩をしてゐたのである。狩が終りに近寄つた時、有名な曾我兄弟の敵討があつた、之は誰も善く知つて居る話だから委しくは述べないが、建久四年から十七年前に、伊東祐泰といふ人が工藤祐經に殺された。其の時祐泰には一萬(五)宮王(三)といふ二人の子供があつたが、二人は母に連れられて曾我祐信の世話を受けることとなつた。一萬は十三歳の時、曾我十郎祐成と名を改め、宮王は十七歳にして名を曾我五郎時致と變へた。此の兄弟は何時か父の敵を討たうと心懸け、常に武藝を練つて其の時節を待つてゐた。所が頼朝が富士の裾野に狩

を始め、敵の祐經も其の御供をして居ることを知つたので、二人は「今日こそ」と勇み立ち、夜番と偽つて狩場に忍入り、祐經の寢室に這入つた。見れば祐經は酒に酔ふて熟睡してゐる。兩人は「睡つてゐる者を殺すのは死人を斬るも同様だ。」といつて、故ら強く床を踏んで目を覺ませ、「祐成、時致兩人が親の敵を討つぞ。」と呼びつた。祐經は驚いて枕刀を執つたが、二人は刀を揮つて見事に祐經を斬殺した。狩場は忽ち大騒動。「狼藉者を逃すな。」と進出て殺されたものは少くなかつたが、終に兄十郎は仁田四郎忠常の手にかゝつて殺された。時に年二十二歳。弟の五郎は之を見て「此の上は頼朝をも」と考へ、其の陣屋に迫つたが、運わるく捕へられて終に二十歳で殺された。

此の敵討の騒動が其れから其れと傳はる中に間違つて、頼朝も殺されたといふ評判が鎌倉に傳つた。頼朝の妻の政子は之を聞いて大層泣悲んだ。そこで範頼は政子を慰める爲に「假令兄上は亡くなられても、範頼がゐますから、鎌倉は大丈夫です。御安心なさい。」と曰つた。さて頼朝は狩を終つて六月六日に鎌倉に還つて來たが、政子から範頼の慰め言葉を聞いて、又もや範頼を疑ひ始めた。折悪く其の頃「範頼には兄を滅す野心がある。」との

尊が鎌倉に廣がつた。範頼は心にも無い噂を立てられて迷惑に思ふたが、棄て、は置けな
 いといふ譯で、自分に少しも野心のないことを示す誓ひの書面を認め、大江廣元の手を經
 て差出した。見れば其の中に『源 範頼』と書いてある。頼朝は『範頼は 弟ではあるが
 他の家の養子になつたものだ。それに遠慮もなく源と書くのは不都合だ。』と曰つて、尙
 疑つた。範頼は義經よりも氣の弱い人であるから、非常に心配をしてゐた。範頼の家來の
 當麻太郎は主人の心配を見兼ねて、早く様子を知らうと考へ、頼朝の寢室の床下に忍び入
 つた。不幸にも頼朝に覺られて、遂に捕へられた。太郎は其の譯を申述べたが、頼朝は
 範頼が自分を殺させる爲に忍び込ませたものに相違ない』と曰つて、太郎を殺し、範頼を
 伊豆の修善寺温泉の修禪寺に逐遣つた。範頼の家來連中は頼朝を怨んで戦争の用意を始め
 た。頼朝は梶原景時等に命じて之を攻殺させ、更に景時の言葉を用ひ、景時等を遣つて範
 頼をも攻めさせた。範頼は不意に攻寄せられた爲に鎧を着る暇もなく、弓矢を以て之を防
 ぎ、矢種が盡きると、寺に火を放つて自殺した。其の墓は今も修善寺に在る。斯様にし
 て頼朝は大切な弟や家來を殺して、源氏の壽命を短くすることには氣がつかかなかつた。

偉い人には不似合な事である。

頼朝薨す 建久九年後鳥羽天皇は御位を御子第八十三代土御門天皇に譲つて上皇となら

れた。其の年頼朝は馬入川(相模川)の橋の落成式に臨み、其の歸り路で馬から落ちた。之
 が病氣の本となり、翌正治元年に五十三歳で薨じた。將軍を勤めたことは八年である。言
 ひ傳へによれば頼朝は身の丈は低かつたが、割合に頭も顔も大きく、上品な容貌で、大き
 くて綺麗な聲を持つてゐた人である。智慧も深く、落着きもあつて、何事も成功の見込が立
 つた後でなければ始めないといふ性質であつた。幼少の時から屢々難儀に遇ひながら、少
 しも挫けず、一代の中に紊れてゐた國內を鎮めたのは實に大手柄である。併し功勞のある
 弟や家來を惜氣もなく殺したのは取返しつかない大失敗で、後の世には此の失敗を惜
 むの餘り、頼朝を憎く思ふ人も少くはない。其の墓は今も鎌倉に在るが、將軍まで勤めた
 人の墓とは思はれない程に、見すばらしいものである。

源頼家と政子 頼朝薨じて後、其の子頼家は十八歳で家を継ぎ二十一歳で將軍となつた
 が、利口な人ではなかつた。其れが爲に幕府の政治は、頼朝の妻政子が北條時政、同義時

大江廣元、梶原景時等と相談の上で行つた。政子は頼朝が薨じた後、髪をおろして尼になつてゐたから、尼將軍と云はれてゐた。政子は北條時政の娘で、義時の姉である。男勝りの女で、富士の裾野の卷狩の時、頼朝は子頼家が鹿を射殺したのを喜んで、わざ／＼使を鎌倉に送つて、政子に此の事を知らせた。すると政子は「小さくとも頼家は將軍の子である。一匹や二匹の鹿を射たとて、故ら使を立てるには及ぶまい。」と曰つて、使を驚かしたことがある。



頼家は父にも母にも肖ない愚かな人で随分善くない行ひをした我儘者であつた。將軍になることが出来たのは全く親の御蔭であつた。政子は度々諫めたが、頼家は一向心をしめなかつた。其の上將軍になつた翌年病氣に罹つた。そこで政子は見込の無いものと諦めて、時政と相談の上、廢して其の弟實朝を將軍にすることとし、無理に頼家を伊豆の修禪寺

に移した。程なく僅か十二歳の實朝が將軍に任ぜられた。北條時政は執權となつて、幕府の政治を行ふこととなつた。執權とは將軍を助けて總ての政治を取締る重い役である。時政は尙も源氏を弱めて北條氏を盛んにする考へから、其の翌年竊に人を遣り、頼家が風呂場に居る時に索を飛ばして其の頸に掛け、之を捕へて刺殺させた。頼家は將軍たること僅かに二年の後、凡そ一年間を不愉快に伊豆に送り、二十三歳で殺された。頼家は愚にもせよ時政の孫である。將軍を止めさせた上は殺すには及ぶまいに、之を殺した時政は鬼といはうか、蛇といはうか、實に殘酷な人である。政子が其の儘にして置いたのは父であるからであらう。

梶原景時の最後 將軍實朝の話に移る前に、述たいのは景時である。景時は鎌倉権五郎景政の子孫で、武藝にも學問にも長じ、和歌も巧であつた上、石橋山の戦の時頼朝を救ふた爲に、頼朝の信用を受けた。義仲征伐の時には義經に従つて宇治に向つたが、義經以下大勢の者が鎌倉に軍の様子を報告したが、何れも混雑中のことであるから、委しくはなかつた。然るに景時の報告は最も綿密で、捕虜の姓名、首の數まで書いてあつた爲に、頼

朝は大層喜び、益々景時を信任する様になつて、一谷の合戦には範頼の軍を監督させ、義經が平家を討つ時にも亦其の軍を監督させた。見所のあつた人ではあらうが、何分にも自分の氣に合はない者があると、無い罪を拵へてまで頼朝に讒言し、之を殺させて、愉快としてゐた悪者である。義經、範頼以外にも景時の爲に命を失つた者は少くなかつた。頼朝が上總介廣常を殺させた時の如きも、景時は卑怯にも廣常と雙六の遊をしながら、不意に躍りかゝつて騙討にしたのである。頼朝の家來の中には景時を憎むものが多かつたが、何分にも頼朝の信任が篤い爲に、下手をすれば命を取られる心配から、心ならずも、景時に睨まれない様に用心するばかりであつた。頼朝が薨じて頼朝の家來が家を繼いだ後、景時は結城朝光といふ人を憎んで、有りもしない悪口を作つて頼朝に告げ、之を殺させようとした。朝光は之を聞いて心配の餘り友人に相談した。すると景時を悪者と見抜いてゐた人達が六十六人申合せて、景時の悪巧を頼家に訴へる書付を差出した。頼朝が之を示すと、流石の梶原も辨解が出来ず、一族を引連れて自分の領地相模の一宮に退いた。間もなく景時は竊に鎌倉に還つたから、頼朝は怒つて之を逐出し、鎌倉に在る景時の屋敷を焼拂はせた。景

時は復一宮に逃歸り、子景季等を引連れて京都に向つた。其道中駿河國で、土地の武士と戦つて死んだ。景季等も殺された。其の時は頼朝が薨じてから一年の後であつた。

將軍實朝と時政 頼朝が將軍職を廢せられて後實朝は將軍となつたが、まだ十二歳の子供であるから、時政の屋敷に暮して居り、政治は執權時政と相談の上尼將軍政子が行つてゐた。其れが爲に其の頃の時政は非常な勢であつたが、時政は之にも満足せず、將軍實朝を廢して自分の女の婿(平賀)を將軍にしようと考え、竊に兵を集めた。政子は之を聞いて大いに怒り、家來に命じて、先づ實朝を時政の屋敷から、弟義時の家に移させ、次に實朝の命令だといつて時政を攻める用意をする様に見せかけた。すると時政が集めた兵士は皆去つて實朝に従つた。そこで時政は申譯の爲に髪を剃つて伊豆の北條に隠居し、十年の後七十八歳で亡くなつた。時政に代つて執權となつたのは、政子の弟義時であるが、之が又父時政に劣らない悪者であつた。

さて時政が伊豆に退き、義時が執權になつてから五年の後に、土御門天皇は上皇となられ、其の御弟が立つて第八十四代順徳天皇となられた。此の時實朝は十九歳で、中々利

口な人であつたから、北條氏の我儘を憎んでゐるが、何分にも侍となるべき一族も、力となるべき家來も亡くなつた後であるから、うつかり事を始めては却つて災難を受けると諦めて、一向世の中の事を知らないもの、様に見せかけ、和歌を作ること、役や位の陞るのを樂にしてゐた。實朝の歌に

山はさけ海はあせなん世なりとも

君に二心我れあらめやも

といふのがある。之は『假令山が裂けたり、海の水が涸れる様な世の中になつても、私は陛下に對して少しも不心得は持ちません。』といふ決心を示したものであるから、實朝も頼朝と同じく皇室を尊敬する心の深かつた人であるといふことが知れる。官位に就いては、頼朝は一向氣にかけなかつたが、實朝は自分から願つても高い官位に陞らうとした人である。嘗て大江廣元が『功なくして高位高官を望むのは不可ません。』と諫めた所が、實朝は『自分も其れを承知して居るが、逆も源氏は長くは續かないから、せめて自分が高位高官に陞つて、家の名譽にしやうと思ふのだ。』と曰つて廣元の言葉に従はなかつたことがある。

實朝の官位は次第に陞つて、二十七歳の時に右大臣になつた。實朝は大いに喜び、其の翌年即ち承久元年正月二十七日の午後八時頃、源氏の氏神たる鶴岡八幡宮に參詣して右大臣拜賀の式を擧げること定めた。さて其の日になると大江廣元が心配して『夜の御參詣は不用心ですから、晝の御參詣に改められては如何でせうか。』と勧めたが、『夜の御參詣はらの習慣です。』といふものがあつた爲に、實朝は時刻を替へなかつた。すると廣元は『私はずいぞ涙をこぼしたことは有りませんが、今日はなぜだか頻に涙が出ます。何か災難に御逢ひにでもなるといけませんから、御召物の下に鎧を着けて御參詣下さい。』と願つた。併し『右大臣といふ重い役の人が裝束の下に鎧を着けることは昔からありません。』と申し上げた者があつた爲に、之も亦普通りの裝束を用ふるこゝなつた。廣元は心配しながら退き、實朝は家來を呼んで髪を結はせたが、其の時自ら髪毛を抜いて、笑ひながら『之を記念にせよ。』と曰つて其の家來に渡した。其の上庭の梅を觀て、實朝は

出でていなば主なき宿となりぬとも

軒端の梅よ春を忘るな

といふ歌を詠んだ。此の歌は『自分が出て行けば、事によると此の家は主人無しになるかも知れないが、庭の梅は春になつたら忘れずに花を咲かせよ』といふ意味である。あれや之やを考合せると、實朝は死を覺悟してゐたものである。時刻になると實朝は車に乗つて家を出て、北條義時は劔を持つて其の御供をする役であつた。生憎其の夜は雪降りて大分積つてゐた。鶴岡の社に近づくと、いつになく鳩が變な聲で啼き出した。樓門前で實朝が車を下りやうとした時に劔の柄が折れた。門を入ると義時は俄に『氣分が悪くなりましてから御免を蒙ります。』と曰つて、劔を外の人に渡して御供をさせ、自分は家に歸つた。さて實朝は社に參詣し、拜賀式をすませて石段を下りて來ると、傍の銀杏の樹の影から躍り出たものがあつた。忽ち實朝を斬り、劔を持つてゐた御供をも殺し、『別當公曉父の敵を討取つた。』と大聲に呼ばり、實朝の首を持つて逃出した。變を聞いて門前に控えてゐた多くの武士が馳付けたが、曲者の影も形も見えない。どうした事かと騒いで居る中に、『曲者は公曉だ。』といつた者があつた。『それ公曉を搜索せよ。』と手配を始めたが、公曉は乳母の夫の家に行かうとする途中で殺された。時に十九歳であつた一體公曉とは何者か。

公曉は頼家の子で、頼家が殺された時には四歳であつたが、其の後政子の指圖で坊様に成り、一時近江の三井寺にゐたが、後に政子の命によつて鶴岡八幡の別當を勤めてゐた。誰から聞いたものか、頼家が殺されたのは實朝と義時の仕業であると思ひ、折を見て二人を殺さうと心懸けてゐたのである。公曉が二人を親の敵と思ふ様にしたのは誰であるか。確なことは今に分らないが、拜賀の日に、劔を持つべき役を他人にして、中途から歸つた事から推察すると、多分義時であらう。

兎に角實朝は公曉の爲に二十八歳で殺されて、源氏の血統は絶え、頼朝が將軍になつてから、僅か三代二十八年で源氏の將軍は終りとなつた。併し鎌倉幕府はまだ後まで續き、北條氏は名ばかりの將軍を拵へて、實際の政治をする様になつたのである。

第二十七章 承久の亂

名みの將軍 實朝が殺された後、尼將軍政子は執權義時と相談の上、後鳥羽上皇に御願して、上皇の皇子の御一人を將軍にしようとした。併し上皇は「源氏の將軍が絶えたからには、天下の政治は京都の朝廷で爲すべきだ。」との御考への浮んだ時であつたから、御許しにならなかつた。そこで二人は更に左大臣九條道家の子頼經を迎へて鎌倉幕府の長とすることを願出た。其の御許しを受けて承久元年七月頼經を鎌倉に迎へたが、頼經は僅かに二歳であつたから、すぐには將軍にも任せられず、政治は政子や義時の手にあつたのである。其の後頼經は九歳の時に始めて將軍に任命せられたが、名みの將軍であつた。こゝが北條氏の狡猾な處で、若し北條氏が自ら將軍になるならば、源氏の將軍職を奪ふことになる爲に、故ら京都から將軍を迎へて幕府の體裁をつくり、北條氏は執權となつて、

實際の政治をする様にしたのである。殊に最初迎へた頼經は頼朝の妹の曾孫に當ること
を思へば、北條氏が世間の譏を免れることに苦心したことがよく分る。



頼經以後鎌倉の將軍となつた人は五人あり、其の内の四人は親王であつたが、何れも實際の政治には關係なく、幕府の體裁を整へる爲の飾物であつたのである。

義時、上皇の命を奉ぜず 後鳥羽上皇は義時が我がもの顔に幕府の政治をするのを不愉快に思召され、折を見て政治を朝廷に取返さうと思召し、諸國から名ある刀鍛冶を京都に御呼寄せの上、刀劍を鍛はせ、或は上皇附の武士を増しなどして萬一の場合の用意をして居られた。併し若しも義時が上皇に對して柔順であつたならば、急に戰爭にもならなかつ

たらうに、義時は柔順に上皇の御命令に従はなかつた爲に、承久の亂が起るやうになつた。即ち或時上皇が熊野に御參詣なされた時、仁科盛遠といふ鎌倉方の武士が、子供を連れて御行列を拜觀してゐた。上皇は此の親子に御目をつけさせられて、上皇附の武士となされた。二人は喜んで京都に留まつた。之を聞いて義時は盛遠の領地を取上げてしまつた。そこで上皇は義時に命じて、其の領地を返させようとなされたが、義時は御命令に従はなかつた。

又謠や舞の上手な爲に、上皇の御所に入出するた龜菊といふ者があつたが、其の領地の地頭は龜菊を侮つて、納めるべき租税を横取してゐた。そこで上皇は義時に向つて、其の地頭を罷めさせるやうに御命じになつたが、義時は「地頭は朝廷が頼朝に御許しになつたものであり、頼朝は更に其の職を部下の勇士に與へたもので御座いますから、義時が勝手に罷めさせることは出来ません。」と申上げて、上皇の御命令に従はなかつた。

嘗さへ快く思つていらつしやらない義時が、一度ならず二度までも御命令に従はなかつた爲に、上皇は非常に御立腹の末、北條氏を征伐して鎌倉幕府を倒さうと決心せられた。

そこで承久三年四月急に順徳天皇をして位を御子第八十五代仲恭天皇に譲らしめられた。其れが爲に此の時には一時に三人の上皇が出来たのである。之は鎌倉征伐の御相談相手を多くしようとの御考へからである。土御門上皇は「まだ北條氏を討つべき時ではありますまい。」と御諫めになつたが、後鳥羽上皇は御聞入れにならずして、近畿地方の兵を御召しになり、尙國々に北條氏を討つべき院宣を御下しになつて、一萬八千近くの兵を御集めになつた。

承久の亂 京都の様子が鎌倉に傳はると、政子は武士を集めて「今北條氏征伐の院宣が下つて居るが、頼朝以來の將軍の恩を忘れない者は御恩報じを爲すべき時であらう。併し院宣に従ひたいものを止めはしないから、早速上皇方に參れ。」と告げた。武士連中は皆幕府の爲に命を棄てても働かう。」と誓つた。すると義時は、子が出陣すれば父を留め、父が出るならば其の子を残して置くやうにして、東海、東山、北陸の三道から京都に兵を上らせる手筈を定めた。其の總數は十九萬人。其の總大將は長男泰時。義時は鎌倉に居つて指圖をすることにした。

さて總大將泰時は親に肖ない善い心得の人であつた。軍評定の定まる前、父に向つて「故なくして上皇が鎌倉征伐を思立たれる筈はありますまい。何か上皇の御怒に觸れてゐる事が有るのでせうから、父上は京都に上つて、其の御怒を解くやうになさるがよろしい。若しそれでも猶御咎めのある時には、北條氏一同刑罰に處せられても憾みとは思はれません。萬一罰を御宥し下さるならば、山奥に入つて一生を送つてもよいではありませんか。臣下の分を忘れて兵を京都に差向けるのは畏多いこととあります。」と諫めた。併し義時は京都に兵を差向けるのは、天皇や上皇を御苦め申す爲ではない。斯様な事になつたのは、常に御所に入出入する者が悪いからである。其の悪者を懲らしめる爲である。」と曰つて其の諫めを用ひなかつた。そこで評議が定まると、泰時は心ならずも出發はしたが、翌日唯一人鎌倉に還つて來た。義時は怪んで「何事が起つたのか。」と尋ねると、泰時は「戦争の手配は既に御指圖を受けましたからよろしいが、萬一上皇や天皇が陣頭に御立ちになつて、親ら鎌倉勢を御征伐なさるやうな場合には如何致しませうか。其の御考を承る爲に還りました。」と答へた。すると義時は「善い事を尋ねに來た。君に向つて弓を引くのは畏多い。」

御親征の場合には兜を脱ぎ、弓の弦を切つて降参の上、如何様の御處分でも受けなければならぬ。併し唯兵士を差向けられるだけならば、千人が一人になるまでも戦へ。」と命じた。此の言葉を見ると、我儘な義時も日本に生れた有難さに、皇室の尊いことを心得てゐたもので、多少日本人らしい所のあつたことが分る。泰時は再び鎌倉を出發して西に向つた。

京都では兵を美濃、尾張、及び北陸方面に出して東軍を防がせられたが、皆敗れて還つて來た。彼の仁科盛遠は此の時北陸道に向つて戦死した。鎌倉勢は次第に進んで、勢多や宇治から京都に攻入らうとした。此の時泰時は宇治に向つたが、折柄の雨降りて、宇治川は物凄い程の勢を以て濁水が流れて居り、對岸には官軍が詰めかけて居る。そこで泰時は夜水練の達者な家來に川の淺瀬を調べさせて、渡り得ることを知り、命令を傳へると、春日貞幸、佐々木信綱(佐々木高綱の子)、其の子重綱等を始めとして先陣を心懸てゐた人々が我後れじと馬を川中に騎り入れた。早い流れと官軍の矢に苦しめられて、貞幸の手下十七人は忽ち溺死した。貞幸も馬を射られて水中に落込んだが、腰刀を以て鎧などを切棄て、身

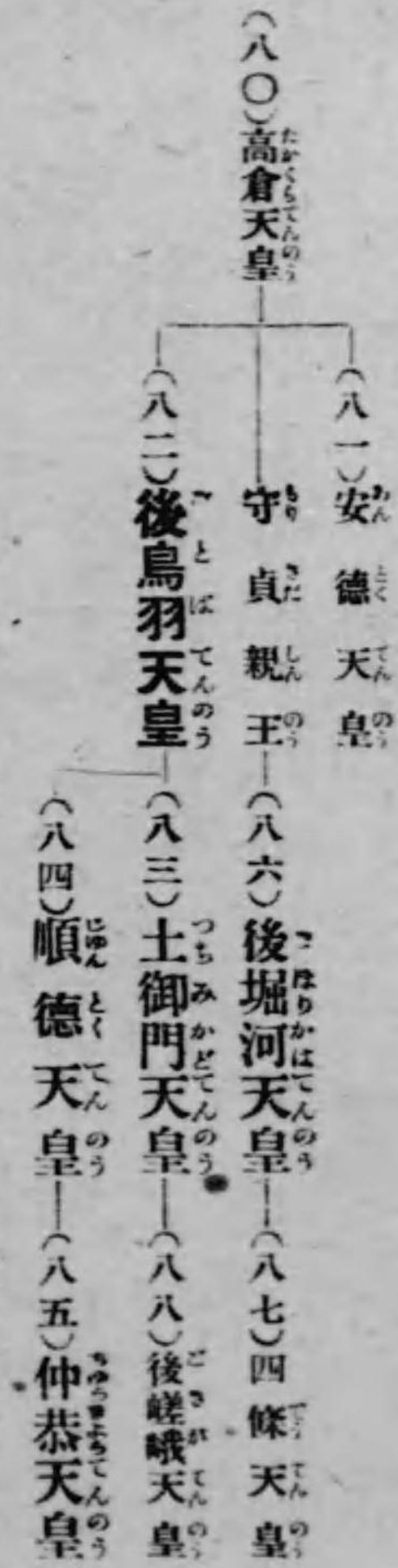
輕になつて浮び出た。併し岸に引上げられた時には既に正氣は無かつた。そこで泰時は手づから貞幸の體數箇所に灸をすえて、漸く息を吹き返させた。一方佐々木信綱父子は川の中島まで進み、柳の木影に休みながら、後を見れば續く味方は大抵水中に落込んでしまふ。前を見れば濁流を隔て、官軍が頻りに矢を放つて居る。進むも退くも共に危険である。併し先陣の功を他人に譲るのは残念と思ひ、子重綱に向つて「其方は本陣に引返して、大將泰時殿に軍勢を御貸下さるやうに頼め」といひつけた。重綱は早速引返して泰時に父の言葉を傳へた。泰時は重綱に食事をさせた上、勇士を興へて再び川を渡らせた。重綱は鎧兜も著けず、馬にも騎らずに川を泳いで中島に還つて來た。

泰時は我が子時氏を召して、「此の様子では味方は敗れさうである。今は大將も討死すべき時であるから、其方は早く對岸に渡つて命を捨てよ。」と命じた。時氏はすぐさま六騎の部下と共に川に騎り込んだ。他の武士も其の後に續いた。泰時は物をもいはず之を視つめてゐたが、水に溺れる者の多いのを見て、心配の餘り自分も川を渡らうと、馬を進めかけた。春日貞幸は此の様子を見て泰時の馬の轡を取つて引止めたが、泰時は承知しない。そ

こで貞幸は「御覽なさい。甲冑を着けて渡らうとする者は大抵溺れてゐるではありませんか。大將が是非御渡りになるならば、先づ甲を御解きなさい。」と曰つた。成程と思ふて泰時が馬を下りて甲を脱いで居る間に、貞幸は其の馬を隠してしまつた。泰時は心ならずも其の場に立留つて見て居ると、佐々木信綱と時氏とが同時に對岸に上つて官軍に迫る。味方の者が其の後に續く。「先づ一安心。」と思ふて居る所に、豫て民家を壊して造らせてゐた筏が出来て來た爲に、之に乗つて對岸に渡つた。そこで形勢一變して官軍は總崩れとなつて退却し、程なく鎌倉勢は京都に攻入つた。

後鳥羽上皇は使を泰時に遣はして「此の度の事は自分の思ひついた事ではなくして、臣下の者の勧めによつたのである。」と仰せられ、義時を討つべき院宣を取消すからよきに取計らへ。」と告げられた。此の時泰時は途中で勅使に逢つたが、馬から下りて勅使の御言葉を受はつた斯様な場合にも、泰時が御無禮のない様に心懸たのは感心である。さて泰時は事の次第を鎌倉に知らせたが、義時は命令を傳へて、謀の御相談に與つた人々を殺させ、尙良多くも後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に御流し申し、仲恭天皇を廢して第

八十六代後堀河天皇を立て奉ることとした。土御門上皇は後鳥羽上皇を諫められた程で、今度の戦争の御相談に與られなかつたから、義時も御無禮を加へる積りは無かつたが、自分獨り京都に留まるのは望みてないと仰せられた爲に、義時は土御門上皇を土佐に遷し奉つた。



此の亂が始まつたのも、終つたのも承久三年であるから、之を承久の亂といふのであるが、如何にも皇室に對して畏多い亂である。亂の起る前に土御門上皇が後鳥羽上皇を御諫めなかつた事を思へば、武家の勢が強くて、征伐なさるのに都合の好い時では無かつたに相違ない。併し後鳥羽上皇から見れば、一時武家に天下の政治を委せる必要を認めて、頼朝以下源氏の者を征夷大將軍となさつたが、北條氏に政治を御委せになる御考へは無かつた

のである。然るに北條義時は源氏の將軍が絶えた後、頼經を迎へて鎌倉の主人とし、實際の政治は自分がすることにした。其の上上皇の御命令にも従はなかつたのであるから、上皇が之を征伐しようとして御決心なかつたのは無理の無いことと申さなければならぬ。悪運強くて鎌倉勢が勝を占め、上皇が前の院宣御取消の勅使を下されたからには、義時は皇室に對して御無禮を加へ奉る理由はない。若し義時が日本の國體をも知らない程の者ならば兎に角であるが、亂の始めの泰時との問答を見れば、皇室の尊敬すべきことは承知してゐたのである。其れを知つてゐながら、亂の後に天皇を廢し、三上皇を流し奉つたのであるから、義時の罪は一層重くなるのである。實に義時は平清盛にも劣らぬ不忠の臣である。其れに引きかへ泰時は皇室に對して始終尊敬の念を持つてゐた人であるから、平重盛に比較すべきであらう。併し泰時は何事も父の命令通りに行つて、終に父の不忠を改めさせることをしなかつた。重盛が命懸で父を諫めたのに比べると物足らない心持がする。

六波羅探題 承久の亂の後、北條義時は京都の六波羅に役所を設け、六波羅探題といふ役人を置いて近畿、西國の政治を行はせることとした。併し之を置いた最も大切な目的は、

朝廷の御様子を見守つて、何か鎌倉幕府に取つて不利益な事でも起りさうな時には、すぐ其れを鎌倉に通知させる爲であつたので、幕府の執權に次ぐ重い役目であつた。六波羅探題の定員は二人で、最初此の役に就いたのは義時の弟の時房と子の泰時とであつたが、此の後も代々北條氏の一族が此の職に就いたのである。

此の亂の後三年目に執權義時は近臣の爲に殺され(六十)其の翌年尼將軍といはれた政子は六十九歳で薨じた。併し武家の勢は中々盛んで、當分何とも致方がない有様であつた爲に、政子が亡くなつた翌年に朝廷は曩に鎌倉に下つてゐた頼經を鎌倉幕府の將軍に任命せられた。時に頼經は九歳であつた。

水無瀬宮 隱岐に流されられた後鳥羽上皇は隱岐にましますこと十九年、第八十七代四條天皇の御代に六十歳で崩ぜられた。今京都市外の大原(山城國愛宕郡大原村)にある大原の陵は上皇の御遺骨を葬つた處である。順徳上皇は佐渡に二十二年御暮しの後、第八十八代後嵯峨天皇の御代の初めに四十六歳で崩御なされた。眞野陵(佐渡國佐渡郡眞野村)に葬り奉つたが、後に改めて京都市外の大原の陵に葬つた。土御門上皇は初め土佐に流されられたが、翌年幕

府は阿波に御遷し申した。かくて四國にましますこと十一年、後堀河天皇の御代に三十七歳で崩御になり、御遺骨は山城國に遷して葬つた。今山城國乙訓郡にある金原陵がそれである。尙大阪府攝津國三島郡島本村廣瀬に在る官幣中社水無瀬宮は後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を祀つた社で、此の地は後鳥羽上皇の水無瀬の離宮のあつた處である。

われこそは新島守と隱岐の海の
荒き波風心して吹け (後鳥羽上皇)
いざさらば鬩うつ波にこと問はん
おきの方には何事かある (順徳上皇)

第二十八章 北條氏の仁政と元寇

鎌倉幕府が開かれて以來、武家の勢は次第に強くなり、朝廷の力を以てしても、之を倒すことが出来ない程になつてゐたことは承久の亂によつて知ることが出来る。さて此の亂に於て北條義時は許すべからざる無禮を朝廷に加へ奉つた。其の天罰によつても北條氏は長く續く筈がない様に思はれる。然るに北條氏は此の後尙百年以上も執權職を勤めることが出来たのである。其れといふのは義時以後の執權が常に下を憐む仁政を施した爲で、義時を憎む心は何時しか薄らぎ、北條氏の仁政を喜ぶ念が次第に強くなつたからである。數ある北條の執權中、殊に有名なのは泰時、時頼、時宗の三人である。

北條時政 — 義時 — 泰時 — 時氏 — 時頼 — 時宗
 時房

北條泰時 既に述べた通り泰時は義時の長男であるが、父の無道に引きかへて實に心懸のよい人であつた。承久の亂の話の中にも、其の證據と見るべき事があつたが、茲に改めて泰時の美談を二三述べることにする。

仁政を行ふ 泰時は至つて慈悲深い人で、常に仁政を施すことに注意してゐた。嘗て伊豆の北條の人々が飢饉の爲に苦しんだことがあつた。其の時泰時は自ら其の地に行つて様子を見た上、米を貧民に貸與へて、其の返済は米の取入れが出来た時と定めて置いた。所が其の歳の秋、復もや大風の爲に米が取れなかつた爲に、約束を履むことが出来ず、已むを得ずして其の土地を逃去らうと考へる者まであつた。そこで泰時は再び北條に行き、人々を集めて、曩に受取つて置いた米の證文を焼き、酒も飲ませ、御飯もたべさせた上、米をも與へて慰めてやつた。又或飢饉の歳に、泰時は米九千石を出して貧民に與へ、尙富める人から米を借りる者の爲には、其の利息を泰時が拂つてやることにした。其れが爲に泰時は新しい着物も着ず、烏帽子も古いのを繕つて用ひ、晝は一食を減じ、夜は燈火を細くするまでの儉約を行つて、利息を拂つてやり、極貧しい者の爲には元利共に返してやつた。

斯様な心懸て政治をした爲に、天下の人民が泰時を慕ふことは、子が親を慕ふが如き有様であつた。

無慾 泰時は慾の少い人であつた。義時が殺された後、京都から歸つて鎌倉幕府の執權となつた。其の際政子が義時の遺産を其の子に分配することを泰時に命じた。すると泰時は其の大部分を弟に與へ、自分は極僅かばかりを貰つた。政子が怪しんで其の譯を尋ねると、「私は執權職を戴いて居りますから、外に餘計の物を貰ふ必要はありません。」と答へた。親の遺産の分配の多少を論じて、兄弟でありながら裁判所の手数を煩はす者も世には珍しくないのであるが、其等に比べると泰時の心は實に立派であるといはずには居られない。

禮儀を重んず 泰時は禮儀作法を重んじた人である。嘗て將軍頼經の屋敷の宿直に出た時、近習の者が筵(今の座蒲)を差出した。すると泰時は「御居間の疊の上に筵まで敷いては將軍に對して無禮である。」と曰つて、之を敷かなかつた。又頼朝の命日に、頼朝の祀つてある法華堂に參詣した時、泰時は堂の下の石の上に敷皮を敷き、其の上に坐つて禮拜して

ゐた。坊様が御堂の上へ上るやうに勧めると、泰時は「頼朝公が將軍を勤めて居られた頃に、泰時などは容易に御側に近寄ることも出来なかつたものである。頼朝公が亡くなられたからといつて、昔の禮儀を忘れては申譯がありません。」と曰つて堂には上らなかつた。斯様な心懸の人であつたから、泰時が在職十九年の後、第八十八代後醍醐天皇の御代の初に六十歳で亡くなつた時には、天下の人々は之を惜むこと恰も父母を喪つた如くであつたといふことである。

北條時頼 時頼は時氏の子で泰時の孫である。時氏は承久の亂に宇治川の先陣をした勇士で、一時六波羅探題は勤めたが、父泰時に先だち二十八歳で亡くなつた爲に執權にはならなかつた。其の時、時頼は四歳であつたが、其の後は専ら母の手で育て上げられたのである。母は有名な松下禪尼で、自ら障子の切張までして、時頼に儉約を教へた人である。さて時頼は泰時が亡くなつてから四年の後に二十歳で執權となつた。泰時と同様に儉約を守り、常に心を政治に用ひて善く天下を治めた。

儉約 或夜時頼は大佛宣時といふ人に「略服の儘でよいから、すぐ來て貰ひたい。」と

呼びにやつた。宣時は「夜中何事か。」と思ひながら伺ふと、時頼は銚子と土器とを持出して、「此の酒を一人飲むのは寂しいから、話相手に来て貰つたが、折悪しく肴がない。誰も寝静まつた後だから、氣の毒だが何か捜して来て貰はうか。」と曰つた。宣時は御臺所に行つて見たが何もない。漸く小皿に少しばかり残つてゐた味噌を捜しだして、「之しか御座いません。」と差出した。時頼は「之で結構だ。」と曰つて味噌を肴に汲みかはしながら「快く話合つたといふことである。此の一事でも時頼が儉約を守つてゐたことが察せられる。」

諸國の視察 時頼は十一年執權職を勤めたが、第八十九代後深草天皇の御代に、赤痢に罹つた。元來時頼は佛教信者であつたから、全快に近よつた時、職を罷め、最明寺に入つて出家した。時に三十歳であつた。出家後も幕府の大切な政治の相談には與つてゐたが、又故ら賤しい坊様姿で御供も連れずに國々を廻つて、政治の善悪を視廻つた。或時攝津の難波(今の大阪)に行つて、見る影もないあばらやに泊めて貰つた。見れば年寄の尼が一人住んで居る。元は相當の身分であつたものか、煮炊などの仕業には不馴の様子である。時頼は怪んで其の身の上を尋ねると、尼は「元私 は此の邊に少からぬ土地を持つて不自由なく

暮してゐましたが、夫に別れ、子を失ひ、遂に土地まで人に奪ひ取られてしまひましたが何分にも女の身一つで、頼る人も無く、訴へる處も知りません爲に、既に二十年間も斯様な貧しい暮しをして居ります。」と涙ながらに物語つた。時頼は鎌倉に歸つて後、取調の上其の土地を取戻して尼に與へたことがある。兎に角時頼は國々を視廻つた爲に、之と似よりの美談を方々に残して居る。謠曲の『鉢の木』も時頼の美談を傳へる一つであるが、あまり長い話であるから、茲には省いて置かう、之程までにして政治を善くした爲に、人民も富み、幕府の倉にも兵糧米が満ちてゐて、何時何事が起つても差支のない用意が出来た。其れが爲に、第九十代龜山天皇の御代に、時頼が三十七歳で亡くなつた時には、時頼の追善供養の爲に出家する者が非常に多くて、幕府は終に之を禁じた程であつた。

(八八)後嵯峨天皇

(八九)後深草天皇 (九二)伏見天皇

北條時宗

時宗は時頼の子である。相模太郎ともいつて、幼少の時から武藝を練り、弓が上手であつた。或時將軍宗尊親王(後嵯峨天皇の皇子)が弓の稽古を御覽になりたいと仰せられた時

多くの者は將軍の御前で射損じては恥しいと思ふて、進み出る者が無かつた。そこで時頼は時宗を召して「的を射て御覽に入れよ。」と命じた。此の時宗はまた十一歳であつたが、少しも臆する様子もなく定めの場合に進み出て、一矢で見事に的を射中てて將軍の御褒めに預つた。時頼は大いに喜んで「此の子は自分の後を繼ぐべき見込がある。」と曰つた。之より二年の後時宗は父を喪ひ、十八歳で執權となつた。在職十七年の間は専ら心血を元寇に注いで見事に元軍を退け、三十四歳で亡くなつたが、其の功によつて明治三十七年五月(日露戦)從一位を贈られた。よつて次に元寇の始末の大略を述べよう。

元寇 第五十九代宇多天皇の時に遣唐使を廢せられたことは既に述べたが、其の後間もなく第六十代醍醐天皇の御代に唐は亡びて、一時支那は多くの國々に分れてゐた。第六十二代村上天皇の御代に之等の國々を一纏めにして一國を作つてからは支那を宋と呼ぶこととなつた。此の間にも我が國の僧侶や商人は支那に多少往來したが、國と國との交際は無かつたのである。

さて第八十三代土御門天皇の御代に、宋の北部の蒙古に住んでゐた蒙古種族が成吉思汗

を長として、四方に攻入り、其の孫忽必烈の時には、東は朝鮮より西は歐羅巴の中央に至るまでを領地とする大國になつた。初は國號を蒙古といつてゐたが、後に至つて元と改めた。忽必烈は我が日本をも屬國にしようと考え、第九十代龜山天皇の文永五年正月に、日本が蒙古の屬國となつて貢物を獻上すればよし、さもなければ征伐するぞ。といふ意味の書面を我が幕府に届けた。幕府は之を朝廷に申上げたが、朝廷は斯る無禮な書面に對して返事は無用だとして其の儘に棄て置かれた。時宗が十八歳で執權となつたのは實に此の年の三月であつた。翌年(文永六年)亦蒙古の使が書面を持つて來た。今度は朝廷で返事の下書を作つて幕府に御示しになつたが、時宗は蒙古の書面の書振が無禮であるからといふので返事を出さないことに定め、使者を卻けて九州の武士に戦争の用意を命じた。文永八年になると復蒙古の使が太宰府に來た。此の使は中々頑固で、持來つた書面を直接我が天皇に差出して御返事を戴きたい。若し其れが允されないならば、將軍に渡すと言張つて、太宰府の役人には渡さなかつた。太宰府では無理にも受取らうと談判すると、使者は書面の寫しを渡した。太宰府は之を鎌倉に傳へ、時宗は朝廷に奏したが、前の如く返書は與へずに使

を追還した。蒙古が國號を元と改めたのは此の頃であつた。文永十年になると復もや元から使者が来たが、之にも返事を與へずして追拂ひ、何時元の軍が攻寄せても差支の無い様に九州地方の海岸の防禦を嚴重にして待構へてゐた。忽必烈は立腹の餘り、我が國に來た使者が「日本人は勇敢なる上に、日本近海は波が高く、航海も危険であるから、兵を向けるとは損である。」と曰つたに拘らず、日本に攻寄せせる決心をした。之が文永、弘安二度の元寇の緒である。

文永の役 文永十一年正月龜山天皇は位を御子第九十一代後宇多天皇に譲られた。時に上皇は二十六歳、天皇は八歳であつた。此の年元が送り出した三萬餘の軍勢は九百餘艘の船に乗り、朝鮮を経て十月五日に先づ對馬を襲ふた。島主宗助國は八十餘騎の兵を率ゐて海岸に駆けつけ、先づ人を遣つて何故來たかと詰問させたが、賊は何も答へず、戦を始め上陸した。助國は苦戦して數人の敵を射殺し、其の子も賊將らしき者の一人を射落したが、衆寡敵せずして共に戦死した。賊は散々に島を荒した後壹岐を侵した。島主平經高は百餘騎を率ゐて奮戦したが、終に城は陥り、經高等は戦死した。此の時賊軍は對馬、壹岐

の女を捕へ、其の掌に孔をあけ、荒繩を通して、舷に繋ぐといふ様な慘酷極まる事までして、肥前に向ひ、更に筑前の博多(今の福岡)に迫つて上陸した。時に十月二十日であつた。是より先、對馬、壹岐からの知らせを聞いた太宰府は急使を京都の六波羅に出すと同時に、九州の兵士を集めた、其の數は凡そ十萬餘に上つた。何れも勇敢に戦つたが、戦術が違つてゐた爲に中々の苦戦であつた。即ち我が戦術は源平時代以來行はれてゐた一騎打で、互に先を争ふて進み出で、名乗を揚げて攻めかゝるのであつたが、元の軍は多數の兵で隊を作り、大將の打鳴す太鼓の合圖によつて進退し、突進んだ日本兵を取巻いて殺したり、生捕にしたりする。其の上我が武士は重い甲冑に身を固めてゐた爲に、身輕な身拵をして居る蒙古兵程に進退が自由でなかつた。尙我が武器は弓矢刀劍の類のみであつたが、彼れは鐵砲をも持つてゐて、彈丸を飛ばして爆裂させた。人も馬も其の物音に驚いて魂を消すといふ次第で、我が軍は餘程の苦戦であつた。賊は戦争しつゝ、或は物を盗み、或は人家を焼拂ひ、或は逃げまどふ老人、子供、女までも容赦なく斬棄て、廻つた爲に、博多附近は一日の中に、非常な大損害を蒙り、博多近くの宮崎八幡宮も焼かれてしまつた。併し賊

も我が大軍と勇敢とに恐れを懐き、尙又賊將の一人が重傷を負ふたので、一旦船に引返し
た。所が其の夜暴風雨が起つて多くの船を覆した爲に、沈没を免れた元軍は急いで本國に
逃げ還り、翌二十一日我が兵が海岸に出た時には、元の船の影も形もなかつた。此の役に
賊軍の還り得なかつた者は一萬三千五百人に及んだといふことであるから、元軍の凡そ半
數は戦死或は溺死したのである。

外征の計畫 敵軍が逃去つた後も、我が國は少しも軍備を弛めず、若しも敵軍が再び攻
來るならば、目に物見せてくれよう。萬一攻寄せないならば、こちらから元に攻入つて敵
討をしてやらうといふ意氣込であつた。現に文永の役後間もなく九州に出張を命ぜられた
伊豫國の武士河野通有の如きは、出發の際「今より十年以内に元が攻寄せて來ないならば、
元に渡つて戦ひませう。」といふ起請文を書いて氏神様に誓ひ、其れを焼いた灰を飲んだの
である。其の翌年即ち建治元年の四月に復元の使が來た太宰府は之を鎌倉に送つたが、時
宗は之を龍口に斬殺して決心を示した。此の年七月に宮崎八幡の再建が出来たが、龜山上
皇は紺紙に金泥で「敵國降服」と書かれた紙三十七枚を其の社に納められた。同じ年の十

一月に時宗は北條實政を九州に下して、其の防禦を嚴重にさせると同時に、元に攻入る用
意をさせた。實政は「明年三月頃には元に攻入る筈であるから、從軍希望の者は姓名、年
齡、財産、武器等を届出でよ」と命令した。其の頃國民の意氣込は非常なものであつたと
見えて、如何にも勇壯な届書が今に傳はつて居るのである。其の一二を述べるが、肥後國
の井芹西向といふ人の届書を見ると、其の中に「西向は八十五歳で歩くことが出来ない爲
に従軍しないが、六十五歳の長男、四十歳の孫などは從軍の上忠勤を勵む。」といふ意味が
書いてある。又眞阿といふ尼の届書には「自分の子と娘の婿とを夜を日に繼いで參上せし
める。」と書いてある。一は六十五歳の老人までが從軍しようといふのであり、一はかよわ
い女が杖柱と頼む子や誓を從軍させるといふのであるから、此の頃我が國民の意氣込が如
何に盛であつたかを察することが出来る。

斯様に幕府では元に攻入る用意をすると同時に、九州の武士に領地の多少に應じて分擔
を定め、博多灣の海岸に長さ四里に亘る石の堤防を築かせた。之は元軍が押寄せて來ても
容易に上陸させない爲である。此の石壘は建治二年の八月に略出來上つたが、後に元が攻

寄せて来た時に、元軍は之に妨げられて上陸し得なかつた。今も此の石壘が凡そ昔の形で残つて居るのは、福岡市の西方三里餘の今津で、其の海岸には長さ凡そ二十五町の石壘を見る事が出来る。

さて何故か元の征伐は中止になつた。其の理由は明かではないが、多分元に再び日本を攻撃する計畫あることを知り得て、兵力を二つに分けるのは我が國の不利益だと考へた爲であらうと思はれる。

元の忽必烈は猶日本を思切らず、しつこくも出した使が弘安二年(元使を龍口に斬)の夏到着した。其の時の書面は相變らず無禮な書振で、來年の四月迄に返事を貰はう。若し元の言葉に従はないならば、兵を進めて伐つぞ、といふ様なことを書いてゐた。時宗は其の使者を博多で斬らせ、程なく關東の武士を九州に遣はし、翌弘安三年には四國の兵をも博多出して戦争準備を整へた。此の年は無事であつたが、弘安四年になると元の大軍が再び博多に押寄せた。之を弘安の役といふのである。

弘安の役 忽必烈は十數萬の大軍を東路軍、江南軍の二手に分けて日本に向はせること

とした。東路軍は蒙古、支那、朝鮮の混合軍で、其の數は約四萬、朝鮮を経て九州に向ふ手筈であつた。江南軍は支那兵のみより成り、其の數凡そ十萬、揚子江附近から海を渡つて九州に進み、東路軍と壹岐に會する豫定であつた。



弘安四年五月二十一日東路軍約四萬の兵を載せた九百艘の船は壹岐を荒した上、筑前に向ひ、六月五日博多灣内に入込んだ。併し今度は石壘がある爲に上陸は出来ない。待構へてゐた我が兵は夜小舟に乗つて勇ましく敵艦に逼り、或は火を放つて焼沈め、或は艦内に躍り入つて敵を斬殺した。彼の起請文の灰を飲んで伊豫を出發した河野通有の如きも伯父(時通)と共に舸を飛ばして進んだが、部下の數人は忽ち射斃され、

伯父も負傷し、自分も左の肩に矢傷を受けた。其れにも屈せず敵艦に近寄り、自分の船の櫓を倒して賊船に渡しかけ、之を攀ち上つて船中に躍り入り、見る間に數人を斬殺し、遂に大將らしき者を生捕にして引上げた。元來敵は陸上の戦ひには馴れてゐたが、海戦は

得意でない爲に、我が軍に惱まされた。其の上船中に傳染病が流行した爲に、灣外に退いて江南軍の到着を待つことにした。

さて元軍再来の報知が都に傳はると、龜山上皇は京都の西南約三里に在る石清水八幡宮に御參詣の上、徹夜で戦勝の御祈禱をなさつた。其の上勅使を伊勢の神宮に遣はし、自分の壽命は縮まつても厭ひませんから、此の國難を助け給へ。と御祈りになつた。

江南軍十萬の兵は三千五百艘の船に乗つて進み來り、東路軍と共に攻寄せようとしたが、やはり上陸することを得ず、肥前の鷹島近海に集合した。所が七月晦日の夜半から翌日にかけて大暴風雨が起つた。此の時東路軍は鐵の鎖で船を繋ぎ合せてゐた爲に、沈没を免れて逃げ還ることの出來た船も少くなかつたが、江南軍は一向風に對する用意をしてゐなかつた爲に、船は殆んど全部覆へり、敵兵は殆んど残らず溺死した。幸に鷹島に流れ着いた者は我が軍の爲に殺され、生きて逃げ還つた者は江南軍中僅かに三人に過ぎなかつたといふことである。今聞くさへ痛快極まる事である。まして其の當時の皇室、國民の喜びは譬へるに物なき有様であつたであらう。此の翌年龜山上皇が御詠みになつた

四方の海波をさまりてのどかなる

我が日の本に春は來にけり

の御製を見ても、其の御喜びを想像することが出来る。今福岡市の東公園内に龜山上皇の銅像があるが、博多灣を眺めて其の當時の有様を物語つていらつしやる様に思はれる。

弘安の役の大勝利は國民上下一致して外敵に當つた寶であるが、殊に北條時宗が少しも元

を恐れず、無禮な使者を卻け或は殺して幕府の決心を示し、其の上元の征伐を計劃し、或は石墨を築くなど様々の苦心をした功は實に偉大なもので、我が國民が永久に感謝しなければなら

ない大人物である。惜い哉時宗は弘安七年に僅か三十四歳で亡くなつた。或は元寇に對す

故五位下北條時宗

贈從一位

天皇

御璽

明治三十七年五月十七日

富永長任勲章子爵田中光顯奉

る様々の苦心が壽命を縮めたのかも知れない。

時宗の亡くなつた後も我が國は復何時元が攻寄せるかも知れないとの心配から少く見積つても十五年は軍備を弛めなかつた。最初元の使の來た文永五年から數へると、凡そ三十二年間我が國は武裝を解かなかつたのである。

元では弘安の役の後も、兵を日本に出す考へはあつたが、終に實行することは出来なかつた。後に元を滅して明國を起した皇帝太祖は子孫に對して「永久日本を伐つべからず」との遺言を残した。さもあるべきことである。

敦島の大和心を人間はば

蒙古の使斬りし時宗

(村田清風)

第二十九章 北條氏の失政と滅亡



北條氏が曩に義時の如き不忠の臣を出したに拘らず、長く幕府の執權職を勤め得たのは、其の後の執權が儉約を重んじ、仁政を施した爲で、儉約と仁政とは北條氏の命ともいふべきものである。若し之に反く様な行をする人が出るならば、天下の人心は自ら北條氏を離れるのが當然である。既に述べた通り元寇に對する時宗の處置が善かつた爲に、北條氏

は一層世の信用を固くすることが出来たが、一方に於ては元寇に費した多くの軍費並に軍功の有つた武士に與へる賞與、及び戦勝を祈つた社や寺への寄進等の爲に、貯への豊かであつた鎌倉幕府の藏も非常な痛手を受けた。之を恢復するには幾代も引續いて一層儉約を守らなければならぬのは明瞭なことである。然るにまだ其の恢復が出来ない中に政治にも心を用ひず、又儉約をも守らずして、贅澤に日を送る執權が出た。其れは高時である。

北條高時 高時は時宗の孫で、貞時の子である。幼少の時から我儘な愚物であつたが、長男であつた爲に、第九十五代花園天皇の御代に十四歳で執權となつた。併し政治は一族や臣下の者に委せて置いて、其等の者が自分の懐を肥やす爲に、悪い政治をして居るに拘らず、其の儘にして一向之を顧みず、贅澤な遊びに日を送つた。

闘犬と田樂 高時は闘犬を好み、毎月十二回の闘犬會を開いて、酒を飲みながら其れを観るのを樂みにしてゐた。其れが爲に人民に犬を出させて租税の代りにする様になり、鎌倉には常に數千頭の犬がゐた。犬には飽く程に良い肉を與へ、勝負に強い犬には錦の着物を着せ、之を籠に載せて昇ぎ歩かせた。之に出逢へば騎馬の武士もわざわざ馬から下りて、

恭しく犬に向つて禮をしなければならぬこと、した。實に馬鹿げきつた話である。

又其の頃田樂といふ一種の舞が京都に流行してゐた。其れを聞いて高時は大勢の田樂法師を鎌倉に呼び集め、主なる家來連中に一人づつ、法師を養はせた。かくして殆んど毎日毎夜宴會を開き、立派に着飾らせた法師に舞をまはせ、舞ひ終ると、高時以下列席の者共は立派な衣裳を脱いで惜氣もなく褒美に與へたのであるから、田樂の費用も亦大變なものであつた。斯様な有様であつた爲に、世の心ある者は北條氏を見限るやうになつたが、其の頃京都に傳はる鎌倉の評判を聞いて、天下の爲に北條氏を滅さなければならぬと決心せられた方があつた。其れは第九十六代の後醍醐天皇である。

後醍醐天皇 後醍醐天皇は御名を尊治と申し、後宇多天皇の第二の皇子である。御幼少の時から賢明な方であつた爲に、御祖父様に當る龜山上皇は始終御側に置いて特別に愛せられた。御即位なさつたのは三十一歳の時で、弘安の役より三十七年後であつた。天皇は武家政治が始まつて以來、幕府の勢が盛になるにつれて、皇室の勢の衰へるのを残念に思召され、折もあらば鎌倉幕府を倒して親ら政治をしようとして考へて居られたが、鎌倉で

は高時が鬪犬や田樂などに耽つて一向政治を顧みず、次第に世の人望を失ふ様になつた爲に、高時を滅す謀を廻らされた。

正中の變 後醍醐天皇の御即位より六年の後、即ち正中元年天皇は日野資朝、藤原俊基等と御相談の上、北條氏征伐の爲に、竊に兵を諸國より召された。此の時美濃の土岐頼兼、多治見國長は逸早く京都に上つて、其の御相談に與つたが、程なく其の事が六波羅に知れた爲に、兩人は六波羅勢に家を圍まれて自殺した。やがて資朝も俊基も捕へられて鎌倉に送られた。そこで天皇は使を鎌倉に下して、御書面を高時に賜はり、此の度の事は朕の知らざる所で、朕には北條氏を討つなどの心はない。と御諭しになつた。爲に天皇は御無事であり、俊基も釋されて翌年京都に歸つたが、資朝は佐渡に流された。之を正中の變といふのである。之より數年の後に資朝は佐渡で殺されたが、其の時に阿新丸の哀れな物語が傳はつて居る。

阿新丸 資朝に阿新といふ子があつた。母と共に京都に淋しく暮してゐたが父が、佐渡に流されてから七年の後に、「北條高時が佐渡の守護本間山城入道に命じて、資朝を殺させる」との評判を聞いた其の時阿新は十三歳であ

つたが、一目なりとも父に會ひたいと思ひ、無理に母の許を受け、唯一人の下部を連れて京都を出發した。十日餘かかつて越前の敦賀に着き、其處から船で佐渡に渡つた。先づ本間の屋敷を尋ね出して、其の門前に立つて様子をみてゐると、一人の坊様が出て来て「何か御用がありますか。」と尋ねてくれた。阿新は「私は資朝の子で御座います。聞けば此の頃父が殺されるとの評判で御座いますから、最後の様子を見せて貰ひたさに、遙々都から下つて來たので御座います。」と涙ながらに答へた。坊様は之を聞いて哀れに思ひ、「私が御取次を致しませう」といつて此の事を本間に告げた。すると本間入道も可愛相だと思ふたものか、坊様に命じて阿新を御堂に迎へさせ、親切にもてなさせた。阿新は大いに喜び一刻も早く父に會ひたいと思ふてゐるが、本間入道は今日明日に殺される人の子に會はせるのは却つて不親切であらうし、又若し高時の耳に入ると告められるとの心配から、父子の對面を許さず終に我が子三郎にいひつけて資朝を殺させてしまつた。坊様は之を火葬にして、其の遺骨を阿新に渡した。阿新は大聲あげて泣きむより外はなかつたが、「此の上は父の敵討を。」と決心し、遺骨を下部に渡して「其方は之を持歸つて高野山に葬れ。」と命じ、自分は病氣だといつて居残ることとした。かくて晝は家に臥し、夜は本間の座敷の様子を捜り、折もあらば本間を刺殺して鬱憤を晴らさうと持構へてゐた。所が或夜激しい雨風が起つた。「今夜こそ」と思ひ定めて、本間の寢室に近寄つて見ると、本間入道は何處に行つたか、其の室には寢てゐない。併し別室に火影が見えるので、其の室内を窺ふと父の首を刎ねた三郎が熟睡して居る。そこで「三郎も父上の仇の殺すも同じく敵討だ」と考へたが、「輕々しく踏込んで悟られてはならない」と思案しながら障子を見ると、燈を目前に飛んで來た蛾が澤山集まつて居る。そこで靜に障子を少しばかり引きあけると、澤山の蛾は室内に飛入り、やがて燈を消し

てしまつた。阿新は忍足で三郎に近寄り、其の枕元を探ると太刀と刀とが置いてある。先づ刀を取つて腰に差し、太刀を引抜いて胸を刺さうとしたが、寝てゐる者は死人も同様であるからと思ふたから、先づ枕を蹴飛ばした三郎が驚いて起き上らうとする所を、一の太刀で腹を刺し通し、返す太刀で咽喉ぶえを切り、心静に家の後に在る竹藪の中に隠れた。家の中では三郎が一の太刀を受けた時の呻聲を聞きつけて番人連中が騒ぎ出した。血の附いた小さな足跡を見て、「さては阿新の仕業に相違ない。濠の水が深いから門内に隠れてゐるに違ひない。捜し出して打ち殺せ。」と呼ははりながら、めい／＼松明をとほして尋ね始めた。阿新は「人手に懸るよりは自害を。」と思ふたが「逃げられるなら逃げのびて、君の御爲に働くべきだ。」と思ひ直し、濠端の竹に攀ち上つた。すると體の重みで竹が壊んだ爲に、濠の向岸に飛下りることが出来た。追手を氣遣ひながら海岸に出て見ると、折よく商船が通りかかつた。早速其の船に載せて貰つた後に、百四五十騎の追手が馳せつけた。追手は「其の船戻せ。」と口々と叫んだが、船頭共は聞かぬふりして、順風に帆を揚げた爲に、阿新は無難に越後に上陸することが出来た。其れより阿新は一人旅を續けて京都に歸り、後には邦光と名を改め、朝廷に仕へて重く用ひられた。

元弘の變 後醍醐天皇の皇太子は第九十四代後二條天皇の皇子邦良親王と定まつてゐたが、親王は正中の變の起つた年から二年の後に薨ぜられた。そこで後醍醐天皇は御自分の皇子の中から皇太子を立てようと思召して、鎌倉幕府に御相談なさると、高時は其の思召に従はずして、無理に第九十三代後伏見天皇の皇子量仁親王を皇太子と定め奉つた。

晉さへ憎んで居られた高時が天皇の御望に合はない方を皇太子と定めた爲に、天皇は再び北條氏を滅して幕府を倒さうと御考へになつた。併し諸國の武士を集めては、復正中の變の如く謀が洩れ易いとの御心配から今度は僧兵を味方にしようと思召され、先づ皇子護良親王を比叡山延暦寺の座主となさつた。親王は延暦寺の中の大塔に居つて此寺の取締をなさつたから大塔宮と申上げたのである。次に天皇は皇后の御安産を祈らせる爲と言ひふらして、京都近くの有名な寺の坊様を宮中に御召になり、北條氏を滅ぼす爲の御祈禱を御させになり、又奈良や大津などに行幸して其の地の寺に土地などを御寄附なすつた。斯様な事をなさる御相談相手はやはり藤原俊基等で、秘密の上にも秘密を守つてゐたのであるが、運悪く復もや此の事が高時の耳に入つた。高時は人を京都に遣はし、御祈禱をした坊様達を捕へて鎌倉に送らせ取調べの後之を方々に流した。此の時俊基は御所に逃げこんだが、捕へられて再び鎌倉に送られた。時は元弘元年で、正中の變から七年後であつた。後醍醐天皇は「かく事柄の發覺した上は致し方なし。先づ六波羅を攻めやう。」と思召し詔を下して兵を諸國に募られた。高時は之に對して二十餘萬の大軍を京都に差向けたが、

其の中には有名な足利高氏も加はつてゐた。此の時、高氏は父(貞)を喪つて後間もない時であつたから、從軍を辭退したが、高時が之を許さなかつた爲に、已むを得ず鎌倉勢に加はつて西に向つた。

笠置山に行幸 天皇は大塔宮の計略を用ひて、『延曆寺に行幸。』といひふらし、藤原師賢に天皇同様の装束を着けさせ、御輿に乗つて延曆寺に向はせ、御自分は三種の神器を奉じ、藤原藤房等を御供に連れて笠置山に行幸せられ、山上の寺を行在所として兵を近國に御募りになつた。此の時河内の人楠木正成は笠置に来て天皇に拜謁し、『謀を廻らせば如何なる大軍も怖れるに及びません。一時の勝負は御氣に懸けられず、正成一人が生きて居る間は、必ず御運の開けるものと御思召し下さいませ。』と申上げて河内に歸り、城を赤坂に築き始めた。

六波羅勢は大塔宮の計略に陥つて延曆寺を攻めた。僧兵は大塔宮の御指圖によつて勇ましく防ぎ戦つてゐたが、他の坊様達が天皇を他の御堂に御移し申さうとした時、心なき山風が御輿の簾を吹きあげた爲に、眞の天皇でないことを知り、落膽して御輿を棄てて立去つた。其の話が傳はると、今まで戦つてゐた僧兵も逃げ散つた。そこで師賢は逃れて笠置の行在所に行き、大塔宮は奈良に逃れて、一般般若寺に匿られた。

高時の無道 六波羅の軍勢三千騎は笠置に向つた。笠置山は左程高くはないが、峻岨な岩山で、容易に登ることも出来ない。爲に攻めあぐんで居る所に、二十餘萬の鎌倉勢が到着して賊軍の勢は熾になつた。

此の頃高時は都に残つて居られた皇太子量仁親王を立てて天皇とした。併し此の方は高時が勝手に御立て申した方であり、又神器も無かつたのであるから、無論正當な天皇とは見られない。爲に後の人は此の方を光嚴院と申して御歴代の中には加へないのである。笠置の官軍は必死になつて奮戦苦闘したが、賊軍は遂に火を柵に放つて攻めかけた。火は忽ち廣がつて煙は全山を蔽ひ、火は行在所に及んだ。流石の官軍も詮方なく足に任せて何處を指すともなく逃げ去つた。天皇は河内の赤坂城へと志し、藤原藤房、弟季房等數人の御供を連れて夜行在所を御出になつた。初め一二町の間は御供の人達が揃つてゐたが何分にも道は暗く、雨風も烈しい。敵の関の聲は此處彼處に聞える中を落ち延びるので

あるから、次第に別れ／＼になつて、後には藤房兄弟の外には天皇の御手を引き奉るものも無くなつた。御心ばかりは赤坂城へと御せきになるが。不馴れの御歩行であるから一向道は抄取らない。晝は林や岩蔭などに身を隠し、夜は野山の露を分けて歩行を續けさせられたこと三晝夜。其の間少しも御食事を召上ることが出来なかつた爲に、一步も御進みになることが出来なくなり、君臣兄弟三人は松の木蔭に立寄つて、身の行末を打ち案じながら疲れを休めて居られた。すると梢を拂ふ松風の爲に露が落ちて御袖にかかつた。天皇はぬれた御袖を御覽になつて、

さして行く笠置の山を出でしより

天が下には隠家もなし

と御詠みになつた。藤房は涙ながらに、

如何にせん頼むかけとて立寄れば

なほ袖ぬらす松の下露

と申上げた。一天萬乗の天皇が賊の爲にかくも憂き目に逢ひ給ひ、身の置處も無いと御歎

きになるまでに至つたのは、實に畏れ多いことで、何とも申上げやうがない。やがて賊軍は追ひ來つて天皇を粗末な籠に載せ奉り、京都の六波羅に御連れ申した。程なく高時は天皇を隠岐に遷し奉ること、定め、翌元弘二年藤房、師賢等を流し、俊基を鎌倉に殺した。彼の阿新の父資朝が殺されたのも此の時である。

兒島高德 元弘二年三月後醍醐天皇は六條忠顯等知人を隨へ、幕府方の武士に護衛せられて隠岐へ御遷幸の途に就かせられた。さて茲に備前國に兒島高德といふ武士があつた。官軍が笠置で苦戦してゐた時、兵を集めて勤王の旗を擧げたが、笠置は陥り、天皇は隠岐に遷幸なさるといふことを聞くと、一族を集めて「忠義の爲に身を抛つは臣民の道である。今逆賊高時は天皇を隠岐へ遷し奉ることである。吾は之より御遷幸の道中に待構へ天皇を賊の手より奪ひ奉つて義兵を起す考へである。若し事が成らずして屍を戰場に曝すとも、固より少しも恨はない」と決心を語つた。二同の者が之に同意した爲に、高德は備前と播磨の境に在る船坂山に隠れて待つてゐた。然るに待てども待てども、御遷幸が無いのを怪しみ、人を走らせて様子を搜らせると、護衛の武士は播磨の姫路近所から道

を轉じて美作に向つてゐたのである。そこで高德は道もない山中を分け進んで美作の杉坂に出た。此處こそ御道筋と喜んだ甲斐もなく、既に天皇は此處を通り過ぎて同國院庄に御着きになつた後と知れた。家來の者は落膽して散り／＼に別れてしまつたが、高德は足を早めて院庄に行き、せめて自分の所存だけなりと天皇の御耳に達したいと心懸たが、御近づき申す折を得ない。警護の武士の寢靜まるのを待つて夜半に御宿の庭に忍び入り、大きな櫻の樹の幹を削つて、

天莫空勾踐 時非無范蠡

といふ詩の一句を筆太に書附けた。夜明けの後警護の者が此の文字を見附けたが、固より無學の者共であるから、讀み兼ねて天皇に申上げた。やがて天皇は之を御覽の上其の意味を御悟りになり、斯様な心懸の忠臣があることを御承知になつたが。唯笑顔をなさつたのみで何事も仰せられなかつた。武士共は何者かのいたづらと心得て少しも氣には留めなかつた。院庄は美作國津山町の西一里ばかりの處に在つて、今は其處に後醍醐天皇と高德とを祀る作樂神社がある。尙高德に對しては明治三十六年に從三位を贈られた。さても後醍

醐天皇は院庄御出發後日數を重ねて隱岐に御到着になり、西の島の行在所に入つて不自由な月日を送らせられることゝなつた。思へば承久の亂の後に義時は後鳥羽上皇を隱岐に流し奉り、其の子孫たる高時は之に倣らつて天皇を復隱岐に流し奉つた。共に憎みても尙あふりある不忠の逆賊である。

大塔宮護良親王 曩に比叡山から奈良に遁れられた大塔宮は般若寺にゐて笠置の様子を氣遣かつて居られたが、笠置の行在所が陥つて間もなく、如何にして知つたか、賊兵五百餘騎が攻寄せて寺を圍んだ。時刻は夜明前、折悪く宮の從者は外の處に出てゐた爲に一人もゐなかつた。宮は自殺をしようとして決心なされたが、見れば御堂の中に大きな經函が三個ある。其の内の二個は蓋の儘であるが、一個は半分以上も經文を取出して蓋をせずにあつた。そこで宮は急いで其の中に入り、經文を取つて體の上に乗せかけ、若しも見附けられた時には自殺と覺悟して、刀を腹に當て居られた。程なく賊兵は御堂の中に亂れ入つて佛壇の下、天井の上までも搜した後、經函に目を附け、蓋のあいてゐるのは見るにも及ばないが、蓋のしてある此の二つが怪しいといひながら蓋を明け、經文を取出して調

べたが、見附かる筈はない。賊兵は捜しあぐんで立去つた。宮は「嬉しや命が助かつた。」と思はれたが、「或はも一度捜しに来るかも知れない。」と心配して經函を出て、先に賊兵が調べた經函の中に隠れられた。果して程なく賊兵は立歸つて前に宮が隠れて居られた經函を指し、「此の經函は前に調べなかつた。」といひながら函を傾けたが、出しても出しても經文ばかりであつたから、終に諦めて寺を立去つた。

宮は「此の上、奈良にゐるのは危険である。一先づ熊野に落ち延びよう。」との思召で村上義光、赤松則祐等凡そ十人の從者と共に山伏姿に身を装ひ、熊野參りと見せかけて出發せられた。山を越え谷を渡り、飢渴を忍びながら、十日餘りの後に大和の十津川に着かれたが、飢と疲との爲に御進みになることも出来なくなつた。從者は宮を辻堂の中に置き奉り、民家に食物を求めて之を差上げ、御元氣の恢復を待つこととした。或日從者の一人が食物を乞ひに出かけ、十津川あたりには見馴れぬ大家の門前に差懸つた。折よく出て來た子供に主人の名を問ふと、「戸野兵衛」と答へた。從者は「さては之が豫て聞き及ぶ兵衛の家か。之に憑めば大丈夫。」と思ひながら、門内に入つて様子を窺ふと、家には病人があるらしい。「貴い山伏が來ればよいに、祈禱をして貰ひたい。」といふ聲が聞える。從者は聲を張揚げて、「自分等は那智に籠ること十日、瀧にうたれること七日、今三十三所の觀音參詣の道中道に迷ふて此處に來たものである。どうか一夜の宿を願ひたい。」といつた。すると平女が出て來て、「奥様が病氣で御座います。御祈禱が願はれませうか。」と尋ねた。從者は「それではあの辻堂に休んで居られる先達を御連れ申して御祈禱を致さう。」といひ殘して引返し、事の次第を申上げて宮



を始め一同と共に兵衛が館に入込んだ。やがて宮は病室に入つて御祈禱をなさつたが、運

よく病人は全快した。兵衛は大に喜んで「差上げるべき御禮の品は有りませんが、どうか御疲休めに十日餘りも御逗留を願ひます。早く御出發にでもなると困りますから、御荷物御預り致しませう。」といつて一同の笈をしまひこんだ。一同は「然らば暫く御世話にならう」と答へて泊込こんだ。所が或日主人が宮の前に出て、四方山の話の序に申上げるには「皆様も定めて御聞及びも御座いませうが、此の頃大塔宮が熊野に御逃げになつたとの評判であります、然るに熊野の坊様達は鎌倉方でありますから、熊野に御忍びになることは出来ません。萬一此の十津川に御いてになるならば、場處こそ狭けれ、四方は險岨な山ばかり、其の上人間が正直で、弓矢の道にも勝れて居りますから、御隠れなさるに究竟な處で御座います。」と申上げた。宮は試に「若し大塔宮が此の地に御越しになるならば、御主人は如何なさる御積りか。」と御尋ねになると、兵衛は「不肖の身ではありますが、此の附近十八箇村の者共を率ゐて忠義を盡します。」と答へた。宮が目配せなされると山伏の一人は兵衛に向つて「今は何をか隠さん、此の先達は即ち大塔宮で御座いますぞ。」といひ聞かせ、一同は頭に戴いてゐる頭巾を取つた。眞の山伏では無いから、髪の毛が延びてはゐる

が、月代の跡は明かである。兵衛は之を見て打驚き、「さては大塔宮様で御座いましたか、さうとは知らず、今日までの無禮の數々眞平御容赦下さいませ。」と御詫を申上げ、新に御座敷を造つて宮を御入れ申し、四方の山道に柵を設けて用心堅固に守護し奉つた。宮も大いに御安心の上、還俗して名を護良と改められたが、時は元弘二年であつた。

熊野の僧は之を聞き、道々に「大塔宮を捕へて差出す者には土地と金とを與へ、從者を殺す者にも褒美の金を與へよう。」といふ立札を立てた。すると十津川から熊野に至る間の慾張連中が褒美を得る爲に手配りを始めた。そこで護良親王は兵衛に別れを告げて吉野に向はれたが、其の道中芋瀬の村役人芋瀬莊司が道を固めて通さないと噂によつて、親王は莊司に「吾々を見逃して通してくれよ。」と頼まれた。莊司は「宮を御留め申すは畏多けれども、唯御通し申したとあつては、後日鎌倉から咎められた時に言譯が立ちませんから、御家來を一人か二人御渡し下さるか、或は御持ちの旗を殘して置いて戴きませう。さすれば宮は取逃したが合戦をしたものだとの證據に致します。」と御答へ申した。親王は色々御相談の後、金銀で日月を縫付けた錦の旗を渡して置いて御通りになつた。暫くすると一

同に後れてゐた村上義光が駆けつけて其の旗を見た。怪んで事の次第を聞質し、「朝敵の征伐に苦心なさる親王に對して無禮の仕業」と呼はりながら其の旗を奪ひ取り、其の上旗持の大男を引摺んで四五丈ばかりほりなげた。其の大力に驚いて莊司等は一言の返事もせず、又手出しもしなかつた。義光は御旗を肩にして程なく親王に追ひつき、御褒めの言葉に預かつた。

斯様な難儀に遭ひながら吉野に向つて進まれる道中、紀伊から三千餘騎の援兵が來た。親王は之に力を得て吉野に御着になり、或寺を城として守られた。程なく從者の一人赤松則祐を播磨に遣はして其の父赤松則村に義兵を擧げさせ、尙令旨を近國に下して兵を募られた。翌元弘三年正月北條高時は六萬餘の兵を差向けて吉野を攻めさせた。賊軍は烈しい攻撃を七晝夜續けたが、城は容易に落ちない。そこで賊は夜竊に一隊の兵を城の後の山に登らせ、前後から迫つて城に火をつけた。親王は最早遁れぬ運命と覺悟して、一騎當千の勇士二十餘人を率ゐて賊軍を追廻された。其の勢に恐れて賊は四方の谷に退いた。此の間に最後の酒宴をしようと家來を召して盃を口になさつたが、見れば親王の鎧には七本

の矢が立つて居り、頬と腕とに刀傷を受けられて血は瀧の如く流れて居る。程なく御自害と見える。所に、村上義光が駆けつけて御前に近寄り、「一の木戸は既に破られて二の木戸も危くなりました。最早此の城を守ることは出来ません。私は御身代りとなつて戦死致しますから、其の間に一方を打破つて御逃げ下さい。畏れ多いことながら、義光に宮の御名を名乗ることを許し給へ、尙御鎧、直垂を御貸し下さいませ。」と御願ひ申上げた。親王は「死なば諸共に」と仰せられたが、義光は「宮は天下の大事を引受けて居られる大切な御體。死すべき時ではありません。」といひながら、手早く御鎧の上帯を解き奉つた。親王も成程と思ひ直して甲冑などを脱ぎかへ、之を義光に與へて城の一方から御逃げになつた。義光は二の木戸の高櫓に上つて遙に見送り、宮の姿が殆んど見えなくなつた時、馳せ來た我が子義隆に宮の御供を命じて立去らせ、賊軍に向つて「人皇第九十六代後醍醐天皇の第三子護良が逆賊に滅され、恨を地下に報ゆる爲に自害する有様を見届けて、汝等の武運盡きて腹を切る時の手本にせよ。」と聲高らかに呼はりながら鎧を脱ぎ棄てた。續いて刀を左脇につき立て、一文字に掻切つて、腸を掴み出し、櫓の板に投げつけた上、太刀を

くはへてうつ伏になり、見事な自殺を遂げた。賊は四方から櫓に集つて其の首を斬り、親王の首と心得て之を京都の六波羅に送つた。斯る間に親王は危い場處を通れられたが、賊軍の一隊が其れと知つて知らずにか、後を追ふて攻寄せた。義隆は此の時僅かに十八歳であつたが、踏留まつて奮戦し、親王を逃がし奉つて終に討死した。爲に親王は復も通れて高野山に登られた。六波羅では首實檢をして其の親王の御首でないことを知り、其の由を傳へた爲に、賊軍は親王の御行方を尋ね、遂に高野に向つた。併し高野の坊様達が巧に親王を隠し奉つた爲に、賊軍は捜しあてずして立去つた。義光といひ義隆といひ共に身を棄て、親王を助け奉つた忠節は幾千萬年の後までも語り傳ふべき美談である。

楠木正成 曩に元弘元年笠置の行在所を辭して河内に歸つた楠木正成は城を赤坂に築き萬一笠置陥落の時には天皇を此處に御迎へ申さうと考へてゐた。然るに間もなく笠置は陥り天皇は終に賊軍の爲に六波羅に囚はれの身となられた。そこで賊の大兵三十萬は雲霞の如く赤坂城に迫つたが、足利高氏も其の中に加はつてゐた。城は方二町に足らざる小城。一方は丘續きであるが、三方は平地であり、城内の兵は五百人に過ぎなかつた。賊軍が之

を見て『哀れな小城。片手に載せて投げつけられる。』と考へたのも無理はない。正成は智謀に長じた人であるから、豫て兵三百を弟正季に與へて城外の山中に隠し置き、僅か二百の兵を以て城を守つてゐた。さうとは知らぬ賊軍は『只一揉に揉落さう。』と濠際まで進んだが、城中から雷雨の如く飛び来る矢に射られて、瞬く中に千餘人の死傷者が出来た。『此の有様では一日や二日では陥らない。』と賊軍は退いて、鎧も脱ぎ、馬の鞍も下して休息した。正季は之を見て『時刻はよし。』と三百の兵を二手に分け、関をつくつて賊軍に逼り、城兵も門を開いて突進した。賊軍は驚き騒いで繋げる儘の馬に乗つて鞭つ者もあり、弦をはづした弓を射ようとする者もあり、或は一つの鎧に二三人も手をかけて取合つて居る者もある程の大混雜。主人が打たれても従者は助けず、親が殺されても子は知らず、蜘蛛の子散らすが如く五十町ばかりも退いた。楠木の軍勢五百は悠々ど城中に引返した。賊軍は之にも懲りずして『濠一重、塀一重の小城、何程の事があらうか。』と復もや城に逼り濠を渡つて石垣を這ひ上つたが、城中は静まりきつて人なきが如く、一矢も射る者がない。賊は愈々悔つて、仕掛ありとは露知らず四方の塀に手をかけて、今にも城中に跳入ら

うとした。待構へてゐた城兵は四方の塀の釣繩を一度に切離した。一千餘の賊兵は塀諸共に壓し落されて膽を冷して居る。其れを目がけて城兵は大きな石や木を投げかけた爲に、七百餘人の賊兵は塀に敷かれて往生した。残る賊兵は『今度こそ』と第二の塀に近寄つたが、『之も釣塀ではないか。』と心配して濠の中に立ち、熊手を懸けて引倒さうとすると、城兵は長さ一二丈もある柄杓で熱湯を注ぎかけた。餘りの熱さに堪え兼ねて賊兵は楯も熊手も打捨て、退却した。此の上は兵糧攻めにするより外に道なしと諦めて賊は城を遠巻にして近づかうとはしなかつた。元來赤坂城は俄造で、十分の兵糧は無かつた。二十日餘りの籠城によつて兵糧も残り少くなつた爲に、正成は城兵を集めて『我が軍は屢々勝を得たが賊軍の勢はまだ挫けない。城中は既に食料乏しく、外に援兵を求めるところも出来ない。今正成は自害と見せかけて一同と共に城を出るならば、敵は喜んで引返すであらう。若し偽りと悟つて復も敵が攻寄せるならば、敵を深山に引入れて惱ましてやらう。すれば必ず味方の勝利となるに相違あるまい。』と告げた。一同も『成程』と同意したから、正成は城内に深さ二丈ばかりの穴を掘らせ、濠にある敵の死骸を取入れて其の中に入れ、其の上に

炭や薪を積上げて、雨風の夜を待つてゐた。運よく一夜暴風雨が起つた。正成は一兵士を留め、『一同が城を遠く出離れた時刻を見計らひ、火を薪につけて逃げ出せよ。』と命じて置いて、三々五々別れ々に城を出た。程なく城中に火が燃上つた。賊軍は『それ落城。』と城内に駈入つた。焼鎮まつた跡を見れば、焼死んで死骸が澤山にある。賊は果して正成は自害したものと思得、僅かの兵に城を守らせて置いて關東に還つた。足利高氏も此の時に鎌倉に引返した。時は元弘元年十月で、笠置の陥つた翌月であつた。

正成は一時金剛山に匿れてゐたが、翌元弘二年の夏賊が兵糧を赤坂城に運ばせて居るところを聞き、兵五百を出して之を奪つた上、味方三百人の兵を人夫と見せかけ、めい／＼の甲冑武器を米俵の如くに拵へて城に向はせ、残りの兵に之を追はせた。城中の賊は之を見て、人夫が敵に追はれて居るものと考へ、城門を開いて中に入れた。味方の兵は早速甲冑に身を固めて賊を斬りたて、難なく城をば取戻した。續いて正成は金剛山に千早城を築いて之に據つた。元弘三年の春高時は幾十萬の大兵を發して赤坂、千早に向はせたが、有名な新田義貞も之に加はつてゐた。賊軍は先づ赤坂城を攻めて之を焼拂ひ、次に千早城を圍

んだ。此の時吉野の城は陥り、護良親王は高野山に匿れられた時であつたから、吉野に向つてゐた賊兵も亦之に加はつた爲に、賊軍は非常に多く、其の總數百萬に上つたと書いた書物もある程である。然るに正成は千人にも足らぬ小勢で敵を惱まし、終に陥落を免れた。之は全く正成の計略の力である。賊軍は大軍を待みとして指圖も受けず、攻支度もせず、先を争ふて蟻の如く城を目指して匍ひ上つたが、城兵は少しも騒がず、大きな石を投げかけて一日に五六千人も殺した。そこで賊軍は「今より後は大將の指圖なくして戦ふ者を罰するぞ。」とふれまはつて戦ひを中止し、水で城兵を苦めようと考へた。然るに城中には如何なる早にも洩れることのない泉が五つあつて飲水には事を缺かない。其の上正成は多くの水槽を造つて雨水を引入れ、底に赤土を沈めて水の性を悪くしないやうにしてゐたから少しも水の心配は無かつたのである。賊はさうとは知らずして、城外の谷水を汲入れるものと思ひこみ、三千人の兵を谷川縁に出して番をさせた。併し幾晩待つても城兵は出て来ない、番兵は日を経るに従つて氣を弛め、一向用心しなくなつた。正成は其の機を見すまし、夜三百人ばかりの兵を城外に出し、夜明前に川縁の賊兵を攻散らさせた。賊は旗も幕

も打棄て、逃げ去つたが、翌日正成は其の旗を城中に立て、幕を張りまはして賊に見せつけ、「之は昨日の御殘物。御取返し願ひたい。」とからかつた。五千餘の賊兵は「あれ取戻せと。」呼はりながら、城の麓に駈寄つた。すると城兵は豫て用意の大木を落しかけて残らず殺してしまつた。之に懲りてか賊は其の後幾日も手出しをしなかつた。すると正成はもう一度賊を苦めてやらうと、藁人形を二十ばかり作つて、之に甲冑をさせ武器も持たせて、夜城の麓にならべ置き、其の前には楯を立て、其の陰に五百の兵を忍ばせた。夜明を待つて其の兵は関の聲を揚げたが、賊軍は「城の運盡きて城兵が攻出した。」といひながら、我先にと攻寄せた。五百の兵は藁人形のみを残してこつそり城中に引上げた、賊は朝霧の爲に藁人形とは氣が付かず、之を打ち取らうと近寄つた。城兵は之に向つて大きな石を四五十も落した。之が爲に賊兵三百は忽ちに殺され、半死半生の者が五百人も出來た。賊軍は愈々臆病になり、合戦を止めて陣屋の中に遊暮す外はなかつた。所が鎌倉から使が来て攻撃の催促をした。そこで今度は大工を集めて廣さ一丈五尺、長さ二十餘丈の大梯子を造り之を城に架け渡して、多くの賊兵が渡り始めた。正成は之を見て用意の松明に火をつけ盛

に之を梯子に投げつけ、唧筒を以て油を注ぎかけた。梯子は中程から燃え落ち、其の上にあつた賊兵は谷底に墜ちて悉く焼け死んだ。斯様な次第で流石の大軍も千早の孤城を攻めあぐみ、逃出すものさへ出来て来た。是より先新田義貞は義兵を起す決心をなし、家來を出して、護良親王の令旨を受けさせ、病と稱して本國上野に還つた。此の人が後に高時を滅すのである。

名和長年 勤王の軍が諸方に起つた爲に、高時は隠岐の守護佐々木清高に命じて嚴重に後醍醐天皇を警固せしめた。是より先護良親王は屢漁船にことづけて、勤王軍の様子を隠岐の行在所に御知らせになつた爲に、天皇は六條忠顯と御相談の上、或夜御輿に召され御供の忠顯に『三位局の御産が近づいたから、民家に御移し申すのである』と曰はせて行在所を出られた。時は元弘三年閏二月二十四日であつた。やがて御輿を離れて御歩行になり、或港に出て伯耆行の船に御乗りになつた。夜明の後御船は順風に帆を揚げて遙かの沖に出たが、後を見れば追手らしい船が進んで来る。船頭は御一人を船底に隠し、其の上に乾魚の俵を積上げ、知らぬ顔して釣を垂れてゐた。程なく追手は御船に飛移つて、其處此處

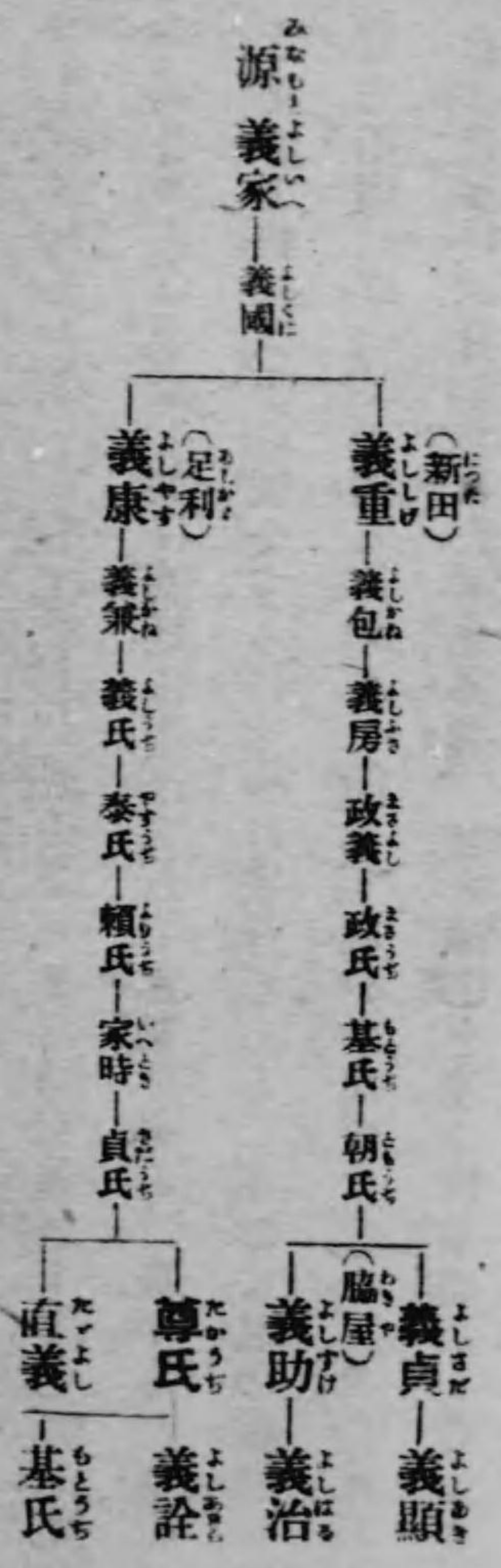
を捜した後、船頭に『若しや身分の有りさうな人を載せた船を見なかつたか。』と尋ねた。船頭はぬからず『都の人と思はれて、一人は冠、一人は立烏帽子を着た客を載せた怪しい船を見たが、其れはもう五六里も先に行つて居らう。』と答へた。追手は『其の船に相違ない。』といひながら、自分の船に飛移つて立去つた。御船は無事に伯耆の名和の港に到着した忠顯は先づ上陸して名和長年の家を探ね、事の次第を傳へた。長年は多に喜び天皇を奉迎して船上山に行在所を設けることとした。早速兵糧を其の山に運ばせ、家財を人民に與へた後、我が館を焼拂ひ、天皇を奉じて船上山に據つた。其の軍勢は僅かに百五十騎に過ぎなかつたが、白布五百反を取り出し、松葉の煙で近國の武士の紋をいぶつけて立てまはしたから、兵は山に満ちて居る様な有様に見えた。程なく佐々木清高は兵三千を率ゐて船上山に攻寄せた。併し賊兵は山上の旗を望んで先づ膽を潰し、頻りに攻破られて降参するものも少くなつた。清高は漸く一艘の小舟に乗つて隠岐に遁れ歸つたが、島の人々は清高を憎み海岸を拒ぎ固めて上陸させなかつた。清高は舟を波に委せながら敦賀に漂着して京都の六波羅に逃げこんだ。さて船上山の行在所には近國の武士共が先を競ふて味方に

参上した爲に、木の下草の蔭までも武士ばかりといふ程の有様となつた。そこで天皇は六條忠顯に六波羅の征伐を御命じになり、忠顯は三萬の兵を以て京都に逼つた。

六波羅の陥落 高時は天皇が船上山にましまして討手を京都に差向けられた事を聞き、大いに驚いて名越高家、足利高氏に大兵を授けて西上を命じた。此の時高氏は病氣であつた爲に辭退したが、高時は之を許さなかつた。元來高氏は自分が源氏の子孫でありながら北條氏に仕へて居ることを不満足に思ふてゐた上に、曩に笠置合戦の時父の喪中に出陣を命ぜられ、今復病中西上を強られた爲に、天皇の御味方になる決心で元弘三年三月二十七日に鎌倉を出發し、翌月十六日京都に到着した。翌日竊に使を船上山に出して歸順を願出で、程なく其の御許しを得たが、何喰はぬ顔で名越高家を山陽に向はせ、自分は伯耆に攻寄せる様に見せかけて丹波の篠村まで進んだ。やがて高家が赤松則村と戦つて戦死したことを聞くと、尊氏は兵を篠村八幡の社前に集め、始めて歸順の事を告げ知らせた。かくて同年五月七日則村、忠顯と聯合し、三方から六波羅を攻撃した。時の六波羅探題の一人は矢に中つて死し、一人は近江に遁れて終に自殺した。曩に六波羅に來てゐた佐々木清高も

亦近江に自殺した。そこで早速高氏は使を以て六波羅陥落の事を船上山に報告した。嘸天皇は御満足に思召されたであらう。さて此の時までも千早城を圍んでゐた鎌倉勢は、六波羅の陥落を聞いて落膽し、圍を解いて立去つた。長らく苦戦の甲斐あつて吉報を得た時の正成の喜びは如何であつたらう。

北條氏の滅亡 六波羅陥落の翌日新田義貞は義兵を上野に擧げた。新田氏は足利氏と同じく源氏の子孫で、義貞は源義家の十世の孫である。始めて新田氏を名乗つた義重以來代々上野國新田郡に住んで北條氏に事へてゐた。其の城址は今も太田町の北凡そ三十町の金山にある。



高時が大軍を發して正成を千早城に圍ませた時、義貞も其の軍に加はつてゐたが、心竊に「昔源氏は平家と共に朝廷に用ひられて忠勤を勵み、後平家が無道の行を爲すを見て之を滅し終に天下に號令するに至つた家筋である。然るに其の後我が家は勢を失つて北條の指圖に従つては居るもの、固より我が本意ではない。殊に此の頃の高時の行を見れば臣民の自分を忘れた不忠不義。自ら滅亡を速く仕業ばかりである。今兵を擧げて彼を討てば、君の御心を安め奉る事も出来、又我が家名を揚げることも出来よう。」と考へた。乃ち使を以て大塔宮の令旨を乞ひ受け、本國に歸つて其の準備を整へてゐた。かくて元弘三年五月八日軍勢を率ゐて出發すると、越後、信濃、甲斐などの兵も味方に加はり、更に進んで武藏に入ると武藏、下野、上野、常陸、上總等の同志も集り來つて、非常な大軍となつた。道中處々で北條方を破りながら鎌倉に逼り、全軍を三隊に分けた。其の一隊は小袋坂に向つて鎌倉を北より襲ひ、一隊は西より押寄せて化粧坂に進み、残りの一隊は海岸を西より進んで極樂寺の切通、及び稻村崎に迫つたが、義貞は化粧坂に向つてゐた。北條勢はそれ／＼の坂道を嚴重に守つてゐたが、三方共に次第々々に追詰められて退却し

た。併し濱手の賊軍は奮戦して一時此の方面の官軍を追返した。其の知らせによつて義貞は改めて稻村が崎方面に向つた。見れば海上には多くの賊船が浮んで居り、海水は岸を洗つて進むことが出来ない。そこで義貞は馬より下り、海神を祈つて黄金造の太刀を海中に投じた。其の爲か間もなく海水は賊船を浮べて遙の沖に退き、稻村崎には通過すべき道が開けた。義貞は大に悦び、大軍を率ゐて一時に押寄せた。思ひ懸ない攻撃に驚いて賊軍は總崩れとなつた。官軍は家に火を放ち、勢に乗じて三面より幕府に迫つた。高時は覺悟を定めて東勝寺に入り、寺に火を放つて自殺した。時に年は三十一歳。之に倣つて自殺した者は八百七十餘人もあつた。高時が暴政を行つて人望を失つてゐたに拘らず、かく多數の者が高時と死を共にしたのは、代々北條氏の恩を受けて、善かれ悪かれ、主人は大事と心得てゐた者が多かつた爲であらう。其れは兎に角、長らく幕府の執權として天下に號令した北條氏は同年五月二十二日を以て滅亡したが、高時の子時行だけは或家來に抱かれて信濃に遁れた。又鎌倉幕府最後の將軍であつた守邦親王(後深草天)は此の時職を罷めて出家せられたから、鎌倉幕府は頼朝が將軍となつた時から百四十二年の後に廢滅した。義貞は

鎌倉の占領後直ちに使を船上山に向けて差出した。(守邦親王は出家の後病に罹り、同年八月三十二歳で薨せられた)

踏破千山萬嶽烟

驚興今日到何邊

單篋直入虎狼窟

一七深探鯨鱗淵

報國丹心嗟獨力

回天事業奈空拳

數行紅淚兩行字

附與櫻花一奏九天

(齋藤監物)

大章魚を手取りにしたるしほひ哉

第三十章 建武の中興と尊氏の謀叛

天皇の御還幸 元弘三年五月十二日に六波羅陥落の報知が船上山に達した。後醍醐天皇は大に御満足の上、都へ御還幸の用意を命ぜられ、北條氏滅亡の翌日(五月二)其れとは知らずに出發なされた。御道中(十五日)嘗て高時が立て、天皇と稱せしめた光嚴院を廢して世人の迷ひを解き、日數重ねて兵庫に御到着なされた(五月三)。此の時楠木正成は兵七千を率ゐ赤松則村等と共に御出迎へ申したが、天皇は近く正成を御召しの上、「今日目出度還幸し得るは全く其方が勤王の魁をなした御蔭、満足に思ふぞよ。」との御言葉を賜はつた。此の時天皇の御満足正成の喜びは口にも筆にも表はすことが出来なかつたであらう。「唯氣にかゝるは鎌倉」と御心配の折柄、義貞の使者が馳つけて(六月)逆賊高時伏誅の事を奏上した。もう安心と上下共に大喜び、正成を先導として六月四日京都の東寺に御着になり、翌

五日隠岐に御遷幸以來十六箇月の後に目出度皇居に御還幸になつた。今宮城の二重橋前にある楠公の銅像は、正成が都へ御先導申上げた時の勇姿を示したものである。

建武中興の政

御還幸の後、天皇は親ら天下の政治を爲さるやうになり、之まで長く

武家の手に移つてゐた政權は再び朝廷に返つた。其の翌年々號を建武と改められた爲に、世の人は此の目出度い事柄を『建武の中興』といふて居る。さて此の中興の御政治で注意すべきは勤王の人々に對する恩賞である。天皇は先づ大塔宮護良親王を征夷大將軍となさつた。無論之は名譽の職名で、天下の政治を掌られる譯では無い。此の時親王は既に高野山を去つて河内の志貴山に居られたが、赤松則村の御迎へを受けて京都に御還りになつた。次いで勤王の武家の賞與を決定せられたが、天皇は足利高氏を以て勳功第一と認めて、御名(治)の一字を賜はり、高氏と尊氏と書き改めさせられた上、武藏、常陸、下總の三國を與へ、尙正三位參議を御授けになり、其の弟直義を相摸守として鎌倉を守らしめられた。新田義貞は建武元年京都に上つて従四位上に敍せられ、越後、上野、播磨の三國を授けられたが、尊氏の恩賞には及ばなかつた。楠木正成は更に下つて位は従五位下、國は攝

津、河内の二箇國に過ぎず、名和長年には因幡、伯耆を賜はつた。此の外六條忠顯等を始めとして功勞のあつた多くの人々にそれ／＼領地を賜はつて國々を治めさせられたが、奥羽地方は殊に重要な土地であるからとて北畠顯家を陸奥守とし、皇子義良親王(後の後村)を奉じて奥羽を支配せしめられた。さて此の恩賞に就いて一つの不思議は、終始勤王の爲に盡した正成が、尊氏、義貞よりも下で、尊氏が勳功第一と認められたことである。察するに尊氏は六波羅を陥落せしめた功あるのみならず、關東に於ては從來名望の殊に高かつた名家であつた爲に、此の後二心を起させない用心の爲に故ら恩賞を重ぜられたものではないかと思はれる。斯様に考へると尊氏の恩賞に就いては深く意に留るには及ばないが、殘念ながら此の時の恩賞には一つ手落があつた。即ち勤王の軍に加はつた武士で相當の功勞あるに拘はらず其の賞與極めて薄く、之に反して中興の業に左程の功は無くとも公卿達は重い恩賞に預つたことである。現に赤松則村の如きは早く義兵を起した一人であり、京都の恢復には功の多かつた人である。爲に則村が志貴山に護良親王を迎へ、其の先導となつて京都に上つた後、一時は播磨の守護職を授けられたが、其の後罪なくして之を取上げら

れ、僅に同國佐用の一莊のみを賜はつた。此の頃の武士は正成、長年等の如く忠義に凝り固まつた人ばかりではなく、寧ろ恩賞を目的に勤王の軍に加はつた者の方が多かつたのである。其等の武士は恩賞の不当を見て不平を懷き、武家政治の昔を慕ふやうになつた。此の有様を見て謀叛心を固めたのが足利尊氏である。

尊氏の野心 足利氏は新田氏と同じく源氏の子孫で、其の先祖義康以來下野の足利に住み、地名を取つて家の名としたのである。義康の子義兼が北條時政の女（源頼朝の妻）を妻としてから後、足利氏は北條氏と屢々縁組をした爲に、關東の名族として評判も高く、勢も亦強かつた。併し内心では源氏の子孫でありながら北條氏の下に立つことを不快に思ひ、折もありば北條氏に代つて天下に號令したいとの野心を持つてゐた。現に尊氏の祖父家時の如きは「我が子孫三代の中に、頼朝の如く天下の政治を掌る者を出させ給へ。」と八幡宮に祈つて自殺したのである。斯様な譯から尊氏も豫てより源氏の幕府再興の下心を懷いてゐたので、曩に天皇に歸順したのも忠義の心からではなく、一時勤王の軍に加はつて先づ北條氏を倒し、後に自分が將軍にならうとの野心からであつたのである。然るに名義のみ

にもせよ征夷大將軍となられたのは護良親王であるから、尊氏は先づ親王を除かなければ自分の望は達せられないと考へた。又護良親王は尊氏は油斷のならない野心家であることを見破して、天皇に早く尊氏を御討ちになる様に勧められた。併し天皇は尊氏を信用なかつてゐた爲に「罪なき功臣を殺すは人心を失ふ本である。」といつて、親王の御言葉を用ひにならなかつた。

護良親王弑せらる 護良親王は尊氏を除かんが爲に兵を御集めになつた。すると尊氏は天皇に「親王は謀叛の爲に兵を集めて居られます。」と讒言を申し上げた。天皇は之を信じ給ひ、和歌の會にことよせて親王を宮中に召し。武士に命じて親王を捕へしめ、やがて鎌倉に送られた。時は建武元年十一月であつた。すると尊氏の弟直義は無法にも土牢を掘つて其の中に親王を幽した。

翌建武二年七月北條氏の舊臣は兵を信濃に集め、高時の子時行を大將として不意に鎌倉に攻め入つた。直義は敗れて逃げ出したが、其の時淵邊義博に親王を害し奉れと命じた。義博は土牢に入つて「御迎へに参りました。」と申上げると、燈火の下で經文を讀んで居ら

れた親王は義博を睨んで、『其方は我が首を取る爲の使であらう。』といひながら跳りかかつて義博の太刀を奪はうとなさつた。義博は太刀を取直して、烈しく親王の御膝を打ち奉つた。既に半歳以上も牢屋の中に坐つて居られた後で、御足も御自由になり兼ねた時であるから、流石に御氣象の強い親王も其の場に御倒れになつた。急いで起上らうとなさる所に義博は乗懸り、腰刀を抜いて御胸を刺し奉らうとした。親王は頸を縮めて刀の先をしつかり御呀へになつた。其れが爲に刀の先一寸ばかりは折れてしまつた。義博は更に脇差を抜いて御胸を刺し、終に御首を搔落した。時に御年は二十八歳であつた。御首を牢屋の外に持出して見れば、刀の鋒は御口の中に残つて居り、御目は開いた儘で義博を睨みつけて居られる。さしも剛膽な義博も恐ろしさの餘、御首を藪の中に棄てて立去つた。牢内に御附き申してゐた女官は親王の御最後の有様を見て悲しさと恐ろしさに堪えず、殆んど正氣を失ふ程であつたが、やう／＼に立出でて藪の中の御首を取上げ奉つた。見れば御膚もまだ冷えず、御目も塞いで居られない。泣く／＼坊様に頼んで御葬式を営み、御髪毛を形見として都に上り、事の次第を奏上した。そこで天皇も始めて尊氏の惡逆無道を御悟り

になつた。併し此の時は尊氏が既に京都を去つた後であつた。今鎌倉に在る官幣中社鎌倉宮は護良親王の靈を祀る社で、其の後に土牢が残つて居り、數町離れた山頂に其の御墓がある。

尊氏の謀叛 鎌倉を逃出した直義は三河まで来て急を京都に報じた。尊氏は自ら關東に下つて時行を討たんことを請ひ、尙征夷大將軍に任せられんことを御願ひした。併し朝廷では尊氏の心中を疑つて共に御許しにはならなかつた。すると尊氏は勝手に兵を率ゐて八月に京都を出發した。恩賞に對して不平ある者は喜んで尊氏に従つた。そこで朝廷は尊氏を征東將軍として時行征伐を御許しになつたが、征夷大將軍たることは御許しにならなかつた。尊氏は三河に至つて直義に會ひ、共に進んで時行方を破りながら鎌倉に逼つた。時行は直ちに破られて逃去り、尊氏は鎌倉に入つた。朝廷は其の功を賞して遙に從二位を授け、更に勅使を下して尊氏を御召還しになつた。然るに尊氏は其の命に従はず、鎌倉に留まつて厚く部下に賞を與へ、降參する者を大切にして、兵を多く集めることに苦心した。慾に目の無い武士共は先を争ふて尊氏に従ひ、其の勢は頗る熾になつた。そこで尊氏は

同年十月自ら征夷大將軍と稱して鎌倉に謀叛した。

翌十一月勅使は京都に還つて、尊氏が勅命に従はざるにとを奏上した。天皇は大いに御怒りになつて尊氏の官位を削り、新田義貞に其の征伐を命じ、尙陸奥の北畠顯家にも鎌倉を攻むべき命令を御下しになつた。

官軍破れ尊氏上洛

新田義貞は六萬七千餘の兵を率ゐて鎌倉に向つたが、尊氏は兵を三河まで出して之を防いだ、義貞は頻りに賊軍を破りつゝ箱根に向つた。賊將尊氏は足柄を躓えて竹下に陣を構へ、直義は箱根を防いだ。義貞は箱根を攻めて直義を破つたが、竹下に向つた弟脇屋義助の軍中に、尊氏に内應する者があつた爲に、義助は大いに敗れて退き、其の知らせに落膽して義貞の兵士にも逃去る者が少くなかつた。義貞は已むを得ず残兵を集めて京都に還つた。

勝に乗じて足利勢は官軍の後を追ひ、天龍川に橋の無いのを氣遣ひながら川岸に来て見ると、立派な船橋が架けてあつて、番人までがついて居る。怪しんで其の譯を尋ねると、番人は「先日義貞公は此處に來られ、敗軍とはいへ大軍であるから、馬や船で渡つては遅

くもなり、又味方を失ふ恐れがあるからとて、急に船を並べ、其の上に板を渡して船橋を造られた。先づ兵士を渡らせて、最後に自分が渡られた。すると部下の人が渡り終れば不用のもの、残して置けば敵に便利を與へることになるといつて切落さうとした。義貞公は大いに立腹して、敗軍の義貞にも架け得る船橋、勝ち誇る足利勢が架けるとすれば尙更容易である。其れを知りながら故ら橋を取りこはすならば、賊は必ず義貞を卑怯と笑ふであらう。假りにも卑怯といはれることは口惜しいから、橋は其の儘残して置くと叱りつけ、自分を番人にせられたのであります。」と答へた。之を聞いて足利勢は「敵ながら義貞は天晴の名將である。かゝる名將に従ふ士卒の仕合せが羨ましいと。」褒めたて、涙を流した者まであつた。

京都では名和長年に勢多を守らせ、楠木正成に宇治を防がせ、新田義貞には淀を、脇屋義助には山崎を固めさせて賊軍を待ち構へてゐた。賊軍は其の何れにも兵を向けたが、直義は勢多に向ひ、尊氏は宇治を過ぎて淀に向つた。此の時諸國の武士は多く尊氏に味方し賊軍の勢は日に加はるばかり、殊に赤松則村の子範資が兵を率ゐて山崎に押寄せた爲

に官軍は先づ此の方面に敗れ、程なく總崩れとなつて退却し、賊軍は京都に攻入つた。時は建武二年の翌年、延元元年正月であつた。天皇は比叡山に行幸し給ひ、京都の市街は修羅の戰場となつた。

尊氏九州に走る 是より先、陸奥の北畠顯家は天皇の命を奉じて義貞と東西より鎌倉を討たんとし、義良親王を奉じて鎌倉に来て見ると、尊氏等が既に京都に向つた後であつた。是より顯家は夜を日に繼いで尊氏の後を追ふたが、間に合はず、足利勢が京都に攻め入つた後、琵琶湖を渡つて京都に入つた。是によつて官軍は急に五萬の大兵を得、奮戦して終に賊軍を破つた。時は同年同月三十日であつた。尊氏等は丹波、播磨を経て兵庫に出て、二月十三日船に乗つて九州に逃げた。天皇は比叡山から御還幸になり、北畠顯家は復親王を奉じて陸奥に下つた。

菊池氏の勤王 此の頃九州に有名なる勤王家があつた。即ち肥後の菊池氏の一族がそれである。話は少し前に戻るが、後醍醐天皇が隱岐を遁れて船上山を行在所となさつた時、菊池武時は勤王の兵を起し、筑前の少貳貞經等と、其の頃博多にゐた九州探題北條英時を討つ約束を結んだ。然るに其の後貞經等は志を變じた爲に、武時は獨り義兵を起して英時を攻めた。其の兵は僅かに百五十騎に過ぎなかつたが、何れも一騎當千の武士ばかり、必死の勢を以て攻めたた爲に、英時は將に自殺せんとした。所に貞經等が數千の兵を率ゐて英時を援けに來た。そこで武時は子武重に後の事を言ひ含めて國に歸し、自分は勇ましく戦つて終に戦死した。時は元弘三年三月であつた。

武重は父の志を繼ぎ、新田義貞が箱根に戦つた時には、其の先登となつて直義を破つた。其の後も常に義貞の軍に従ひ、天皇が比叡山に行幸なさつた時には御輿を守つて延暦寺に御供をした。尊氏等が九州に走つた後も新田の軍に加はつてゐたが、其の弟武敏が九州に於て尊氏と戦つた。尊氏が九州に遁れた時、少貳貞經は其の子に兵を授けて尊氏を迎へさせた。武敏は之を聞いて早速三千の兵を集め、急に貞經を大宰府に攻めて終に自殺せしめた。勢に乗じて武敏は更に兵を進め、尊氏、直義と博多附近の多々良ヶ濱に戦つた。此の戦ひは其の勝負の如何によつて九州に於ける官軍、賊軍の運命を決する大切な合戦であつたが、惜しい哉武

敏は破られて國に引返し、尊氏は太宰府に據つた。併し武敏は其の後も志を變ぜず、其の弟武光等と共に美名を後世に遺した。今肥後の隈府(熊本市ノ)に在る別格官幣社菊池神社には是等菊池の一族を祀つてあるのである。

新田義貞白旗城を圍む 尊氏が西に走つた後、義貞は六萬餘騎の兵を以て赤松則村を播磨の白旗城に圍んだ。此の時義貞は部下の兵士の亂暴狼籍を警めんが爲に、道に大札を立て、假令一粒の穀物を盗んでも、一軒の家を荒しても嚴重に罰するぞ。と書付けた。其の御蔭で農夫は農業を續け、商人は商業を營むことが出来た。然るに小山田高家といふ者が無斷で麥を刈つて我が陣屋に運んだ。取締の役人が之を見つけて高家を死刑にしようとした。義貞は之を聞くと『麥の爲に命を棄てる筈はない。或は兵糧が盡きたのかも知れない。』といつて、人を遣つて高家の陣屋を検査させた。程なく『甲冑、武器、馬などの戰爭道具は如何にも立派に整ふて居りますが、食物は少しもありません。』との返事を聞いて、義貞は『高家は戰爭を大切と思ふあまり罰を忘れて罪を犯したものに相違なし。部下を飢しむるは大將の恥辱。勇士は失ふ可からず、法も紊す可からず。』といつて、麥の主へは着物

二重を與へ、高家には兵糧米十石を與へた。さて則村は義貞の軍に圍まれて如何とも之を破ることが出来ない。そこで竊に使を尊氏に送つて援けを求めた。

尊氏の東上 尊氏は則村の使を受けて再び京都に攻上る決心を爲し、延元元年四月大宰府を出發した。先づ海路安藝に至つて嚴島に參詣し、更に進んで備後の鞆の津に着いた。此處で直義に二十萬の兵を授けて陸路を東に進ませ、自分は七千餘艘の舟師を率ゐて兵庫に向つた。

之を聞いて義貞は白旗城の圍を解き、兵庫に退いて急を京都に告げた。天皇は正成を御召出しの上『急いで兵庫に下り、義貞と力を合せて合戦せよ。』と御命じになつた。正成は『賊軍は定めし大勢で、疲れた味方の小勢では容易に勝つことが出来ません。此の際義貞を御召還しの上、天皇は一時比叡山に行幸あそばし、臣は河内へ還つて近畿の兵を集め賊軍の入京を待つて敵の糧道を絶ちませう。かくして後に義貞は比叡山より攻下り、正成は正面より押寄せますならば、如何なる大軍も容易に滅すことが出来ます。察するに義貞も之を上策と思ひながら、戦はずして退くは卑怯なりとの譏を恐れて居るので御座いませ

う。」と奏上した。多くの公卿は「戦争の事は大将に御委せあそばさすより外は御座いますまい。」と申上げたが、藤原清忠といふ人が進み出て「正成の申すことにも一理はあるが、敵を見ながら戦はずして、一年内に二度までも延暦寺に行幸なされては天皇の威厳を損する嫌ひが御座います。賊軍は大勢とはいへ、味方は常に小勢で勝を得たので御座います。是れ全く天皇の御徳の然らしむる所で御座いますから、やはり正成は兵庫に御下しなさるのが至當と思はれます。」と申上げた。惜哉天皇は其の言葉を御用ひになつた。正成は勅を奉じ討死の覺悟を定めて京都を出發した。願れば三年前正成は天皇を兵庫に迎へ申した上、御先導を承つて得意で京都に上つたが、今は失意で兵庫に向ふこととなつた。道は同じでありながら、上りと下りの心の中は大きな相違。凡人ならば多少の愚癡をこぼすのが普通であるが、正成には微塵も君を怨み奉る心は無い。言傳へによれば正成は常に「假にも君を怨み奉る心起らば天照大神の御名を唱ふべし。」と申してゐた程であるから攝津の櫻井驛まで進むと、後の御用に立てんが爲に、當時十一歳の我が子正行に形見として菊水の刀を渡し、「今度の戦は天下分目の大合戦、生きて再び汝が顔を見ることは叶ふ

まい。正成討死の後には賊軍は天下に蔓つて君を惱まし奉るに相違ない。さりながら汝は父の志を継ぎ味方は一人となるまでも賊を討ち夢にも忠義を忘るな。」と言聞かせて河内へ還した。今は其の地に記念の碑を建て、此の美談を永く後世に傳へて居る。

湊川の合戦 正成は七百餘人の兵を率ゐて兵庫に進み、陣を湊川の西に構へて直義の軍に當り、義貞は和田岬を守つて尊氏の水軍を防ぐこととした。やがて幾十萬の敵軍は海陸兩面より押寄せた。正成は元來大敵を恐れず、小敵を侮らざる名將である。弟正季等と共に直義の軍に駆入り、秘術を盡して奮戦し、さしもの大軍をして少しく退却せしめた。此の上は賊將を討取らんと志す折柄、直義の馬は鐵を踏んで足を傷け、進退の自由を失つた。楠木勢が近寄つて今にも首を刎ねるかと思ふ間際に、直義は危くも他の馬に乗替て逃去つた。

和田岬の方面を如何に見れば、賊の水軍の先鋒が岬を東に通つ過ぎた。義貞は其の上陸を拒がうと、岸に沿ふて東に退いた。其の隙に乗じて残りの水軍は一時にドツト和田岬に上陸し、其の一部は正成に向つた。

敵を前後に受けては叶はないとて、正成は已むなく退いたが、此の時は既に六時間も激戦した後で、士卒は残る所僅かに七十二人。自分の身には十一箇所の創を受けて居る。流石の正成も最早詮方なしと諦めて一同と或家に入り、弟正季と「願はくば七度人間に生れて國賊を滅ぼさん。」と相誓ひ、刺違へて斃れ、残りの者も皆腹搔切つて自殺した。時は延元元年五月二十五日、正成は四十三歳であつた。やがて其の首は賊軍の手に渡つたが逆賊尊氏も正成の忠義に感ずるのあまり、之を河内の正行に送つた。天皇は正成の戦死を悼み、正三位左近衛中将を贈らせられた、尙後には明治天皇が正一位を御贈りになつた。今神戸市に在る別格官幣社湊川神社は正成を祀つた社であり、其の境内に在る正成の墓には水戸の徳川光圀が建てた『嗚呼忠臣楠子之墓』の石碑がある。(大正三年十一月補正季)に從三位を贈られた)

義貞京都に還る 正成戦死の後、新田義貞は生田森に踏留まつて賊の大軍を引受けて戦つたが、衆寡敵せずして次第に退却する中に、運悪く其の馬を射斃された。直に路傍の古塚の上に立つて近寄る敵を射殺し斬りつけ苦戦の最中、駆けつけた小山田高家は「御恩返しは此の時」と我が馬を義貞に差出し、奮闘して戦死した。其の場所は神戸市の東約二里

で、其の古塚は今も其の地に残つて居る。義貞は危い所を高家に救はれ、丹波路を経て京都に還つた。同月二十七日天皇は神器を奉じ、義貞等を隨へて再び延暦寺に行幸し給ひ、尊氏等は同月二十九日に京都を占領した。曩に正成の計略を却けた藤原清忠は天皇に對し奉つても、正成に對しても不面目極まる次第で、武士ならば切腹すべきであるが、此の時もやはり比叡山へ御供をし、之より二年の後病氣の爲に大和の吉野で亡くなつた。

名和長年の戦死 京都の占領後、尊氏は頻りに兵を差向けて比叡山を攻めた。官軍は之に應戦して屢々賊軍を惱ました。六月七日の合戦に六條忠顯を失ひ、同三十日官軍が京都に攻入つた時名和長年は戦死した。其の墓は今も京都市にあるが、長年を祀る社は伯耆國名和村に在る別格官幣社名和神社で、其の宮司は長年の子孫たる名和男爵が勤めて居られる。尙長年に對して明治天皇は從三位を贈らせられた。

尊氏光明院を立つ 惡逆無道の尊氏は君に對して弓引きながら、國賊の名を恐れず、高時の惡例に倣ひ、同年八月十五日光嚴院の御弟豊仁親王を京都に立て、天皇と稱せしめた。固より神器の有らう筈もなく、尊氏が氣儘に立てた天皇であるから、後の世の人は

之を光明院と申して、正當の天皇と區別すること恰も光嚴院と同様である。尊氏も其の正當の天皇に非ざることを承知してゐた爲に、後醍醐天皇から光明院に神器の御傳へを願ふことに頭を惱まし、遂に天皇に御還幸を請ふことゝした。

甘南備神社 神戸市湊川神社の境内に甘南備

神社といふ社がある。之は楠木正成の夫人久子を祀つたものである。久子は南江正忠といふ勤王家の妹で、河内の甘南備の生れであるから、其の地名を取つて社の名にしたのである。兄の正忠は湊川の合戦に正成と共に討死した。

蜀池武時 が討死を覺悟して、子武重を肥後

國に還す時に詠んだ歌に。

故郷に今宵ばかりの命とも

知らてや人のわれを待つらん

第三十一章 吉野の朝廷

天皇の御還幸 延元元年十月尊氏は使を比叡山に遣はし、僞つて降参を願ひ、「尊氏は義貞以下御近臣の讒言によつて御怒を蒙り、遂に天下の大亂を起しましたが、固より陛下に對し奉つて謀叛を企てた譯では御座いませぬ。全く御近臣を懲らさんが爲の戦争に過ぎませぬ。讒言に苦む尊氏を哀れと思召さば、京都に御還幸下さいませ。さすれば尊氏は御近臣に對する怨みを忘れて、官位、領地は總て元の儘とし、朝廷の御政治に對しては少しも口を出しません」と奏上した。天皇は尊氏の言葉を御信用にはならなかつたが、此時は打續いた合戦の爲に比叡山は既に糧食乏しく、又援兵の來る見込みもない。此の儘に過せば程なく一同は餓死の覺悟をしなければならぬ有様であつた。そこで天皇は僞りと知りつつ尊氏の願を御許しになつた。之を聞いて尊氏は「天皇は御賢明な方と聞いて居るが、我

が計略に陥られた。時によつては偽りも大切だ。』といつて大いに悦んだ。實に大膽不敵な無禮者である。天皇は萬一の場合の用意も手落なく整へられ、尙後日義兵を擧げさせる爲に、義貞に北陸下向を命ぜられた。之が主従一世の御別れになるとは知らず義貞は十月九日皇太子恒良親王及び皇子尊良親王を奉じて御暇を告げた。かくて其の翌日天皇は御還幸を仰せ出されたが、尊氏は弟直義に御出迎を命じ、御着を待つて天皇を花山院に幽し奉り、御近臣の官位をも奪つた上、天皇に迫つて光明院に神器の御傳へを願つた。斯る事もあらうかと豫て御用意の偽神器を御渡しになつた。能く欺く者亦能く欺かるとてもいふべきか、尊氏は之を眞の神器と心得、光明院に差上げて安心し、此の上は義貞を討たせようと思ふて、斯波高經等に命じて北陸に向はせた。

天皇の吉野遷幸 天皇は花山院に二箇月餘の月日を送られたが、十二月二十一日の夜竊に御召物を變じて女と見せかけ、三種の神器を奉じて花山院を出て給ひ、大和の吉野に遷幸して此の地を皇居となさつた。時は延元元年十二月下旬で紀元一千九百九十六年であつた。楠木正行を始めとして近國勤王の武士は吉野に馳せつけ、心を盡して御所を御守り申

上げた。之より普通吉野の朝廷を南朝といひ、尊氏が擅に立てた光明院の方を北朝と謂ふやうになつた。さて京都では後に天皇が花山院を御脱出になつたことを知り、番人連中が騒ぎはじめたが尊氏は『心配するには及ばない。天皇を警固するのは随分面倒である。さらばといつて高時の如く天皇を離島に遷しても安心は出来ない。然るに天皇が自ら逃去られたのは何よりの幸福である。』と曰つて、却つて喜んだ。言ふこと、爲すことが皆癩にさはる逆賊とは尊氏のことである。』

金崎城陥る 新田義貞は皇太子及び尊良親王を奉じて比叡山を下り、更に山路を踰えて越前の敦賀に到着し、其の土地の武士に迎へられて金崎城に入つた。やがて義貞は勤王の兵を集めんが爲に、弟脇屋義助を柚山に、子義顯を越後に遣はすこととした。二人は先づ敦賀の東北數里に在る柚山城を訪ふたが、城主瓜生保及び其の弟義鑑等は喜んで官軍に應じ、義助の子義治を大將に仰ぐこととした。義顯は更に越後に向はうとした所が金崎城には斯波高經が二萬餘騎の兵を以て攻寄せた。其の評判に恐れて義顯等の兵の多くは逃去つた爲に、義顯は義助と共に夜金崎に引返した。併し次第に兵士を失つて、城に近寄つ

た時は主従僅かに十六騎であつた。十六人は相談の上鉢巻、帯を解いて之を青竹に結付け、幟の様に見せかけて此處彼處に立並べ、夜明を待つて大聲に『北陸諸國の武士僧兵二萬餘騎、官軍に應じて馳せついたり。』と呼はり、関の聲を揚げながら賊軍中に駆込んだ。賊軍は朝風に翻く幟を見て、實に大軍と打驚き、圍を解いて逃去つた。先づ安心と思ふ間もなく尊氏は復もや斯波高經、高師泰等に命じ、六萬餘の兵を以て金崎城を圍ませた。

城は三方に海を繞らして岸高く、一方は山に續いて攀ち上り難き峰を控えて居る。近づけば石を投げられ、退けば矢が届かない爲に、寄手の大軍も一時は攻寄せかねてゐた。所が或る日の夜明頃一人海を泳いで城に近づくものがある。敵か味方か將た海士かと視詰めて居ると、吉野からの使者渡理忠景である。見れば髻に詔を結びつけて居る。是を開いて義貞等は始めて天皇の吉野遷幸を知つた。賊軍の圍は延元二年正月から嚴重になり、城中の糧食は次第に乏しくなり始めた。柚山の脇屋義治は瓜生保、義鑑等をして金崎を救はしめたが、運悪く高師泰の軍に打破られて二人共に戦死した。知らせによつて柚山城中の者共が聲を限りに泣悲んでゐると、保の母は少しも悲しむ様子もなく義治の前に進み出

て『子供等の力が足らずして味方は敗軍となり、多くの士卒を失つて何とも申譯が御座いません。併し幸に二人の子が戦死しましたことは、歎きの中の悦びで御座います。此の瓜生家は君の御爲に義兵に加はつたので御座いますから假令百人千人の子を失ふとも後悔は致しません。仕合にまだ三人の子が生残つて居りますから、再び兵を擧げることが出来ます。御落膽下さいませ。』と曰つて、義治に酒を侷めた。城中の兵士は感服し、涙を拂つて元氣づいた。女とはいへ男子も及ばぬ心懸け、女丈夫の一人として傳へられて居るが、惜いことには其の姓名は傳つてゐない。(大正四年十一月瓜生保に從四位を贈られた。)

さて金崎の城中は糧食盡きて、之を得る道がない。或は海に食物を求め、或は馬を屠つて食に充てたが、遂に馬をも喰ひ盡した。此の上は援兵を柚山に求めるより外に道なしと思ふて、義貞、義助は夜竊に敵の圍を脱出して柚山に向つた。然るにまだ二人が還つて來ない中に賊軍は急に城に迫つた。城兵は飢と疲れの爲に働くことが出來ない。そこで義顯は覺悟を定めて皇太子を小舟に御載せ申し、水練の達人に御供をさせて御逃し申し、更に尊良親王の前に進んで『既に落城に近づきましたから私等は自殺を致します。併し殿下

は尊い御身の上、假令賊軍の爲に捕はれさせられても、賊は必ず御助け申しませう。どうか城を御逃げ下さいませ。」と申し上げた。親王は『予は其方達と生死を共にすべきものと心得居るぞ。さりながら自害の法を知らない。どうして自害をするものか。』と御尋ねになつた。義顯は感涙に咽びながら『斯様に致すので御座います。』と申し上げ、刀を抜いて逆手に持ち、左の脇腹に突立て、右脇にかけて掻破り、其の刀を親王の前に差置いて、うつぶしになつた。親王は刀を取上げられたが、刀の柄に血がついてゐて、シツカリ御握りになることが出来ない爲に、お袖を柄に巻きつけて終に御自害なさつた。城兵も之に續いて自殺した時は延元二年三月六日であつた。

水練の達人は皇太子を小舟に御載せ申したが、櫓も權も無いので、自分の體を舟に結付け、三十餘町の海上を泳いで海岸に着いた。幸に之を知る者も無かつたから、杣山城まで御供をしようかとも考へたが、城中残らず自害してゐる時に落延びては卑怯者と笑はれようかと心配して、土地の者に『此の御方は後日天皇とならせらるべき方である。何とかして杣山城へ御届け申して貰ひたい。』と言合め、復もや海を泳いで城に入り、終に自殺した。

其の夜斯波高經が官軍の首を實檢すると、義貞義助の首は無い。不思議に思ふて居ると、翌日心なき村人は皇太子を賊軍に差出した。そこで高經が義貞、義助の行方を御尋ねすると、皇太子は實を語れば官軍の不利と悟つて、兩人は昨日暮方自殺したが、其の死骸は火葬にした。『御答へになつた。高經は安心して皇太子を京都に御送り申した。すると尊氏は皇太子を一室に幽し奉つた。所が翌年義貞、義助等が杣山城を出て頻りに賊の城を攻落した爲に尊氏は大いに怒りて皇太子に毒薬を進めた。皇太子は『どうせ助からぬ身。』と諦めて毒と知りつ、之を飲んで薨ぜられた。時に御年は十五歳であつた。今敦賀に在る官幣中社金崎宮は皇太子恒良親王、及び尊良親王を祀る社である。

北畠顯家の戦死 延元元年正月北畠顯家は尊氏を京都に破つて後、義良親王を奉じて奥州に下り、岩代國靈山城に據つてゐた。後醍醐天皇の吉野遷幸後、新田義貞は書面を送つて顯家に西上を勧め、天皇も使を送つて顯家に京都の恢復を命ぜられた。そこで延元二年八月顯家は親王を奉じて西に向つたが、道中多くの味方を得て程なく十萬餘の大軍となつ

た。其の中には嘗て鎌倉で尊氏に破られて後、諸國に流浪してゐた北條時行も加はつてゐた。曩に天皇を惱まし奉つた高時の子が官軍に味方したのは實に妙であるが、感心にも時行は次の後村上天皇の御代に賊軍の爲に殺されるまで始終官軍の爲に働いた。さて此の時鎌倉を守つてゐた尊氏の子義詮は兵を出して顯家の軍を利根川に防がせた。顯家は之を破り、更に鎌倉を攻て義詮を逐拂つた。かくて翌延元三年正月鎌倉を出發すると義詮は復鎌倉に還つた。顯家は頻に賊を破りながら伊勢を経て奈良に入り賊軍と戦つて敗れた。そこで顯家は竊に義良親王を吉野に向はせ奉り、自分は河内に逃れて兵を集め、將に京都に攻入らんとして男山に據つたが、其の勢は甚だ盛であつた。尊氏は驚いて高師直に之を攻めさせたが、破ることが出来なかつた。師直は近國の官軍の加勢を恐れ、城を圍ませた儘自分は天王寺(今の大阪)に陣取つて、援兵の來るべき道を塞いだ。そこで顯家は城を出て大いに師直と天王寺附近に戦つたが、不幸にも破られて遂に味方は二十餘人となつた。しかも尙賊軍と戦ひつゝ、吉野に向ふ途中、和泉國で終に戦死した。時は同年五月で顯家は二十一歳であつた。天皇は大いに其の死を惜み、從一位右大臣を贈らせられた。今大阪市

の南方に在る阿部野神社及び福島縣伊達郡に在る靈山神社は顯家及び其の父親房等を祀つたもので、共に別格官幣社に列せられて居る。

新田義貞の戦死 金崎城の陥落後、義貞は半歳ばかり杣山城に據つて義兵を集め、三千餘人の味方を得た。尊氏は斯波高經をして之に當らせしたが、義貞は加賀、越後等より多くの援兵を得て、頻りに賊の城を陥れ、遂に延元三年閏七月二日高經と今の福井市附近の藤島に大合戦をした。所が賊軍は善く戦ひ官軍は殆んど退却した。義貞は大いに之を怒り自ら五十騎を率ゐて間道より高經に逼らうとした。其の途中高經が差向けた三百騎と合戦中、義貞の馬は五箇所の矢創を受けて泥田の中に斃れた。義貞は急いで起上らうとした時矢が飛び來つて其の眉間に中つた、一矢とはいへ急所の痛手、賊の手にかゝるよりはと考へて、太刀を左手に持直して後より頸にあて、右手を太刀の鋒に添へて、自ら首を掻切つた。鎌倉の討入以來義貞は官軍の杖柱と頼まれた名將であるが、僅か三十八歳を一期として壯烈悲惨の最後を遂げた。惜みても尙餘りあることである。其の墓は福井市の北凡そ三十町の所にあるが、義貞の戦死より三百二十餘年の後、福井の藩主松平光通は此處に碑を

建て、尙後に至りて明治天皇は義貞に正一位を贈らせられた。現今福井市内足羽山に在る別格官幣社藤島神社は義貞を祀る社である、

義貞戦死の後も協屋義助、義治は常に官軍の爲に力を盡してはゐたが、其の勢は一向振はなかつた。尊氏は「もう安心。」と思ふたか、此の歳八月征夷大將軍に任ぜられて、擅に幕府を京都に開き、足利幕府の基を作つた。併し將軍の任命は、所謂北朝の光明院から出たのであるから、無論尊氏は正當の將軍ではない。

後醍醐天皇の崩御 吉野に御遷幸の後、天皇は皇太子恒良親王を喪ひ給ひ、忠臣義顯、顯家、義貞等も戦死した。之に心を痛めさせられた爲か、延元四年八月九日御病氣に罹らせられた。そこで天皇は曩に奥州から御還りになつてゐた皇子義良親王を皇太子となし、専ら御療養に手を盡させられたが御病氣は日に／＼重らせられ給ふばかりであつた爲に、同じく十五日皇太子を御位に即けて第九十七代後村上天皇となし、其の翌日五十二歳で崩御あそばされた。思へば御在位二十二年の間逆賊高時、尊氏の爲に御心を痛めさせられて、殆んど一日も安き御心はなく、終に此の世を御去りになつた。御臨終に當つて、「よしや身

は南山の苔に埋もるとも、我が魂魄は留まつて常に北方の天を望まん。」と仰せられ、左の御手に法華經を持ち、右手に御劔を離されなかつたのは、誠に御道理と申上げる外はない。やがて吉野山の麓に御陵を造り、北向にして葬り奉つたが、之を塔尾陵と稱へて今も有名な如意輪堂の後に在る。又天皇を祀る社は官幣大社吉野宮と申して、之も吉野に在る、楠木正行 官軍は既に多くの名將を失つたが、尙顯家の父北畠親房及び楠木正行等が吉野に後村上天皇を守つて居り、九州では菊池武敏の弟武光等が頻に賊軍を破つてゐた爲に、賊軍も容易に手出しは出来なかつた。

さて楠木正行は櫻井驛から泣く／＼河内へ還つて後、間もなく尊氏から送つた父の首が届いた。豫てかくなることと思ふてはゐたもの、變りはてた父の首を見て、今更の如く泣き悲み、遂に覺悟を定めて竊に佛間に入つた。悲歎の中にも正行の母は之を怪み、靜に近寄つて見れば、正行は將に父の形見の刀を以て切腹せんとして居る。母は駭寄つて正行の手を押へ、「父上が其方を御還しなされたのは、君の御用に立てんが爲である。又此の御形見は腹を切れとの爲ではあるまい。父は死すとも其方は再舉を圖つて賊を滅し、君の御

心を安んじ奉れ。』との御遺言。母に傳へた其の人が、よもや忘れる筈はない。不忠、不孝に氣が附かないか。』と叱りつけた。流石は忠臣正成の妻。正行をして忠臣孝子の美名を後世に残さしめたのは皆其の力。烈女の一人に數へられるのは道理である。之より正行は母の教に従つて、日々の遊びの中にも朝敵を滅すことを忘れなかつた。かくて先帝の吉野へ御遷幸以來引續いて皇居を守り、屢々兵を出して賊軍を苦しめたが、殊に有名なのは瓜生野、四條畷の戦ひである。

瓜生野の合戦 後村上天皇の正平二年楠木正行は兵を出して紀伊に和泉に賊軍を破り、更に河内、攝津の賊を破つて京都に攻入らんとする勢を示した。此の時賊將山名時氏は攝津に出陣して正行と瓜生野に戦つた。瓜生野は今の大阪市南方約二里の地で、大和川の北岸である。六千人の賊軍は僅か二千の官軍に攻立てられ、大將時氏は身に七箇所の刀創を受けて逃失せた。そこで賊軍は總崩れとなり、先を争ふて逃出す時、橋を踏みはずして五百餘人の賊兵は川に落ち、救ひを求めながら流れ出した。時は十一月の二十六日身を切る程の寒さであつたが、正行は士卒に命じて悉く之れを引上げさせた上、親切にも着

物を着替へさせ、負傷者には藥を與へて手當をさせた。其の上數日の後馬を失つた者には馬を與へ、武器を無くしたものには武器を與へて立ち去らせた。尊氏、直義等の殘酷に引返して、敵をも愛する正行は智仁の勇者といふべきである。正行の此の親切に感激して、救はれた五百餘人の賊兵は竊に心を正行に寄せ、折もあらば御恩返しをと思ひながら別れを告げて立去つた。

尊氏は時氏の敗北を聞いて大いに驚き、豫てより我が手足の如く恃みにしてゐた高師直及び其の弟師泰に六萬の兵を授けて正行を攻めさせることにした。

四條畷の合戦 正行は最後の勝負を決すべき時機が來たと考へ、弟正時等決死の武士百四十三人を隨へて吉野の皇居に參内した。やがて正行は『父に別れましてから既に十餘年を経て正行も元氣盛りとなりました。常々若しも病に冒されて若死でも致しますならば不忠不孝の子となること、心配して居りましたが、幸ひ此度高師直兄弟と戦ふこととなりました。彼等の首を討取りますか、或は彼等に首を取られますか、二つの中の一つの決戦で御座いますから、一度天顔を拜し奉つて出陣致したう存じます。』と御取次を願つた。

時を移さず天皇は正行を近く召寄せ、御簾を高く巻上げさせられて、「親子の忠義感ずるに餘りあり。此度賊軍大擧して攻寄せ來ると聞き及ぶ。進むべき時に進み、退くべき時に退くは名將の道。朕は汝を股肱と恃めば、妄に命を棄つること勿れ。」と仰せ出された。正行は感涙に咽んで御答も出來ず、唯是を最後の參内と思ひ定めて退出し、塔尾陵に御暇を告げた上、如意輪堂の壁板に百四十餘人の氏名を書きつらね、其の終に

返らじと豫て思へば梓弓

亡き數に入る名をぞ留むる

と書きつけ置き、直に出發して河内に向つた。

かくて翌正平三年正月五日師直の軍と河内の四條畷(大阪市の東)に出會つた。官軍は僅かに六千人。賊軍の十分の一に過ぎなかつたが、正行は必死の勢を以て賊軍中に討入り、終に師直の本陣に迫つた。すると師直の家來上山高元は師直を逃がした上、自ら「高師直なり。」と稱して戦死した。正行は其の首を斬つて大に喜び二三度空中にはり上げた。程なく高元の首と知つて大に怒り、地に投棄して、蹴飛ばした。併し又思ひ直して、「我が君の爲

には憎むべき朝敵であるが、其の勇氣は感ずべきだ。外の首と同様にはしられない。」といひながら、袖に包んで差置いた。此の時は既に六時間も戦つた後で、官軍は殆んど討死し、正行正時共に身には數箇所の矢創を受けて、最早戦ふことが出來ない、正行は「賊の手にかゝれば此の上の耻辱だ。」と覺悟して正時を呼び、兄弟刺違へて斃れ、從兵も悉く自殺した。時に正行は二十三歳であつた。墓は正行戦死の場所に設けられて、今も世に珍らしい樟の巨木の下に石碑が立つて居る。後明治三十年に至つて正行に従二位を贈られ、大正三年正時に正四位を贈られた。墓を東に距ること九町の地に在る別格官幣社四條畷神社には正行が祀つてある。さて四條畷の合戦中、前年正行の恩に感じた賊兵五百餘人は官軍に味方し、奮戦して皆討死した。恩を受けて之を報ずるは當然の事ながら、敵を變じて味方となし、甘んじて官軍の爲に戦死するに至らしめたのは、世にも珍らしい事柄で、正行の爲に誇りとすべき美談である。

師直兄弟殺さる 既に述べた通り、尊氏は擅に幕府を京都に開いたが、其の政治は弟直義に委せ高師直をして之を助けさせた。然るに師直は弟師泰と共に屢々戦功を立て、

殊に四條畷の合戦に勝利を獲た爲に、益々尊氏の信用を受け、其の勢力は日に加はるばかりで、直義の勢をも凌ぐやうになつた。自然師直兄弟は傲慢無禮となり、直義に對しても無禮を加へて憚らないやうになつた爲に、直義は大に師直等を憎んで、之を殺さうとまでした。因つて尊氏は正平四年に子義詮を鎌倉より呼び還して直義に代らせ、義詮の弟基氏を鎌倉に下して關東管領とした。直義及び其の家來は不平に堪へず、終に正平六年二月に至つて師直、師泰を殺してしまつた。

直義毒殺せらる 尊氏は師直兄弟を失つて後、直義の不平を和げる爲に一時義詮を罷めさせて、政治を直義に委せたが、互に疑ひ合つてゐて安心することが出来ない。同年七月直義は京都を立ち去り遂に鎌倉に入つたが、翌正平七年二月尊氏の爲に毒を飲ませられて四十七歳で死んだ。

北畠親房薨す 正行戦死の後、所謂南朝の恃みとなる人は北畠親房であつた。子顯家が和泉で戦死を遂げた後、詔によつて陸奥に下ることとなり、伊勢國から船に乗つて東に向つた。然るに不幸にも遠江灘で暴風に遭つて、一行の船は別れ々となり、親房の船

は常陸國に漂着した。仍つて親房は常陸に上陸して屢々賊軍と戦ひつゝ、一方に於ては陣中に筆を執つて神皇正統記といふ書物を著はし、之によつて南朝の正統なることを明かにし、後村上天皇の興國四年(四條畷の合戦より五年前)吉野に還つた。其の後殆んど吉野の朝廷の柱となつて忠勤を勵んでゐたが、正平九年四月六十三歳で薨じた、明治天皇は其の功を賞して正一位を贈られ、子顯家と共に阿部野神社に祀られて居る。さて親房薨じて後、吉野朝廷の勢は甚だ派はなくなつたが、北朝も亦既に有力な人を失つて手強く敵對する程の勢は無くなつた。

足利尊氏死す 後村上天皇の正平十三年四月尊氏は春中に癰といふ腫物が出来た爲に苦み始めた。醫者よ祈禱よと手當の數を盡したが、日頃無道の天罰か、一向其の驗がない。苦みは日に増すばかり、體は次第に衰へて僅か十日ばかりの煩ひで脆くも死んでしまつた。彼れが擅に幕府を開いてからは二十一年目年は五十四歳であつた。尊氏は後醍醐天皇の篤い御恩を受けながら、之に報い奉る道をしらずして、不埒にも謀叛を企て、或は天皇を幽し、皇太子を弑し、或は皇子を害し、忠臣を殺し、遂に所謂北朝の天子を立て

て、一は年來の野心を遂げ一つには國賊の譏りを免れようとした。實に清盛、義時、高時等に勝るとも劣ることなき大逆賊と謂ふの外はない。後醍醐天皇崩御の後、尊氏は京都市外の嵯峨に天龍寺を建て、天皇の追善供養を營み又諸國に安國寺を建て、敵味方の戦死者の供養をしたが、之は彼が自ら悪と知りつゝ深い罪を犯した證據ともなり、又彼が世人を瞞着して自らを善人らしく見せかけようとした證據ともなるのである。尊氏の墓は京都市外の等持院に在り、彼れの木像も亦其の寺に在るが、後世の勤王家が或は其の木像を取出して京都の三條河原に梟したり、或は彼れの罪を數へて鞭つたりしたのは無理の無いことである。

同年十二月尊氏の子義詮が後光嚴院(光嚴院の御子)から征夷大將軍の任命を受けたが、之も無論正當の將軍ではない。之より九年の後(正平二)に義詮は三十八歳で病死し、其の子義満が家を繼いだ。

後龜山天皇の京都遷幸 後村上天皇は在位三十年にして、正平二十三年三月御年四十一歳で崩御あらせられ、其の皇子が立つて第九十八代後龜山天皇とならせられた。

(九六) 後醍醐天皇

尊良親王
 護良親王(大塔宮)
 恒良親王

(九七) 後村上天皇 — (九八) 後龜山天皇

此の年足利義満は又不正當ながら征夷大將軍に任ぜられた。之より二十四年の後、義満は使を吉野に差出して、京都へ御還幸の上、神器を北朝の後小松院に御譲りあらせられんことを願ひ出た。天皇は長く天下の人民が兵亂に苦しみ來つたことなどを思召されて、義満の請ひを許し給ひ、元中九年十月二十八日神器を奉じ、行幸の御儀式を以て吉野を御出發。閏十月三日京都市外の嵯峨の大覺寺に御着になり、二日の後に土御門殿で神器を後小松院に御譲あそばされた。是によつて後小松院は始めて第九十九代後小松天皇と申上げることとなり、義満も始めて正當の將軍と認められるやうになつた。時は紀元二千〇五十二年元中九年閏十月五日で、後醍醐天皇の吉野の遷幸より五十七年目であつた。世に之を普通南北朝の合一といふのである。茲に光嚴院以後賊の爲に立てられて京都に天皇を稱せ

られた方の御系圖を示すと次の通りである。

(九三)後伏見天皇 | 光嚴院 | (一)光明院 | (二)後光嚴院 | (三)後圓融院 | (四)後小松院(後には)

(一〇)崇光院

後龜山上皇は後に法皇とならせられ、之より三十餘年の後七十五歳で崩御あそばされ
た。義満に就いては尙述べるべきことがあるが、下巻の初めに譲ることにする。

國史美談 上卷終

年表

御代數	天皇	在位年數	年號	重要なる事柄	年紀元數
一	神武天皇	七六			元
二	綏靖天皇	三三			七六
三	安寧天皇	三九			
四	懿德天皇	三四			
五	孝昭天皇	八三			
六	孝安天皇	一〇二			
七	孝靈天皇	七六			
八	孝元天皇	五七		元年大和の橿原宮に即位の禮を行ひ給ふ 七十六年天皇崩じ給ふ	七六

年表

九	開化天皇	六一	五年傳染病流行す 六年八咫鏡、叢雲劍を大和の笠縫に祀らしめ給ふ 七年傳染病やむ	五六八 五六九 五七〇
一〇	崇神天皇	六八	二十五年八咫鏡、叢雲劍を伊勢の五十鈴川のほとりに祀らしめ給ふ	六五六
一一	垂仁天皇	九九	二十七年小碓命(日本武尊)熊襲を征伐し給ふ 四十年日本武尊蝦夷を征伐し給ふ 四十三年日本武尊伊勢の能褒野に薨じ給ふ	七五七 七七〇 七七三
一二	景行天皇	六〇		
一三	成務天皇	六〇		
一四	仲哀天皇	九	二年熊襲復叛く。天皇長門の豊浦に行幸し給ふ 八年天皇筑前香椎に行幸し給ふ 九年天皇崩じ給ふ。神功皇后新羅を征伐し給ふ	八五三 八五九 八六〇
一五	應神天皇	一一一	元年(紀元八六二)より六十九年間神功皇后攝政し給ふ 六十九年神功皇后崩じ給ふ 八十四年百濟より阿直岐來る 八十五年百濟より王仁來る	九二九 九四四 九四五

一六	仁德天皇	八七	四年詔して三年間租税を免じ給ふ 七年人民宮殿の修理を請ひしも許し給はず猶租税を免じ給ふ 十年始めて宮殿の造營を許し給ふ	九七六 九七九 九八二
一七	履中天皇	六		
一八	反正天皇	六		
一九	允恭天皇	四二		
二〇	安康天皇	四		
二一	雄略天皇	二四	二十二年豐受大神を伊勢に迎へて祀らしめ給ふ(外宮)	一一三八
二二	清寧天皇	六		
二三	顯宗天皇	三		
二四	仁賢天皇	一一		

三五	皇極天皇 (女帝)	四		二年蝦夷の子入鹿聖德太子の御子山背大兄王を害す 四年入鹿誅せられ、蝦夷自殺して蘇我氏亡ぶ 同年皇極天皇御位を御弟に譲りて上皇となり給ふ	一三〇三 一三〇五
三六	孝德天皇	一〇	大化 白雉 五 五	大化元年孝德天皇即位して中大兄皇子を皇太子とし給ふ 同年始め、年號をたてて大化といふ	一三〇五
三七	齊明天皇 (女帝)	七		元年皇極上皇重祚して齊明天皇となり給ふ 三年鎌足山階寺を山背に建つ 四年阿倍比羅夫蝦夷を討つ 五年阿倍比羅夫再び蝦夷を討つ 七年百濟に援兵を出し、天皇筑前朝倉宮に行幸し給ふ 同年天皇筑前朝倉宮に崩じ給ふ	一三一五 一三一七 一三一八 一三一九 一三二一
三八	天智天皇	二		二年我が兵百濟より歸り、朝鮮我が國より分離す 八年藤原鎌足薨す	一三二三 一三二九
三九	弘文天皇	二			

四〇	天武天皇	一五		元年山階寺を大和の飛鳥に遷し、厩坂寺といふ	一三三三
四一	持統天皇 (女帝)	一二			
四二	文武天皇	一一	大寶 慶雲 四 三	大寶二年大寶律令を出す	一三六二
四三	元明天皇 (女帝)	九	和銅 靈龜 一 七	和銅三年都を奈良に遷し給ふ 同年藤原不比等厩坂寺を奈良に遷して興福寺といふ	一三七〇
四四	元正天皇 (女帝)	一〇	同 養老 七 一	養老元年吉備眞備、阿倍仲麻呂唐に留學す 同二年法興寺を奈良に遷す	一三七七 一三七八
四五	聖武天皇	二六	神龜 天平 二〇 三 天平感寶月	天平元年藤原光明子を皇后となし給ふ 同七年吉備眞備唐より歸る 同十三年國毎に國分寺を建てしめ給ふ 同十五年大佛鑄造の詔を下し給ふ 同十九年大佛鑄造に着手す 同二十一年僧行基歿す 同年大佛成る。年號を天平感寶と改め更に天平勝寶と改め給ふ	一三八九 一三九五 一四〇一 一四〇三 一四〇七 一四〇九

四六	孝謙天皇 (女帝)	一〇	天平勝寶八 天平寶字二	天平勝寶四年大佛の開眼供養を行ひ給ふ 同八年聖武上皇崩じ給ふ	一四二二 一四一六
四七	淳仁天皇	六	同 六		
四八	稱徳天皇 (女帝)	七	天平神護二 神護景雲三	天平神護元年僧道鏡を太政大臣禪師となし給ふ 同二年僧道鏡を法王となし給ふ 神護景雲三年和氣清麻呂を宇佐に遣はし給ふ 同年和氣清麻呂大隅に流さる	一四二五 一四二六 一四二九
四九	光仁天皇	二	寶龜 一一 天應 一	寶龜元年阿倍仲麻呂唐に歿す(七十歳) 同年僧道鏡を造下野國薬師寺別當となし給ふ 同年習宜阿曾麻呂を種子島に流し給ふ 同年和氣清麻呂を召し還し給ふ 同三年僧道鏡死す 同六年吉備眞備薨す(八十三歳)	一四三〇 一四三二 一四三五
五〇	桓武天皇	二六	延暦 二四	延暦三年天皇山背長岡の新京に移り給ふ 同七年最澄比叡山に延暦寺を創む 同十三年都を平安京に遷し給ふ 同十六年坂上田村麻呂を征夷大將軍となし給ふ 同十八年和氣清麻呂薨す(六十七歳)	一四四四 一四四八 一四五四 一四五七 一四五九

五一	平城天皇	四	大同 四	大同元年空海歸りて眞言宗を傳ふ 同二十三年最澄空海唐に留學す 同二十四年最澄歸りて天台宗を傳ふ	一四六四 一四六五
五二	嵯峨天皇	一五	弘仁 一四	弘仁二年坂上田村麻呂薨す(五十四歳) 同七年空海高野山を開きて金剛峯寺を創む 同十三年最澄歿す(五十六歳)	一四七一 一四七六 一四八二
五三	淳和天皇	一一	天長 一〇		一四六六
五四	仁明天皇	一八	承和 一四 嘉祥 三	承和二年空海歿す(六十二歳) 同五年第十二回の遣唐使出發す	一四九五 一四九八
五五	文徳天皇	九	仁壽 三三 齊衡 三三 天安 二	天安元年藤原良房太政大臣に任ぜらる 同二年八月天皇崩じ給ふ	一五一七 一五一八
五六	清和天皇	一九	貞觀 一八	同年十一月藤原良房攝政となる(人臣攝政の始) 貞觀八年最澄に傳教大師の諡を賜ふ 同十四年藤原良房薨す	一五二六 一五三二
五七	陽成天皇	九	元慶 八	同十八年藤原基經攝政となる 元慶四年藤原基經太政大臣に任ぜらる	一五三六 一五四〇

五八	光孝天皇	四	仁和	三	仁和三年八月天皇崩じ給ふ	一五四七
五九	宇多天皇	二	仁和一	九	同年十一月藤原基經に關白の詔を給ふ(關白の始) 寛平元年高望王を臣籍に列し平の姓を賜ふ 同三年基經薨じ、子時平家を繼ぐ 同年菅原道眞を用ひ給ふ 同六年遣唐使を停め給ふ	一五四九 一五五一 一五五四
六〇	醍醐天皇	三	昌泰	三	昌泰二年藤原時平を左大臣、菅原道眞を右大臣とし給ふ 同年宇多上皇法皇となり給ふ(法皇の始) 延喜元年菅原道眞太宰權帥に左遷せらる 同三年菅原道眞薨す(五十九歳) 同九年時平薨す(三十九歳) 同二十一年空海に弘法大師の諡を賜ふ 延長元年菅原道眞を本官に復し正二位を贈り給ふ	一五六一 一五六三 一五六九 一五八一 一五八三
六一	朱雀天皇	一	承平	七	同八年藤原忠平攝政となる 天慶三年平將門誅せらる 同四年藤原純友誅せらる	一五九〇 一六〇〇 一六〇一

六二	村上天皇	二	天曆	四	天曆元年京都に北野神社を建てて菅原道眞を祀る 應和元年經基王を臣籍に列し、源の姓を賜ふ	一六〇七 一六二一
六三	冷泉天皇	三	安和	二		
六四	圓融天皇	一	貞元	三		
六五	花山天皇	三	寛和	二		
六六	一條天皇	二	永祿	二	正暦四年菅原道眞に左大臣正一位を贈り次いで太政大臣を贈り給ふ 長徳元年藤原道長を右大臣とし給ふ 同二年藤原道長を左大臣とし給ふ 長保二年藤原彰子を中宮となし給ふ	一六五三 一六五五 一六五六 一六六〇
六七	三條天皇	六	長和	五	長和元年藤原妍子を中宮となし給ふ 同五年後一條天皇即位し給ひ藤原道長攝政となる 寛仁元年藤原道長の子頼通攝政となり、同道長太政大臣に任ぜらる	一六七二 一六七六 一六七七

六八	後一條天皇	二二	萬壽	治安	同二年藤原威子の中宮となし給ふ 同三年藤原頼通關白となる 治安元年藤原嬉子を敦良親王(後の後朱雀天皇)の妃とし給ふ 治安二年法成寺成る 萬壽二年嬉子親仁親王(後の後冷泉天皇)を生みて薨ぜらる 同四年藤原道長薨す(六十二歳) 長元々々平忠常下總に叛く 同二年平直方忠常を討つ。克たず 同三年源頼信忠常の征伐を命ぜらる 同四年平忠常降りて後病死す	一六七八 一六七九 一六八一 一六八二 一六八五 一六八七 一六八八 一六八九 一六九〇 一六九一
六九	後朱雀天皇	一〇	長曆 長久 寛德	永承 天喜	永承六年安倍頼時陸奥に叛く 同七年藤原頼通宇治に平等院を建つ(翌年成る) 天喜四年源頼義安倍頼時を討つ 同五年安倍頼時誅せらる	一七一 一七一二 一七一六 一七一七
七〇	後冷泉天皇	二四	治曆	延久	康平五年安倍貞任誅せらる(前九年の役) 同七年源頼義京都に歸る 治曆四年後三條天皇即位し給ひ、藤原教通關白となる	一七二二 一七二四 一七二八

七四	鳥羽天皇	一七	天仁 永久 永安	天仁 永仁 天永	天仁元年源義家卒す 保安四年天皇位を崇徳天皇に譲り給ふ 大治四年白河法皇崩じ給ふ	一七六八 一七八三 一七八九
七三	堀河天皇	二二	嘉承 長和 承徳	嘉承 永長 承徳	嘉承二年天皇崩じ給ひ鳥羽天皇即位し給ふ 永長元年白河上皇法皇となり給ふ 寛治元年清原武衡、家衛殺さる(後三年の役)	一七四七 一七五六 一七六七
七二	白河天皇	一五	應徳 承保 承暦	延久 承保 承暦	延久五年後三條法皇崩じ給ふ 應徳三年天皇位を堀河天皇に譲り、院に在りて政を聽き給ふ	一七三三 一七四六
七一	後三條天皇	五	延久	延久	延久四年天皇位を白河天皇に譲り給ふ	一七三二

七五	崇徳天皇	一九	長承 永治	一六三一	長承元年平忠盛昇殿を許さる 永治元年鳥羽上皇法皇となり給ふ。天皇位を近衛天皇に譲り給ふ	一七九二 一八〇一
七六	近衛天皇	一五	久仁久天康 壽平安養治	二一六二	久壽二年天皇崩じ給ひ、後白河天皇即位し給ふ	一八一五
七七	後白河天皇	四	保元	三	保元々々鳥羽法皇崩じ給ふ。同年保元の亂あり 同三年天皇位を二條天皇に譲り給ふ	一八一六 一八一八
七八	二條天皇	八	平治 永曆 應保 長寬	一一二	平治元年平治の亂あり 永曆元年源義朝殺され、源頼朝伊豆に流さる 應保二年重仁親王薨じ給ふ 長寬二年崇徳上皇讃岐に崩じ給ふ	一八一九 一八二〇 一八二二 一八二四
七九	六條天皇	四	仁安	三	仁安二年平清盛太政大臣に任ぜらる 同三年天皇位を高倉天皇に譲り給ふ	一八二七 一八二八
			嘉應	二	嘉應元年後白河上皇法皇となり給ふ 同二年源爲朝大島に自殺す(三十二歳)	一八二九 一八三〇

八〇	高倉天皇	一三	承安 安元 治承	四二	承安二年平清盛の女徳子の中宮となし給ふ 同四年源義経鞍馬寺より奥州に下り藤原秀衡に頼る 安元二年六條上皇崩じ給ふ 治承元年鹿谷の變あり 同二年中宮(徳子)皇子(後の安徳天皇)を生み給ふ 同三年平重盛薨す 同四年平清盛後白河法皇を幽し奉る(約半年間) 同四年天皇位を安徳天皇に譲り給ふ	一八三二 一八三四 一八三六 一八三七 一八三八 一八三九
八一	安徳天皇	六	養和 壽永	一四	同四年源頼朝以仁王を奉じ兵を擧げて戦死す(五月) 同年源頼朝兵を起し(八月)、源義仲も亦兵を擧ぐ(九月) 同年平維盛等富士川に敗れて西に走る(十月) 同年源義経奥州より來りて頼朝を助く 養和元年高倉上皇崩じ給ふ 同年平清盛薨す(六十四歳) 壽永二年俱利伽羅峠の戦にて平維盛等敗走す 同年平宗盛天皇を奉じて筑前の太宰府に走る 同三年正月宇治川の合戦あり。義仲粟津に敗れ死す 同年二月一の谷の戦あり。八月範頼九州に向ふ	一八四〇 一八四一 一八四三 一八四四

八二	後鳥羽天皇	一四	建久	九	同四年二月屋島の戦あり。三月瓊浦の戦あり。平氏滅ぶ	一八四五
八三	土御門天皇	一三	正治 建仁 元久 建永 承元	二 三 二 一 二 四	文治元年頼朝國々に守護、地頭を置く 同二年源義経、藤原秀衡に頼る 同三年藤原秀衡卒す 同五年藤原泰衡、源義経を殺す 同年源頼朝藤原泰衡を滅し、奥羽平定す 建久三年三月後白河法皇崩じ給ふ(六十六歳) 同年七月源頼朝征夷大將軍に任ぜらる 同四年頼朝富士の裾野に持す。範頼殺さる 同九年天皇位を土御門天皇に譲り給ふ 正治元年源頼朝薨じ(五十三歳)子頼家家を繼ぐ 同二年梶原景時等殺さる 建仁二年源頼家征夷大將軍に任ぜらる 同三年將軍頼家廢せられ弟實朝征夷大將軍に任ぜらる 同年北條時政執權となる 元久元年源頼家害せらる(二十三歳) 同二年北條義時執權となる 承元四年天皇位を順徳天皇に譲り給ふ	一八四六 一八四七 一八四九 一八五二 一八五二 一八五三 一八五八 一八五九 一八六〇 一八六二 一八六三 一八六四 一八六五 一八七〇

八四	順徳天皇	一二	建暦 建保 承久	二 六 三	建保三年北條時政卒す(七十八歳) 同五年僧公曉、關八幡宮の別當となる 同六年政子從二位に叙せらる 同年將軍實朝右大臣に任ぜらる 承久元年正月將軍實朝害せらる(二十八歳) 同年七月藤原頼經鎌倉に下る(二歳) 同三年四月天皇位を仲恭天皇に譲り給ふ 同年五月承久の亂起る。義時天皇を廢し、三上皇を流し、後堀河天皇を立て奉る	一八七五 一八七七 一八七八 一八七九 一八八一
八五	仲恭天皇	七十餘日	貞應 元仁	二 一	貞應元年義時土御門上皇を土佐より阿波に遷し奉る 元仁元年義時卒す(六十二歳) 同年北條泰時執權となる 嘉祿元年政子薨す(六十九歳) 同二年藤原頼經征夷大將軍に任ぜらる 寛喜三年土御門上皇阿波に崩じ給ふ(三十七歳) 貞永元年天皇位を四條天皇に譲り給ふ	一八八二 一八八四 一八八五 一八八六 一八九一 一八九二
八六	後堀河天皇	一二	嘉祿 安貞 寛喜 貞永	二 二 三 一	文暦元年仲恭上皇(十七歳)後堀河上皇(二十三歳)崩じ給ふ	一八九四

八七	四條天皇	一二	嘉祿 仁治	三 一 一	延應元年後鳥羽上皇隱岐に崩じ給ふ(六十歳) 仁治三年天皇崩じ給ひ(十二歳)後嵯峨天皇即位し給ふ	一八九九
八八	後嵯峨天皇	五	寛元	四	同年執權泰時卒す(六十歳) 同年順德上皇佐渡に崩じ給ふ(四十六歳) 寛元二年將軍賴朝廢せられ、子賴朝將軍に任ぜらる 同四年天皇位を後深草天皇に譲り給ふ	一九〇四
八九	後深草天皇	一四	寶治 建長 康元 正嘉 正元	二 七 一 二 一	同年北條時頼執權となる 建長四年將軍賴朝廢せられ、宗尊親王征夷大將軍に任ぜられ給ふ 康元元年時頼執權を辭して出家す 正元々々天皇位を龜山天皇に譲り給ふ	一九一六
九〇	龜山天皇	一六	文應 弘長 文永	一 三 一	弘長三年時頼卒す(三十七歳) 文永三年將軍宗尊親王廢せられ、子惟康親王之に代り給ふ 同五年閏正月蒙古の國書鎌倉幕府に達す 同年三月北條時宗執權となる(十八歳) 同八年蒙古の使者來る (同年蒙古國號を元と改む)	一九二六

九一	後宇多天皇	一四	建治 弘安	三 〇	同十年元の使者來る 同十一年天皇位を龜山天皇に譲り給ふ 同年十月元軍來寇す(文永の役) 建治元年元の使を相模の龍の口に斬る 弘安二年元の使者を博多に斬る	一九三五
九二	伏見天皇	一二	正應 永仁	五 六	正應二年將軍惟康親王廢せられ、久明親王將軍に任ぜられ給ふ 永仁六年天皇位を後伏見天皇に譲り給ふ	一九四九
九三	後伏見天皇	四	正安	三	正安三年天皇位を後二條天皇に譲り給ふ	一九六一
九四	後二條天皇	八	乾元 嘉元 徳治 延慶	一 三 二 一	嘉元三年龜山法皇崩じ給ふ(五十七歳) 延慶元年將軍久明親王廢せられ子守邦親王將軍に任ぜられ給ふ。此の年天皇崩じ給ひ花園天皇即位し給ふ	一九六五
九五	花園天皇	一一	延慶 應長 正和 文保	二 一 一 二	正和五年北條高時執權となる(十四歳) 文保二年天皇位を後醍醐天皇に譲り給ふ	一九七八

九六 後醍醐天皇

二二

元應	元亨	正中	嘉曆	元徳	元弘	建武	延元
二	三	二	三	二	三	二	四
<p>正中元年天皇幕府を討たんことを謀り給ふ。(正中の變)</p> <p>同二年高時藤原資朝を佐渡に流し、藤原俊基を釋す</p> <p>元弘元年天皇再び幕府を討たんことを謀り給ふ。</p> <p>八月幕府の軍入京、天皇笠置山に幸し給ふ</p> <p>同年九月高時光嚴院を立つ。笠置陥る。楠正成赤坂城に據る</p> <p>同二年三月高時天皇を隠岐に遷し奉る。楠正成千早城を築く</p> <p>同年五月高時藤原藤房等を流し、六月資朝を佐渡に俊基を鎌倉に斬る</p> <p>同三年閏二月天皇伯耆に渡り給ふ</p> <p>同年五月七日足利高氏、六條忠顯等京都を恢復す</p> <p>同年五月二十二日新田義貞鎌倉を陥れ北條氏亡ぶ</p> <p>同年五月二十三日天皇船上山を御出發。六月五日京都に御還幸</p> <p>同年六月護良親王征夷大將軍に任ぜられ給ふ</p> <p>同年八月守邦親王薨じ給ふ</p> <p>同年十月北畠顯家義良親王を奉じて陸奥に赴く</p>	<p>一九八四</p> <p>一九八五</p> <p>一九九一</p> <p>一九九二</p> <p>一九九三</p>						

<p>建武元年十一月護良親王鎌倉に幽せられ給ふ</p> <p>同二年七月北條時行兵を起して鎌倉に入る</p> <p>同年八月尊氏時行を伐ちて之を破り、十月鎌倉に叛く</p> <p>同年十二月足柄、箱根の戦あり。尊氏西上す</p> <p>延元々年正月尊氏京都に入り、天皇延暦寺に幸し給ふ</p> <p>同年二月尊氏九州に奔り天皇還幸し給ふ</p> <p>同年三月多々良濱の戦あり</p> <p>同年五月正成湊川に戦死し天皇再び延暦寺に幸し給ふ</p> <p>同年六月六條忠顯、名和長年戦死す</p> <p>同年八月尊氏光明院を立つ</p> <p>同年十月天皇京都に還幸し給ふ</p> <p>同年十二月天皇吉野に幸し給ふ</p> <p>同二年三月金崎城陥る</p> <p>同三年五月北畠顯家和泉に戦死す(二十一歳)</p> <p>同年閏七月新田義貞越前藤島に戦死す(三十八歳)</p> <p>同年八月足利尊氏擅に幕府を京都に開き將軍と稱す</p> <p>同四年八月天皇崩御(五十二歳)後村上天皇即位し給ふ</p>	<p>一九九四</p> <p>一九九五</p> <p>一九九六</p> <p>一九九七</p> <p>一九九八</p> <p>一九九九</p>
--	---

<p>九八 後龜山天皇</p>	<p>九七 後村上天皇</p>
<p>二五</p>	<p>三〇</p>
<p>正平 建中 天文 弘治 元中 二 三 三 六 九</p>	<p>興國 正平 六 二 三</p>
<p>元中九年十月足利義滿天皇に御還幸を請ひ奉る。 同年閏十月天皇京都に還幸して神器を後小松天皇に傳へ給ふ</p>	<p>正平二年十一月瓜生野の戦あり 同三年正月楠木正行、弟正時河内の四條畷に戦死す 同四年尊氏子基氏を關東管領とす 同六年二月高師直、弟師泰殺さる 同七年二月足利直義殺さる 同九年北畠親房薨す 同十三年足利尊氏病死し(五十四歳)義詮繼ぐ 同二十二年足利基氏死し子氏満繼ぐ 同年足利義詮死し子義満繼ぐ 同二十三年後村上天皇崩御(四十一歳)後龜山天皇即位し給ふ</p>
<p>二〇五二</p>	<p>二〇〇七 二〇〇八 二〇〇九 二〇一〇 二〇一一 二〇一二 二〇一三 二〇一四 二〇一八 二〇二七 二〇二八</p>

不許複製

大正七年九月一日印刷
大正七年九月八日發行

定價金九十錢

編者

北垣恭次郎



口談美史國口
卷上

<p>發行者 增田義一 東京市京橋區南紺屋町十二番地</p>	<p>印刷者 笠間音次 東京市芝區愛宕町三丁目二番地</p>	<p>發行所 東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社 電話 東京 八七四、八七五、八七六、八八九 新橋 口 三三二、六番</p>
------------------------------------	------------------------------------	--

行印社會式機刷印洋東

<p>□ 日本歴史通覽 <small>冊大</small> 品切 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 日本歴史通覽 <small>冊大 用生學</small> 近刊 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 東洋歴史通覽 <small>冊大</small> 近刊 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 開國大勢史 侯爵 大隈重信閣下著</p> <p>□ 江戸俠客物語 三版 坪内、三上兩博士序 林和先生著</p> <p>□ 江戸むらさき 三版 文學士 笹川臨風先生著</p> <p>□ 清教徒神風連 再版 福本日南先生著</p> <p>□ 栗山大膳 再版 福本日南先生著</p>	<p>□ 日本歴史通覽 <small>冊大</small> 品切 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 日本歴史通覽 <small>冊大 用生學</small> 近刊 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 東洋歴史通覽 <small>冊大</small> 近刊 文學士 高桑駒吉先生著</p> <p>□ 開國大勢史 侯爵 大隈重信閣下著</p> <p>□ 江戸俠客物語 三版 坪内、三上兩博士序 林和先生著</p> <p>□ 江戸むらさき 三版 文學士 笹川臨風先生著</p> <p>□ 清教徒神風連 再版 福本日南先生著</p> <p>□ 栗山大膳 再版 福本日南先生著</p>	<p>菊郵定 稅價 判十四 總八 布錢圓</p> <p>四郵定 六稅價 判未未 總 布定定</p> <p>四郵定 六稅價 判未未 總 布定定</p> <p>菊郵定 稅價 判十五 總六 冊錢圓</p> <p>四郵定 六稅價 判六九 總十 布錢錢</p> <p>四郵定 六稅價 判六九 總十 布錢錢</p> <p>四郵定 六稅價 判八一 總十 布錢圓</p> <p>四郵定 六稅價 判八一 總十 布錢圓</p> <p>四郵定 六稅價 判八一 總十 布錢圓</p> <p>菊郵定 稅價 判十一 總六十 布錢錢</p>
--	--	---

<p>□ 芳水詩集 三十五版 日本少年主筆 有本芳水先生著</p> <p>□ 詩旅 十三版 日本少年主筆 有本芳水先生著</p> <p>□ 集ふる郷 四版 日本少年主筆 有本芳水先生著</p> <p>□ 幼きものに 六版 島崎藤村先生著</p> <p>□ 口語詩集 赤い椿 三版 少女の友主筆 星野水裏先生著</p> <p>□ 國史美談 近刊 東京高師助教授 北垣恭次郎先生著</p> <p>□ 學生論 再版 男爵 奥田義人先生著</p> <p>□ 趣味の動物 再版 理學博士 谷津直秀先生著</p>	<p>菊郵定 半稅價 載四六 美十 本錢錢</p> <p>菊郵定 半稅價 載四六 美十 本錢錢</p> <p>菊郵定 半稅價 載四六 美十 本錢錢</p> <p>三郵定 六稅價 判六六 美十 本錢錢</p> <p>菊郵定 半稅價 載四卅 美五 本錢錢</p> <p>四郵定 六稅價 判六九 總十 布錢錢</p> <p>四郵定 六稅價 判六八 總十五 布錢錢</p> <p>四郵定 六稅價 判八八 總十五 本錢錢</p>
--	---

滑稽 小説集 笑の爆弾 八版 日本少年編輯長 松山思水先生著 四郵定 六稅價 判六五 美十 本錢錢

ニコく 双紙 再版 日本少年編輯長 松山思水先生著 四郵定 六稅價 判六七 美十 本錢錢

世界童話集 東洋の巻 三版 萩野博士序 榎本秋村先生著 四郵定 六稅價 判八一 圓卅 美 本錢錢

世界童話集 西洋の巻 再版 萩野博士序 榎本秋村先生著 四郵定 六稅價 判八一 圓卅 美 本錢錢

お伽夜話 八版 幼年の友主筆 岩下小葉先生著 四郵定 六稅價 判六五 美十 本錢錢

訂正 優等學生勉強法 十一版 實業之日本社編 三郵定 六稅價 判四四 總十 布錢錢

名士 青年勉強法 再版 實業之日本社編 菊郵定 稅價 判十一 圓卅五 總二 布錢錢

各種 職業青年無學資立身法 再版 實業之日本社編 四郵定 六稅價 判八一 圓十 總 布錢錢

小學 兒童おさらひの仕方 二十八版 東京兩高等師範共著 學校教官十六名 四郵定 六稅價 判六五 全一 冊 錢錢

模範 讀方 獨習 四版 東京女子高師教官 荒井忠吉先生著 四郵定 六稅價 判六五 全一 冊 錢錢

模範 算術 獨習 十五版 東京女子高師教官 荒井忠吉先生著 四郵定 六稅價 判六五 全一 冊 錢錢

笑ひながら 正式の算術 十七版 中村八郎先生著 四郵定 六稅價 判六五 全一 冊 錢錢

笑ひながら 中等算術 上下 三版 中村八郎先生著 四郵定 六稅價 判六五 全二 冊 錢錢

實用 能書 術 五版 西脇吳石先生著 四郵定 六稅價 判六五 全一 冊 錢錢

桂月學生文範 上下 再版 大町桂月先生著 三郵定 六稅價 判各冊 總八 布錢圓

校歌ローマンス 七版 出口鏡先生著 三郵定 六稅價 判六五 總 布錢錢

<p>□ 少女の涙の物語 二十二版 <small>幼年の友主筆</small> 岩下小葉先生著 四郵定 六税價 三十五 判列美 本錢錢</p>	<p>□ お伽新集 再版 小野小峽先生著 四郵定 六税價 八十 判列美 本錢錢</p>	<p>□ 才トギ三版 <small>坪内博士補修</small> 矢口達先生著 四郵定 六税價 八十 判列美 本錢錢</p>	<p>□ 繪入どんたく 十九版 竹久夢二先生著 四郵定 六税價 五十 判列美 本錢錢</p>	<p>□ 繪入青い船 新刊 竹久夢二先生著 菊郵定 六税價 八十 判列美 本錢圓</p>	<p>□ 小説鼓川集 再版 富岡鼓川先生著 菊郵定 六税價 四十 判列美 本錢錢</p>	<p>□ 少女讀本 再版 村井弦齋先生著 四郵定 六税價 八十 判列美 本錢圓</p>	<p>□ 我が子の金錢教育 再版 <small>商學士</small> 麓三郎先生著 四郵定 六税價 九十 判列美 本錢錢</p>
---	--	--	---	---	---	--	---

376
188

終